文科大學教授文學博士黒川眞頼題
第一高等學校教授落合直文閲
神宮皇學館教授井上頼文述

竹取物語講義

東京書肆
尚古堂
尚榮堂
合梓

国立国会
29.7.22
図書館
337323

913.31 I474t

凡例

○此の書の本文は、數本を照らして校合し、あやまりを正し、脱ちたるを補ひたり。また、本文は、もと、書きつゞけなるを、今、見やすからしめん爲めに、句讀をきり、章段を分かてり。

○此の書の本文中に、かぐや姫おひたち、つまどひなどゝ、掲げて、段を分てるは、見やすからしめんが爲めなり。こは、はやく、田中大秀ぬしの設けられたる名を取れるなり。但し、田中ぬしは、九段に分けられたるを、今、富士の烟といへる標題を設けて、更に十段となしたり。

○此の講義は、ひたすら、初學の解しやすからんことを眼目とせり。さ

れば、故事考證等は、其の要を摘みて掲げ、意義の數說に分れたる所などは、其の中、よろしと覺ゆる一說のみを擧げたり。

○此の講義には、釋義と譯解とを並べあげたり。こは、著者が、初學の爲めに、深く意を用ゐたるところなり。そは、一辭一句の意義を知りても、其の全文の意味を會得し得ざること、初學者にまぬかれざるは、著者の常に實驗するところなればなり。

○解譯は、つとめて、曉りやすからんことを主とし、談話體にものせり。今、譯述の上につきて、注意すべき節々を左に列擧す。

一　譯解の文は、文意を明らかにせん爲めに、一句ごとに、行を改めたり。應答の談話は、一字さげにし、談話中の談話は、二字下げにし、歌、書簡の文等は、三字を下げて、一々之れを區別せり。

二　含みことばをはじめ、言外に匂はせたる意義はいふに及ばず、其の他曉りやすからん爲めに、必要と覺ゆる所々には、一々其の印して、語を補ひ、文意を明らかにせり。

三　又、そのまゝ、直譯しては、かへりて曉りにくからんと覺ゆる所々は、適宜に意譯して、其の文義を詳かにせり。

四　二種の意義をかねたる語などは、一々其の下に註して、之れを辨

刪せり。

五　譯解の文は、大概、音便を用ゐたり。正しき假字を用ゐては、發音のことなる故に、却りて、兒童の讀みにくからんことを思ひてなり。

○譯述の例につきては、右に述べたる外に、猶、いふべきことあれど、一々擧げは、かへりて煩らはしくならんことを恐れて、其の大要のみにとゞめたり。なほ、本文をよく讀み味はゝば、此講義が、初學の爲めに、深く意を用ゐたることは、おのづから、知られぬべし。

○本書に用ゐたる、符標の主なるものを、左にかゝぐ。

、	讀
。	句
（　）	註
『　』	應答の談話　及び、書簡の文
「　」	談話中の談話
‖	目じるし
｜	含みことば、及び、補ひたることば

○此の講義編述につきては、學友‖中西健郎ぬしと、しばしば推敲して益を得たること多し。一言こゝに其の厚意を謝す。

明治二十八年、乙未、十二月の末つかた、

著者志るす

竹取物語講義

落合直文閲
井上頼文述

竹取物語は、竹取の翁の物語なり。物語とは、すべて世の中の面白きことがら、あはれなる話などを書き綴れる小説なり。我が國には、古くよりあまたの物語あるなかに、此の竹取物語は、最ふるく、今より殆千年前の昔に作られし物なり。されば、これを物語の出來はじめの祖とも云へり。

赫映姫おひたち

これより、かぐや姫のおひたちのことをしるす

いまはむかし、竹取の翁といふものありけり。野山にまじりて、竹をとりつゝ、よろづのことにつかひけり。名をば、さぬぎのみやつこまろとなんいひける。

【釋義】いまはむかし　今よりは、昔の事にてありけりとの意なり。おほかた、ものがたり類は、今より昔の事を語る體に書けるものなれば、いまはむかしと發端に書きいだす例なり◉竹取の翁　竹を取りて渡世とせる翁なれば、世の人、竹取の翁と呼べるなり。翁は、年老いたる人をいふ稱◉けり　過ぎ去りたる意を示す辭、俗に、なになにしたといふたに當る。但し、歎きの意を含めるけりは、俗に、たわいまァといふほどの意◉野山にまじりて　野べに山べに分け入りての義。後撰集の歌に、春さめのふらば野山にまじりなん梅の花笠ありといふなり』とあるも、こゝと同じ意なり◉竹をとりつゝ　竹を取りて、竹を取りての意。即ち、たびたび竹を取ることをいふ◉よろづの事につかひけり　竹を取りて、籠にくみ、また、箸に作るなど、種々の細工物につかひしとなり◉さぬぎのみやつこまろ　讃岐の造麻呂にて、讃岐は姓、造麻呂は名なり。されど、いにしへは、姓名をもすべて、たゞ、名とのみいへり。古書を讀まん人は心得おくべし。

さて、かゝる名は、みな、假に作り設けて書けるなり。實にその人ありしにはあらず。たまたま、歷史などに見えたる人の名もあれど、そは便宜によりて取りいでたるのみにて、別段その人に關係あるにあらず。以下の人名も、皆これに同じ

◉なんいひける　なんは、物事をそれとたしかに指し定むる辭にて、おほかた、ぞといふに同じ。さて、此の辭あるによりて、通例けりと切る所を、けると結びたるなり。こは國文の定まりたる格なり。猶、此の係り結びの格につきては、一通り其の大要をも説明せまほしかれど、さては、かへりてわづらはしく、また、其等のことを委しく説明するは、此の講義の主意にもあらねば、此等のことは、總て文典にゆづりて、こゝには云はず。見ん人其の意してよ。

【譯解】今では、昔の事であるが、竹取の翁と云う人があッた。此の翁は、つねに野や山に分け入ッて、竹を取り、竹を取りして、それをいろいろな細工物につかうたわい。

其の翁の、實の名をば、讃岐の造麻呂とサ云うたである。

その竹のなかに、もとひかるたけなん、ひとすぢありける。あやしがりて、よりて見るに、筒のなか、ひかりたり。三寸ばかりなる人、いと、うつくしうて居たり。

翁いふやう、『われ、朝ごと夕ごとに見る竹の中におはするにて知りぬ。こになり給ふべき人なンめり』とて、

手にうちいれて家にもち來ぬ。　めのおうなにあづけてやしなはす。うつくしきことかぎりなし。　いと、　をさなければ、籠に入れてやしなふ。

【釋義】もとひかるたけ　根幹の光る竹なり◎ひとすぢ　一筋にて、一本といふに同じ◎あやしがりて　怪しき事と思ひてなり◎筒　竹の節と節との間の空虚なる所をいふ◎いと　甚、最も、極めてなどいふ意に當る◎うつくし　もと、愛の字の意にて、俗に、愛らしいといふに當る。今、美麗の義にのみ用うるは轉れるなり◎朝ごと夕ごと　毎朝毎夕なり◎おはする　御座の義にて、敬語なり。俗に　おいでなさるといふに當る◎こになり給ふべき　翁の子におなりなさるであらうとの意にて、こゝは、子に籠をいひかけたる滑稽なり。籠は、竹を編みて作れる器にて、今いふ、かごのことなり。翁が常に竹を取りて、籠などを作れば、子に籠の意をふくませて、おもしろく書けるなり。下にもかゝるおもしろき筆づかひの所あまたあり◎なゝめり　なるめりの訛にて、なるは、にあるの意。めりは、と見える、また、樣子ぢやなどいふ意の辭◎手にうちいれて　掌中に入れてなり、うちは、打ち捨て、打ち置きなどのうちにて、語の

勢を强めんために、添ふる辭◎めのおうな　妻の嫗にて、翁が妻の老嫗のことなり。おうなは、おみなの音便にて、老女をいふ稱◎やしなはす　令レ養にて、發育せしむるをいふ◎かぎりなし　かぎりは、際の字、限の字などの意にて、こゝは、際限のなきほど美麗なりとの意なり◎をさなければ　幼稚なるが故になり。幼稚にて、身體が、甚だ、ちひさくあればの意なり◎籠　竹を編みて作れる籠をいふ。

【譯解】かやうに、翁が毎日切り取る、其の竹の中に、根幹の光る竹がサ一本有ッた。翁は不思議に思うて、立ち寄ッて見るに、其の竹の切り口の、筒の中が、光ッて居つた。其の光ッて居るものを見れば、三寸ほどな人が、きつう、きれいに愛らしうして居た。

そこで、翁の言うことには、

私が、毎朝、毎夕に見る竹の中においでなさるのでわかッた。

そなたは、私のこ(子に籠を兼ぬ)におなりなさる人ぢやと見える

と云うて、手の中へ入れて家へ持ッて來た。

それから、妻の老女へ此のちごを預けて育てさす。

その愛らしいことがかぎりもない。

からだが、きつう、ちいさいによって、籠の中へ入れて育てる。

たけとりの翁、この子を見つけて後に、竹を取るに、節をへだてゝ、よごとに、こがねある竹を見つくることかさなりぬ。かくて、翁やうやうゆたかになりゆく。

【釋義】節をへだてゝ　竹の節と節とを隔てゝなり◉よごとに　節の間の筒ごとになり。よとは、節と節との間の空虚なる所、即ち、兩節の間の筒のことなり◉こがねある竹　黄金が筒の中にある竹をいふ。こがねは、黄金の轉音。白金(銀)に對して、其の色黄なれば名づけたるなり。常に、金、または、黄金ともいふ。

さて、こゝは、いつも兒童の不審をおこす所なれば、再び、取りすべていふべし。節を隔てゝ、筒毎、黄金ある竹とは、最初の節の間の筒の中にも、其のつぎの節の間の筒の中にも、また、其のつぎの節の間の筒の中にもと、次第次第に、根本より末まで、のこらず、黄金のつまりてある竹といふ意なり。

◉かくて　かくありてなり。俗に、さて、それよりなどいふに當る◉やうやう　稍の延び

たる語にて、次第次第になどいふ意。今、やッと、また、からうじてなどの義に用うるは轉れるなり◉ゆたかになりゆく　豐饒に成り行くなり。たびたび、筒の中に黄金のある竹を得るによりて、富み榮ゆとなり。

【譯解】竹取の翁は、此の子を見つけて來てから、其の後、竹を取るに、その竹の節と節との、あひだあひだに、黄金の入ッてある竹を見つけることが、たびたびあッた。

それから、翁は、だんだんに、金持になッて來た。

このちご、やしなふほどに、すくすくと、おほきになりまさる。三月ばかりになるほどに、よきほどなる人になりぬれば、かみあげなどさたして、かみあげせさせ、裳きす。ちやうの内よりも出ださず、いつき、かしづき、やしなふほどに、このちごのかたち、けうらなること、世になく、屋のうちは、闇き所なく、ひかりみちたり。翁こゝちあしく、くるしき時も、この子を見れば、苦しき事もやみぬ。腹だゝしき事もなぐさみけり。

【釋義】ちご　乳子にて、乳のみ子をいふ。童子、また、子供などの、やゝ成長したる

をいふは轉れるなり◎やしなふほどに　發育する間になり。時の立つを、ほどといふ◎すくすく　ものに滯らず、すみやかに成長する狀をいふ。俗に、ずんずんといふ意なり。宇津穗物語に、かゝるほどに、此の子は、すくすくとひきのぶるものゝやうに、おほきになりぬ』とあるも、こゝの心ばえなり◎おほきになりまさる　大に成り增さるなり。身體が日に增して成長するをいふ◎三月ばかりになるほどに　三月許に成る間になり。ばかりといふ語に二義あれど、こゝは、ほど、または、ぐらゐなどゝいふ意に當る◎よきほどなる人　よきほどは、よきころにて、こゝは身體の人並になりたるをいふ◎かみあげ　髮上なり。いにしへは、女子幼稚の時、振分髮とも、また、うなゐばなりともいひて、髮を放ちて肩のあたりまで下げたるを、成人すれば、髻をあげ、根を結ひて、その末を後へ下髮にする例なり。これをかみあげといふ。こゝは、其の髮上の式を行ひたるなり。後世元服の式を行ふと同じ。

されば、萬葉集にも　橘の寺の長屋にわがいねしうなゐばなりは髮あげつらんか』など見えたり。萬葉集は、大和國の奈良に皇居のありし時、作られし歌集なれば、此の竹取物語と共に、今より千年以前の風俗人情を考ふるには、最必用の書といひつべし。

◎など　其の事、其の物の外にも、なほ、其の事、其の物のある意を示す詞。俗に、なんど

といふに同じ◎さたして　さたは、定の義。こゝは、髮上などの事を議り定めてといふ意◎せさせ　令レ爲にて、翁、嫗が、姫に髮上せしめしなり◎裳きす　裳着爲なり。裳は、女の着るうへの袴なり。昔は、男子の袴着と同く、女子成長すれば、初めて裳を着る儀式ありたり◎ちやう　帳にて、昔の高貴の人の用ゐたる寢臺の四方に垂るゝきぬをいふ。此の帳をかけたる寢臺を帳臺といふ◎いつき、かしづき　大切に愛護する事をいふ◎けうら　淸らの音便にて、俗に、奇麗をいふに當る◎世になく　世界に無類なりとの意◎屋のうちは、闇き所なく　うつくしき赫映姫の身體より放つ光りにて、家の内は隅々までも、暗からずとなり◎ひかりみちたり　光明充滿たりにて、ひかりの到らぬ所なく照りわたるをいふ◎こゝち　こゝろもち、氣色、氣分などいふに同じ◎腹だゝしき事　怒りて、腹の立つ樣な事なり。

【譯解】　籠に入れて、此の乳兒を育てるうちに、めッきりずんずんと大きうなッて行く。三ヶ月ほどになるじぶんに、からだが大きうなッて、もはや常並の娘になッたによッて、髮上など相談し定めて、髮上をさせ、裳を着けた。かやうに、髮を上げ、裳を着けてからは、家の外へはいふまでもなく、閨の帳の内よりも出さず、一層大切にして育てるうちに、此の小兒のきりようの、奇麗なことが、世の中に類なく、翁の家の内ハ、此の小兒のからだのひかりで、

闇い所なく照りわたッた。
そうして翁が心もちのわるう、苦しい時も、此の小児の愛らしい姿を見れば、苦い事も止んだ。
おこッて腹の立つやうな事も、なほッたわい。

おきな、竹をとること、ひさしくなりぬ。いきほひ、まうのものになりにけり。

【釋義】いきほひまう　勢猛の義。威勢の强さをいふ。まうは、猛の字音なるが、なかむかしの書に、多く用ゐたり。

【譯解】翁は、竹を取る事が久しうなッた。
其の竹の中には、たびたび、黄金がはいッて居るによッて、次第次第に富み榮えて、威勢のひどい者になッたわい。

この子、いと、おほきになりぬれば、名をば、みむろど、いむべのあきたをよびてつけさす。あきた、なよ竹の、かぐや姫とつけつ。此のほど、

三日、うちあげあそぶ。よろづの遊びをぞしける。をとこ、をうなきらはず、よびつどへて、いと、かしこくあそぶ。

【釋義】みむろど、いむべのあきた　みむろどは、三室戸にて地名。いむべは、齋部とも、忌部とも書く姓。あきたは名なり。名附親なれば、陰陽師などの名の樣に作りなせるなり◉なよ竹　なよだけは、女竹にて、殊に、なよゝかに撓む物なればいふ。こゝは、たをやかなる姫の姿を、なよやかなる竹に喩へて、冠らせたるなり。いにしへ、女を賞めて、竹のたわめるに喩へたる歌など多し◉かぐやひめ　かぐやは、赫映にて、かゞやき光る意。姫の容顏美麗にて、照り赫きしが故に名づけしなり◉うちあげ　拍上の義にて、酒を飮みたのしみて、手を拍ち上ぐるよりいふ。それより轉りて、後にはたゞ酒宴のことをもいふ樣になれり◉あそぶ　あそぶは、もと、種々の遊戲をいふ語なれど、此の時代にあそびといふは、專、音樂歌舞を指していへるなり◉をとこ、をうな　男女なり。女を、をうなといふは、をむなの音便にて、老女のおうなにはあらず。をうなは女にて、少女をいひ、おうなは嫗にて老女をいふと心得おくべし◉きらはず　嫌ひなくなり。俗に、かまはぬといふに同じ◉よび

つどへ　喚ひ集めてなり。つどへは、集はしむるをいふ◉かしこくあそぶ　甚しく遊ぶをいふ。かしこくは、もと、勝れたるをいふ詞にて、こゝは、俗に、極めて美麗なるを、おそろしいきれいだ、極めて巨大なるを、おそろしいおほきい、などいふおそろしいに當る。

【評解】大切にして、育てるうちに、此の子が、きつう、大キうなッたによッて、その名をは、三室戸と云ふ所に住んで居る齋部の秋田と云う人を呼び寄せて附けさした。秋田は、なよ竹の、赫映姫と云う名を附けた。そうして、なづけ(命名)の祝に、此の當座三日間は、酒宴をして遊んだ。其の遊びには、歌舞管絃などを初めとして、あらゆる遊びごとを爲て遊んだ。此の祝宴には、男女の撰り嫌いなく、みッな、呼び集めて、ごくひどう遊んだわい。

◉さて、これまでは、赫映姫の誕生することより、おひたちまでのありさまを叙したる一段落にて、いはゆる此の物語の大序なり。末段に、赫映姫の命名の祝宴に、さかりなる歌舞管絃を奏し、男女の差別なく、其の席に喚び集めたる事を記したるは、後に、つまどひの事をいはんとする前置なり。そは此の祝宴に招かれし人々が、初めて、赫映姫の世に比類なき美女なるにおどろき、其のよしを諸方へいひふらしたるによりて、其の風説を聞き傳へて、世間の男が、いかで、此の赫映姫を得てしがな。見てしがなど惑ひあふよしを、次の段にいはんとする下組にて、文法にいはゆる伏線なり。

つまどひ　これより、かぐや姫を得んと、人々のつまどひすることをしるす

世界のをのこ、あてなるも、いやしきも、いかで、此のかぐやひめを得てしがな。見てしがなと、おとに聞きめでまどふ。そのあたりの垣にも、家の外にも、をる人だに、たはやすく見るまじきものを、よるは、やすきいもねず。やみの夜に出でゝも、穴をくじり、こゝかしこより、のぞき、かいまみ、まどひあへり。さる時よりなん、よばひとは云ひける。

【釋義】世界のをのこ　廣き世間の男といふ意◉あてうはての約語にて、貴くして品格よきをいふ。こゝは、高貴なる上流社會の人々をいへるなり◉いやし　卑賤の意にて、こゝは、上流にむかへて、身分の低き下流社會の者をいふ◉いかで　俗に、なにとかしてどうぞしてなどいふ意◉得てしがな　得んと希ふ意。俗に、えたいものぢやがといふに當る

がなは、希ふ意の辭。見てしがなは、見たいものぢやがの意なること、なぞらへて知るべし◉
おとに聞きめで　おとは、風聞、また、たよりなどの義。めでは、愛の字の意。こゝは、風聞に姫の美人なることを聞きて戀慕すとなり◉まどふ　惑の字の意。思ひみだれて、心の迷ふなり◉そのあたりの垣にも、家の外にも　姫の家の近邊の垣や、または、その家の外にもといふ意。この文は、たゞちに、居るひと云々につゞかず、句を隔てゝ、下の、こゝかしこよりのぞき云々といふに係る文脈なり。されば、此の句は、穴をくじりの下に入れて見るべし◉
をる人　姫の家の内に居る人なり◉だに　俗に、でも　または、さへといふ意の辭◉たはやすく　容易になり。たはは、添へたる辭にて、容易の意◉見るまじきもの　見る事ならぬものをといふ意◉やすきいもねず　安樂に熟睡もせずなり◉こゝかしこ　此所彼所なり
◉穴をくじり　垣などに、穴を穿ちあくる事なり◉のぞき　覗、また、闚の字などの意にて、ひそかに見るをいふ◉かいまみ　垣間見の義にて、もと、垣の間より覗き見るをいへり。後には轉りて、垣の間ならずとも、たゞ、覗ひ見る事を云ふ◉さる時　然る時なり。此の時といふに同じ◉よばひ　呼びといふ詞の延びたるにて、もと、結婚する事を云ふ。今の世に、婦を呼ぶなどいふもこれなり。さるを、こゝには、わざと滑稽に、人々の夜中、這ひあるくより、よばひといふ語の出來たるやうに、おもしろく書けるなり。此の類の滑稽は下にもなほ多し。かゝるおもしろき筆づかひは。此の物語の特色なり。見ん人心をとめてよく味ひ見るべし。

【譯解】なづけ(命名)の祝宴をしてから、赫映姫の、うつくしいと云うことが、世間へ聞えて、世間の男は、身分の高い人も、身分の賤しい人も、どうぞ、此の赫映姫を我が妻に得たいものぢやが。　逢うて見たいものぢやがと、其のうつくしいという事を、風説に聞きほれして、いづれも心を迷はした。

姫は帳の内よりも出ぬ故に、家の内に居る人でさへ、容易に見る事はできにくいのに、それに、かの男どもは、姫のことが氣にかゝッて、夜は安樂によう寢ず。

月夜はもとより、闇夜に出ても、垣ねに穴を掘りあけて、其の邊の垣にも、また、その家のそとにも、あそこ、こゝから、のぞき、のぞきして、みなみな、心を迷はした。

かやうに男どもは、姫に逢はうとて、毎夜、毎夜、這い歩いた。

此の時からッ女のもとへ、そッとしのんで逢いに行く事を、よばひとは言い出したである。

人のものともせぬところに、まどひありけども、何のしるしあるべくも見

えず。家の人どもに、物をだにいはんとて、いひかくれども、ことゝもせず。あたりをはなれぬ公達、夜をあかし、日をくらす人おほかり。おろかなる人は、『やうなきありきは、よしなかりけり』とて、來ずなりにけり。

【釋義】ものともせぬ　何とも思はず取り合はぬをいふ◉何のしるしあるべくも見えず　しるしは、俗に、きゝめといふに同じ。あるべくもは、俗に、ありさうにもといふに當る。こゝは、何の甲斐もありさうにも見えぬといふ意◉物をだにいはんとて　せめて、話なりともせむと思ひての意◉ことゝもせず　何事ともせず、かまはぬなり◉あたりをはなれぬ　姫の家の近邊を離れぬなり◉公達　君等の意にて、貴人、高位の人の子息たちをいふ◉夜をあかし、日をくらす　姫の家の近邊にて、夜も晝もすごすとなり◉おろかなる人　こゝは、愚の意にあらず、おろそかの義なり。俗に、かろがろしく、また、疎略などいふに同じく、姫を思ふ戀情の、さまで深からぬ、疎遠の人をいふ◉やうなき　益無きにて、無益といふに同じ。益を、やうと呼ぶは呉音なり◉ありき　あるきといふに同じ。歩行、または、遊行の意。こゝは遊行の意に見るべし◉よしなかりけり　よしは、もと、由緣　由緒などの意なれど、轉りては、よしなきを、つまらぬといふ義に用ふ。こゝの、よしなかりけりは、俗に、かひがないわいといふに當る。

【譯解】さて、かやうに男どもは、先方の取り合ひもせぬ所へ迷い歩いても、なんの甲斐がありさうにも見えない。

赫映姫に逢はん事は、所詮のぞみのない故に、せめて其の家の人たちになりと、物を言はうと思うて、詞をかけて頼めども、何ごとゝもせず。相手にならぬ。

それでも、姫のことを、えう思いきらず、其の家の近邊を、えう離れず、むだに夜を明し、日を暮さるゝ公達や男どもが澤山あッた

しかし、姫の事を、ひとゝほりに思ふ人は

無益なしのびあるきは、なんの甲斐がないわい。

と云うて、しのんで來ぬやうになッたわい。

その中に、なほいひけるは、いろでのみといはるゝかぎり五人、おもひやむときなく、よるひる來けり。その名、ひとりは、石作の皇子、ひとり

○つまどひ

は、右大臣、阿倍のみうし、ひとりは、大納言、大伴のみゆき、ひとりは、中納言、石上の麻呂、たゞ此の人々なりけり。

【釋義】なほいひける　やッぱり、言ひ寄りけるとの意。‖なほは、俗に、まだ、やッぱりなど、いふに當る◎いろごのみ　女色を好むをいふ◎かぎり　至極の意。こゝは、えりぬきといふに當る◎おもひ止むときなく　思ひこがれて忘るゝ時なくの意◎石作の皇子　車持の皇子　石作、車持は、共に姓なるを、今、皇子たちの御名の如く記せるなり。皇子は、天皇の御子の稱。さて、石作とせしは、佛の石の鉢を僞り作れる事をいはんとて、設けたる名。車持とせしは、十六所なる知行の倉をあけ、蓬萊の玉の枝を僞り作れる事をいはんとて、くらを倉の意に取りなして、設けたる名なるべし◎阿倍のみうし、大伴のみゆき、石上の麻呂　阿倍、大伴、石上は姓。御主人、御行、麻呂は名。是れらの姓名は、ふるく歴史に見えたれど、こゝは、それらの人々を指しゝにはあらで、たゞ其の姓名を假りたるまでなり◎たゞ　わづかに、また、たッたといふに當る。

【譯解】大抵の人は、甲斐がないとあきらめたが、其のうちに、やッぱり、こりずに言い寄ッた人々は、世間で好色と呼ばるゝ撰り拔き五人で、この五人は、姬のことを、すこしの間も忘れる時なく、夜も晝も翁の家へ來られた。

其の五人の人々の名は、一人は、石作の皇子、一人は、車持の皇子、一人は、右大臣、阿倍の御主人、一人は、大納言、大伴の御行、一人は、中納言、石上の麻呂と申す。

たッた、此の五人の人々であッたわい。

世の中に多かる人をだに、すこしもかたちよしと聞きては、見まほしうする人々なれば、かぐや姬を見まほしうして、物もくはず、おもひつゝ、彼の家に行きて、たゝずみ、ありきけれども、かひ有るべくもあらず。ふみをかきてやれども、かへりごともせず。わび歌など書きてやれども、かへしもせず。かひなしと思へども、霜月、しはすの降りこほり、みな月のてりはたゝくにも、さはらず來けり。此の人々、あるときは、竹取を喚びいでゝ、『むすめをわれにたべ』と、ふしをがみ、手をすりのたまへど、『おのがなさぬ子なれば、心にもしたがはずなんある』といひて、月日をす

ぐす。

〔釋義〕世の中に多かる人をだに　世間に澤山ある尋常の女でさへの意◎すこしもかたちよしと聞きては　少々にても、容貌がよいと聞きてはなり◎見まほしうする　見んと欲するなり◎物もくはず　食事もせずなり◎おもひつゝ　姫のことを思うて思うてなり◎彼の家　翁の家をいふ◎たゝずみ、ありき　家の前に立ちどまり、または、その近邊を歩きなどするをいふ。されば、たゝずみ、ありきと、はなして讀むべし。こゝは、立ちどまり、また、歩きて、姫の家のあたりを離れ難きさまをいふ◎ふみ　手紙なり◎かへりごと　返り言にて、手紙の返事をいふ◎わび歌　戀ひあぐみて難義する由をよみたる歌なり。わびは、俗に難義する事をいふ◎かへし　返歌なり◎かひなしと思へども　到底かなはぬ事とは思ひながらもの意◎霜月　陰暦の十一月をいふ◎しはす　陰暦の十二月をいふ◎降りこほり　霜、雪ふり、水凍りなり◎みな月　陰暦の六月をいふ◎てりはたゝく　日つよく照り、雷鳴りひゞくなり。はたゝくとは、雷のごろごろ鳴ることをいふ◎さはらず　障りともせずにて、俗に、かまはずといふ意◎此の人々　此の五人の人々なり◎喚びいで　翁を喚び出してなり◎たべ　給へなり。俗に、たもれなどいふに同じ◎ふしをがみ　伏し拜みにて、低頭平身するなり。をがむは、折れかゞむの約語にて、合掌する事にはあらず。然るに、今、手を合す事を、をがむといふは轉れるなり◎手をすり　手を摩りにて、ひたすらに頼むさまなり。いま、手を合せて頼むなどいふと同じ◎のたまへど　告り給へどの略言にて、言へどの敬語◎おのが云々　翁の返答なり◎なさぬ　生まぬといふに同じ。今も、實の親子ならぬを、なさぬなかなどいふ◎心にもしたがはず　心にもまかせずにて、思ふまゝにならぬ由なり。

〔譯解〕此の五人の人々は、世間に澤山ある女でさへ、少しでもきりやうが好いと聞いては、逢ッて見たう思はれる人々ぢやによッて、別して美人の名の高い、かぐや姫を見たう思はれて、其がために、ろくろく物もたべず、たゞ、姫のことを、思い思うて、毎日彼の竹取の家へ行ッて、其の家の前に立ちどまッて、内の様子をうかゞッて見たり、また、其の近邊を歩いて見たりして、姫に逢うとするけれども、なんのかいもありさうでない。これでは、いかぬと、手紙を書いてやッても、返事もせぬ。こんどは、手をかへて、戀いあぐんで、こまッて居る意味の歌をよんでやッても、返歌もしない。

かくまで、心を盡しても、到底詮のない事と思いあきらめても、やッぱり戀しうて、十一月、十二月ごろの、雪の降る朝も、氷のはる夜も、六月ごろの、土のさけるやうに、照りつける日も、夕立がして、雷のごろごろと鳴りひゞく時も、ちッともかまはず、來られた。

此の人々は、がまんがしきれず、或時は、竹取の翁を、呼び出だして、

そなたのむすめ、赫映姫を、わたくしにくだされ

と低頭平身して、手を合はせ御賴みなさるけれども

翁は、

私が生まぬ子ぢやによッて、私の思うまゝにはッならぬ譯でござる

など、云うて、月日を送ッた。

かゝれば、此の人々、家にかへりて、物をおもひ、いのりをし、願をたて、おもひやめんとすれども、やむべくもあらず。さりとも、つひに男あはせざらんやはとおもひて、たのみをかけたり。あながちに、こゝろざしを見えありく。

【釋義】 かゝれば　かくあればにて、この樣なる次第なればの意◎物をおもひ　色々と思案をするなり◎いのりをし　神に祈禱するなり。到底かなはぬ戀なれば、せめて、思ひこがるゝ心をやめんとて、神にいのりをかけしなり◎願をたて　佛に願を立つるなり◎おもひやめんとすれども　姫のことを、思ひとまらんとすれどもの意◎さりとも　然ありともにて、左樣につれなくありともの意◎つひに　終までの意。俗に、とうとうといふに同じ。こは、一生、また、生涯などいふ義に見るべし◎男あはせざらんやは　男をもたせずにおかんや、男もたせぬこと、よもあらじとの意。やはは打ちかへしの辭◎たのみをかけたり　其れを賴みに爲たりとなり◎あながち　強ひてなり。俗に、おして　むしやうになどいふに當る◎こゝろざしを見えありく　姫を戀ふる厚意の深きさまを、見られんとて通ふなり。

【譯解】 かやうぢやによッて、此の人々は、家へ歸ッて、色々と思案をしてみても、此のやうすでは、到底、思ひを遂げる事が、むづかしいによッて、どうかして、姫を戀しう思う心のやまるやうにと、神に祈禱を爲し、佛に願を立てゝ、思い止まらうとするけれども、止まりさうにもない。あのやうに、翁は、姫の事は、心にまかせぬといふけれども、さうぢやと云うて、姫に一生男をもたせずに置うかい、よもや、えうもたせずに置きはせまいと思うて、自分の心

に頼みをかけた。

其れから、むしやうに、姫をしたうこゝろざしの、深いやうすを見られにかよはれた。

これを見つけて、翁、かぐや姫にいふやう、『わが子のほとけ、へんぐゑの人とまうしながら、こゝらおほきさまで、やしなひたてまつる心ざし、おろかならず。翁のまうさんこと、聞きたまひてんや』といへば、かぐや姫、『なにごとをか、のたまはんことを、うけたまはらざらん。へんぐゑのものにて侍りけん身とも知らず。おやとこそ、思ひたてまつれ』といへば、翁、『うれしくも、のたまふものかな』といふ。『翁、とし七十にあまりぬ。今日とも、明日とも知らず。此の世の人は、男はをうなにあふことをす。女はをとこにあふことをす。其の後なん、門もひろくなりはべる。いかでか、さることなくては、おはしまさん。

【釋義】これを見つけて　五人の人々の心ざし深きさまを、翁の見つけてなり◉わが子のほとけ　我が子の佛にて、佛とは、翁が、我が子を大切に思ひて云ひたる詞なり。下に、あがほとけとあるも同じ◉へんぐゑの人　へんぐゑは、變化の字音にて、人ならぬものゝ、假に人のすがたをなして、此の世に現るゝ者をいふ◉まうしながら　申すものゝにて、下のやしなひたてまつるへ係れり◉こゝら　もと許多の意なるが、こゝは、はなはだの意なり。これほど成人するまで、養ひ奉れりとなり◉おろかならず　ひとゝほりの事にあらずの意なり◉聞きたまひてんや　聞き入れて下さるか、いかにの意◉なにごとをか　こは下の、うけたまはらざらんへかゝる詞。何事をかの、かは、かはの意にて、何事にても、受けひかぬ事がありませうか、きつと受けひきませうとの意◉侍り　俗に、ござるといふに同じ。人に對していふ時の敬語◉かな　歎きの辭にて、俗に、まアといふに當る◉とし七十にあまりぬ。今日とも、明日とも知らず　翁の齢、すでに七十の餘になりたれば、今日明日に死なんも計りがたしとなり。

さて、こゝに、七十に餘りぬとあるにつきて、諸説あれど、今案ずるに、下の天の羽ごろもの條に、おきな、今年は、五十ばかりなりけれども、物おもひには、片ときになん、老になりにけると、あるを見れば、この時まことには七十餘ならねど、姫に婚姻をすゝめん爲めに、わざと、

かくてとさらに老衰して、生命の旦夕に迫れる如くいへるなるべし。なかおかに、そこ深くたくめる策略よりも、ひと目見てもあらはれぬべき年齢をば詐りて、ひたすら、むすめに、婚禮をすゝめんとする、無邪氣なる翁が口つきを寫しいだせる筆づかひ、いと、おもしろし。
◎此の世の人　此の世界の人なり。かぐや姫は、人の胎内にやどらず、竹の中より出でたる變化のものなれば、かくことわれるなり◎男は、をうなにあふことをす　男子は、女子に配偶する事を爲すとなり◎門もひろくなりはべる　門廣くにて、門は、氏といふに同じ。こゝは、すなはち、一家一門の繁榮する事をいふ◎いかでか　俗に、どうしてといふに同じ◎さること　然有事にて、俗に、さやうなる事といふに當る。こゝは、男女配偶する事を指していへり。

【譯解】此の人々が、姫を慕ふ心ざしの深い樣子を見られたに、竹取の家にかよはれたによって、是れを見つけて、えう捨てゝおかず、

翁は、かくや姫に言ふには、

我が子のほとけよ、そなたは、よのつねならぬ變化の人とはまうすもの〻、これほど成人するまで、おそだてまうした、此のおきな夫婦が、たんせいした苦心は、ひと〻ほりではござらぬ。

それぢやによって、翁のいふことを、聞き入れて下さるか、どうでござるといへば、

赫映姫

何事でも、仰せらる〻事を、うけたまはらぬ事がありませうぞ。なにごとでも、うけたまはります。

わたくしは、變化の者でございました身とも存じませず。あなたがたを、實の父母のやうに、思うて居ります

と言へば

翁

嬉しうも、此の翁かいう事を得心して、よい返事を御言いなさる事ぢやなァと言うて、ひどう、喜んで

翁

この翁の年も、はや七十の上にもなッた。

老いのいのちは、今日死ぬとも、明日死ぬともわからぬ。

それ故、そなたの行末の事を、ひどう、案じるによって申しますが、すべて、此の世の中の人は、男は、女に偶う事をします。

また、女は、男に偶うという事をします。

かやうに、男と女と一所になッて、それからあとでッ一家、一門の子孫は、繁昌いたすでござる。

そなたも、いま、此の世の中においでなされば、どうして、男に偶うという事がなうては居られませうぞ

と云う。

かぐや姫のいはく、『なでふ、さることか、しはべらん』といへば、『變化の人といふとも、をうなの身もちたまへり。翁のあらんかぎりは、かうても、いますかりなんかし。此の人々の、とし月を經て、かうのみいましつゝ、のたまふ事を思ひさだめて、ひとりひとりにあひたてまつりたまひね』といへば、かぐや姫いはく、『よくもあらぬかたちを、ふかきこゝろも知らで、あだ心つきなば、後くやしきこともあるべきをと思ふばかりなり。世のかしこき人なりとも、深きこゝろざしを知らでは、あひがたしとなん、おもふ』といふ。

【釋義】 なでふ　何といふの約言なれど、こゝは俗に、どうして　また、なんでといふ意に用ゐたり◉さることか、しはべらん　左樣なる事を爲ませうか、爲ますまいの意。こゝのかは、やはと同じく、打ちかへしの辭なり◉變化の人といふとも、をうなの身もちたまへり云々　翁の詞なり◉あらんかぎりは　世の中に、生きて居る中はの意◉かうても　斯くてもの訛りにて、かやうにてもの意◉いますかり　在り給ふと云ふ程の意にて、おはしますといふに同じ。俗に、御座遊ばすなどいふに當る◉かし　物に念を推して、強くいひ定むる時に用うる辭にて、言語の末につく例なり。見よかし、是ぞかしの類、これなり◉此の人々　五人の人々なり◉かうのみいましつゝ　かやうに、心切に幾度も御出になりてなり◉のたまふ　こゝは、仰せらるゝといふに當る◉思ひさだめて　よく、たしかに、分別をきめて

の意◎ひとりひとり　こゝは、一人ごとの意にあらず。五人の中にて、誰れなりと、一人といふ意なり。

さて、今の世の詞づかひにて、ひとりひとりといへば、一人ごとといふ意に當るによりて、いつもこゝは、意義のまどふ所なり。これ、いにしへの詞づかひと、今の詞づかひと異なる所由なり。此の時代に、ひとりひとりといへば、數人のうちにて、誰なりと一人といふ事なり。古今集に、思ふどちひとりひとりが戀ひ死なば誰によそへて藤衣きん』とある、ひとりひとりも、即ち、此の物語の、こゝの詞づかひとおなじく、たがひに、思ひかはせる男と女とのうち、男の方にもあれ、女の方にもあれ、その一人の方が、戀ひ死なばとの意なり。古今集は、醍醐天皇の御代、延喜五年に撰ばせられし歌集にて、今年よりは、九百九十年むかしの書なり。此の外にも、なほ、この詞づかひは、古書に多く見えたり。すべて、むかしの書物を讀まんには、其の時代のことばづかひを知らざれば、事實をあやまること多からん。よく心をつけて、見るべき事なり。

◎たまひね　給へよといふに同じ。ねは希ふ辭。俗に、なされといふに當る◎よくもあらぬかたちを　美麗にもあらぬ容貌なるものをの意◎ふかきこゝろも知らで、あだ心つきなば

男の深き心も知らず、淺はかに考へて、身をまかせたる後、もし、其の男子に、うはきな心が出たならばの意。あだ心は、轉り易く、變り易き心をいふ◎後くやしきことも有るべきを　心底も知らで偶ひなば、あとにて後悔する事あるべきをとなり◎思ふばかりなり　其の後悔を案ずるのみにて、外に深き意あるにあらずとの意◎世のかしこき人　皇族、大臣など、世にすぐれたる貴人をいふ。かしこきは、もと恐るべき意なりしが轉りて、世に威勢つよき、高位、高官の人とば、かしこき人といへり◎知らでは　知らずしてはの意なり。

【譯解】おきなのことばを聞いて、

かぐや姫のいふには、

わたくしは、どうして、男に偶うなどと申す、さやうな事をいたしませうぞ。　いたしませぬ

といへば

翁

そなたは、變化の人というても、女の身をおもちなされる。

さやうぢやによって、翁が生きて世の中に在るうちは、此のまゝで、おいでになってもよろ

しい。

しかし、翁のない後は、そなたひとりで、まアどうなさるゝぞ。

此の五人の人々が、年月を經て、長らくかやうにおこしなさッて、いろいろと、親切に仰せられる事を、よく分別をきめて、五人の内で、どなたぞひとりに、お偶いなされよ

といへば

かぐや姫のいうには

わたくしが、おことわり申すは、餘の義ではありませぬ。

わたくしは、ようもない容貌であるに、男の深い心も知らずに、あさはかに承知して、もし、其の男に浮氣な心が出たならば、あとで、くやしい事があるであらうにと、それを心配に思うばかりであります。

それゆゑ、たとへ、皇族がたや、大臣だやというても、其のかたの深い心いれをぞんじませんでは、容易に偶う事はできませぬ

と思います

と云う。

翁いはく、『おもひの如くも、のたまふかな。そもそも、いかやうなるこゝろざしあらん人にか、あはんとおぼす。かばかり、こゝろざしおろかならぬ人々にこそ、あンめれ』かぐや姫のいはく、『なにばかりのふかきをか、見んといはん。いさゝかのことなり』『人のこゝろざし、ひとしかンなり。いかでか、中におとりまさりは知らん』『五人の人の中に、ゆかしきもの見せたまへらむに、御こゝろざしまさりたりとて、つかうまつらんと、其のおはすらん人々にまうしたまへ』といふ。『よきことなり』とうけつ。

【釋義】 おもひの如く　翁が心に思ふとほりになり。姫のことばに同意して喜ぶさま◎そもそも　上を承けて、下を起す詞にて、それはまアといふほどの意◎いかやうなる　どのやうなるの意◎おぼす　おもはすの約言にて、おもひたまふといふに同じ◎かばかり　かくばかりにて、俗に、これほどと云ふ意◎おろかならぬ　疎略ならぬにて、大抵にてはなき意◎なにばかり　何ほどの意◎ふかきをか　深き心ざしをかなり◎見んといはん　俗に、

見やうと云はうぞといふ意◎いさゝかのことなり　僅の心ざしなりの意◎人のこゝろざし、
ひとしかゝなり云々　こは、翁のことば。ひとしかゝなりは、ひとしかるなりの訛にて、同等
なりとの意◎いかでか　どうしてかの義◎五人の人の中に、ゆかしきもの云々　赫映姫の
詞なり。ゆかしきものは、心に見たしと思ふ物。ゆかしは、慕はし、實を知らま欲しなどの意
に用うる語にて、其の事、其の物をたしかには知らずして、得ま欲しく、見ま欲しく思ふをい
ふ◎見せたまへらむに　見せて下されん御方になり◎御こゝろざしまさりたりとて　御志
が優りたりと知りての意◎つかうまつらん　仕へ奉らんにて、其の心に従ひ申さんとなり
◎おはすらん人々　御出くださる人々なり◎よきことなり　おきなの返答にて、よき分別
なりとの意◎うけつ　承知せりとの意なり。

【譯解】赫映姫の返事を聞いて、

翁のいうには

私の思う通りに、まァいはるゝことよ。

それは、まァどのやうな、心いれのある人に偶はうと御思いなさるるか。

あの人々は、冬のさむさも、夏のあつさも厭はずに通はるゝ程、これほど心いれの、なみ大

抵ならぬかたがたでござる。

それを、この上にも、まだ、心いれの深いとは、そりや、どういう事ぞ

と問へば

赫映姫のいうには

どれほどな深い心いれを見やうと、申しませうぞ

ほんに、わづかな事であります。

といへば

翁

五人の人々の心いれは、いづれも、みんな、同じことぢや。

どうして、其の中で劣り勝りはわからうぞ。

といへば

赫映姫

五人のかたがたの中で、わらはの見たいと思うめづらしい物を、見せてくださる御方に、その御方の御心ざしが、まさッておいでなさると思いまして、その御方に御したがい申さうと、

○こまどひ

其の御こしなさるゝかたがたへ、御云いくだされ
と云ふ。

翁

こりや、よい分別ぢや。
そうすれば、人々の恨みも、嫉みもあるまい
というて承知した。

日暮るゝほどに、例のあつまりぬ。人々、あるひは、笛をふき、あるひは、歌をうたひ、あるひは、しやうがをし、あるひは、うそを吹き、扇をならしなどするに、おきな出でゝ、いはく、『かたじけなくも、きたなげなる所に、年月を經てものしたまふこと、きはまりたるかしこまり』とまうす。『翁のいのち、今日、あすとも知らぬを、かくのたまふ君だちにも、よく思ひさだめて、仕うまつれ』と申せば、『ふかき御こゝろを知らでは』となんまうす。さ申すもことわりなり。『いづれおとりまさり、おはしまさねば、ゆかしきもの見せたまへらんに、御こゝろざしのほどは、見ゆべし。つかうまつらんことは、それになん、さだむべき』といふ。これ、よきことなり。人のうらみも、有るまじ』といへば、五人の人々も、『よきことなり』といへば、翁入りていふ。

【釋義】ほど　時分なり◎例の　例の如くなり◎しやうが　唱歌にて、琴、笛の譜を謡ふをいふ。今、一般に、歌を謡ふを、唱歌といふは、轉れるなり◎うそを吹き　口笛を吹くをいふ◎扇をならし　扇子を以て、拍手を取りて、打ち鳴らすなり◎かたじけなくも　恐れ多くも、また、勿體なくもなどの意◎きたなげ　俗に、きたなさうなといふに同じ◎ものしたまふ　ものすとは、すべて、何事にても、其の事をするをいふ。譬へば、舟にて行くを、舟にてものすといひ、車にて行くを、車にてものすといふ類なり。こゝは、御出なさる、の意◎きはまりたるかしこまり　恐れおほきかぎりといふ意にて、御禮申すとの義◎翁のいのち云々　翁が、此の五人の人たちにしたがへと、姫にさとしたる詞を、今、五人にむかひ

て更に語りいづるなり◉かくのたまふ君だち　かやうに親切に仰せらるゝ君等なり◉思ひさだめて　能く思案を定めてなり◉ふかき御こゝろを知らでは　赫映姫の詞なり◉さ申すもことわりなり　翁の詞にて、姫がさやうに申すも、道理なりとなり◉いづれおとりまさり、おはしまさねば云々　赫映姫の詞なり◉見ゆべし　見ゆる事ならんの意◉それになん、定むべき　其の御方に定めませうの意◉これ、よきことなり　翁が、また、姫の返事を聞きて答へし詞◉翁、入りて　五人の人々が承諾の由を、座敷に入りて、姫に告げしなり。

【譯解】さて、日の暮れる時分に、五人のかたがたは、いつもの通りに御寄り合いなされた。人々は、何がな、姫のこゝろをひかんと、あるいは、笛を吹き、あるいは、歌を謡い、あるいは、琴や、笛の譜をうたい、あるいは、口笛をならし、または、扇子で拍子を取りなどする所へ翁が出て來て、申すには

いづれも、貴い御身分のおんかたがたであらッしやるに、勿體なくも、此のむさくろしい所へ、年月をかさねて、長らく御いでなさるゝ事は、千万恐縮でござると御わびを申した。

さて、翁の云うには

わたくしの命は、今日死ぬとも、明日死ぬとも知れぬものを、いつまでも、ぐずぐずしては居られぬによッて、はやうこのやうに、御親切にいうてくださるかたがたの中に、まアとッくりと、分別を極めて、御したがい申せと姫に申しましたれば

姫のまうしますには、

何ぶんにも、おんかたがたの、具實の深い御こゝろを存じませんではとサ申します。

さやうにあれが申すも、もッともでござります。

また　姫の申すには

五人のかたがたの中で、どなたも、御親切の劣り優りは、あらせられぬによッてあらはの見たいと思う物を、御見せくださる御親切によッて其の御心ざしの深いか淺いかは、見えませう。

御したがい申す事は、深い御心ざしのわかッた、其の御方にッきめませうと申しました。

そこで、この翁が

　こりや、よい分別ぢや。
　それでは、五人のかたがたの不足もあるまい

と云いました。

と申せば

五人の人々も、姫の返事を聞いて、大によろこび、一同に口をそろへて

　これは、よい分別ぢや

と仰せらるれば

翁は、姫の座敷に入つて、

　五人のかたがたも、みんな、御承知なされた

と云う。

かぐや姫、『石作の皇子には、天竺に、佛の御石の鉢といふものあり。それを取りてたまへ』といふ。『車持の皇子には、東の海に、蓬萊といふ山あンなり。それに、しろがねを根とし、こがねを莖とし、白玉を實として立てる木あり。それ一枝をりてたまはらん』といふ。『いまひとりには、もろこしにある、火ねずみのかはごろもをたまへ。大伴の大納言には、龍のくびに五色にひかる珠あり。それを取りてたまへ。石上の中納言には、つばくらめの持たる、子安貝ひとつ取りてたまへ』といふ。翁、『かたきことどもにこそあンめれ。此の國にあるものにもあらず。かくかたきことをば、いかに申さん』といふ。かくや姫、『なにかかたからん』といへば、おきな、『とまれかくまれ、まうさん』とて、出でゝ『かくなん。きこゆるやうに見せたまへ』といへば、皇子たち、かんたちべ聞きて『おいらかに、『あたりよりだに、なありきそ』とやはのたまはぬ』といひて、うんじて皆かへりぬ。

〔釋義〕天竺　印度なり。今の印度を、昔は天竺といへり◎佛の御石の鉢　佛の石の御鉢といふ義。今の詞づかひにては、石の御鉢といふべき所なるを、かくいへるは、此の時代の

詞づかひなり。さて、此の鉢は、天竺にて、釈迦如來が、修行し歩きける時、持ちたりし石の鉢にて、佛のみ用うる事を得れども、他人は持つこと能はざる大切の鉢なりといへり◎蓬萊といふ山　蓬萊山とて、古來より想像せる山の名。此の山には、仙人棲みて世界に比類なき、珍寶の多き處といひならはせり◎しろがね　銀をいふ。黄金に對して、其の色白ければ名づけたるなり◎立てる木　立ちてある樹なり◎たまはらん　俗に、いたゞきたいといふに同じ◎いまひとり　今一人にて、右大臣、安倍の御主人を指せり◎もろこし　唐土の義にて、今の支那のことなり◎火ねずみのかはごろも　火鼠の皮にて作れる裘にて、火中に投じても燒けぬものと云ひ傳ふ◎龍　想像の蛇の類。雲をおこし、雨をよび、水に潜み、天に昇り、神變はかる可らざるものといひ傳へたり。今、常に畫く所のかたちは、身は大蛇の如く、背に八十一の鱗あり。四つの足には、おのおの、三本の指ありて、爪するどし。長き耳に、長き二本の角と長き二本の髯とあり。面は甚だ長くして、最も、すさまじき相を現はせるものなり◎五色にひかる珠　青、黄、赤、白、黒の光りある珠をいふ◎つばくらめ　燕なり。今、つばめ、又、つばくら、つばくろなどいふは略せるなり◎持たる　持ちてあるなり◎子安貝　たから貝の一種にて、大なるは、長さ三四寸あり。産婦に握り持たしむれば、産安しといひ傳

ふ◎かたきことゝも　得がたき事どもなり◎此の國　日本をいふ◎いかに申さん　どうして申すことが出來やうかの意なり◎なにかかたからん　どうして、むづかしからう、むづかしき事にあらずの意◎とまれかくまれ　ともあれかくもあれの約言にて、俗に、兎も角もといふに同じ◎かくなん　こゝは、句にて、切るゝなり。かくなんの下に、きこゆる、また、申し侍るなどの詞を入れて見るべし。即ち、かやうに申しましてござるの意なり◎きこゆるやうに見せたまへ　申し上る通りに、此の品物どもを持ち來て御見せ下されの意◎皇子たち　親王の方々をいふ。皇子は、天子の御子の稱◎かんたちべ　上達部と書く。三位以上の人をいふ稱にて、公卿の事なり◎おいらかに　尋常に、又、手短になどいふ意◎あたりよりだに　姫の家の近邊をなりともの意◎なありきそ　歩くこと勿れの義にて、俗に、歩くなといふに同じ◎とやはのたまはぬ　云々となぜ云うては下さらぬの意◎うんじて　倦みして の音便にて、倦みつかれて、厭きはつる意。東京にて、倦み厭きたる狀をいふ語に、うんざりするといふも、即ち、倦んずありの約言なるべし。

〔譯解〕赫映姫は、翁に言うやう、

石作の皇子には、天竺に、佛の御石の鉢と云う物がある。

それを取ッて來て下され、
と云う。
車持の皇子には、東の海中に、蓬萊山と云う山がある。
そこに、白銀を根とし、黄金を莖とし、白玉を實として立ッて居る樹がある。
其れを一枝折ッて來ていたゞきたい
と云う。
今ひとりの右大臣、阿倍の御主人には、唐土にある、火鼠の皮衣をくだされ
と云う。
大伴の大納言には、龍の首に、五色に光る珠がある。
それを取ッて來て下され
と云う。
右上の中納言には、燕子の持ッて居る、子安貝を一箇取ッて來てくだされ
と五人のかたがたに、それぞれ言うて、いたゞきたい
と云う。

翁、此のできにくい注文を聞いて
それは、みんな、有りにくい品物ぢやと思はれる。
此の日本國の内に有る品物でもない。
かやうに、出來にくい難題をば、どうして五人のかたがたに言う事ができやうか、氣の毒で
言はれはせぬ
と云へば
赫映姫
なんのむづかしい事がありませうぞ
と云へば
翁
翁是非がない、そんなら　どうあらうと、まゝよ、五人のかたがたに申さう
と云うて、奥から出て來て
翁は、五人の人々に
たゞいま、姫に逐一申し聞けましたる所、姫はかやうかやうに申しまして御座る。

しかれば、只今、姫の申し上げました通りに、その品物を持ッて來て御見せ下さりませ

と云へば、

皇子がたや、公卿たちは、此のとはうもない返事を御聞きなされて、びッくりして

このやうな難題を言ひかけてことわるより、なぜいッそ手短に、

此の家の近邊をでも通るな

と、さッぱり言い切ッてくれぬぞ。

そうすりや、かへッてあきらめやうもあらうに、なにしに、そうは言い切らずに、此のやうな難題を言い懸けるぞ

と云うて、いづれも、倦みあぐんで、すごすご、御やしきへ、御歸りなされた。

佛の御石の鉢

これより、天竺の佛の御石の鉢の事をしるす

なほ、この女見では、世に在るまじきこゝちのしければ、天竺にある物も、持て來ぬものかはと思ひめぐらして。石作の皇子は、心のしたぐみある人にて、天竺にふたつとなき鉢を、百千萬里のほど行きたりとも、いかでか取るべきと思ひて、かぐや姫のもとには『今日なん、天竺へ石の鉢とりにまかる』と聞かせて、三年ばかり經て、大和の國、十市の郡に、ある山寺に、びんづるの前なる鉢の、ひた黑にすゝ附きたるを取りて、錦の袋に入れて、つくり花のえだにつけて、かぐや姫の家にもて來て見せければ、かぐや姫あやしがりて見るに、鉢の中に文あり。ひろげて見れば

海山の　みちにこゝろを　つくしはて
　みいしのはちの　なみだながれき

かぐや姫、ひかりや有ると見るに、螢ばかりのひかりだになし。

おく露の　ひかりをだにぞ　やどさまし
　をぐら山にて　なにもとめけん

とて、かへし出だすを、鉢をかどに捨てゝ、此の歌のかへしをす。

しら山に　あへばひかりの　うするかと
　　はちをすてゝも　たのまるゝかな

とよみていれたり。　かぐや姫かへしもせずなりぬ。　耳にも聞きいれざりければ、いひわづらひて歸りぬ。彼のはちをすてゝ、又、いひけるよりぞ、おもなき事をば、はちをすつとはいひける。

【釋義】なは、　やっぱりの意◎見では　見ずしてはの意◎世にあるまじき　世の中に生きながらへにくきなり◎心のしたくみ　心の下組の義。心の中に用意する事。されば、心のしたくみあるとは、俗に、工夫のある人といふに同じ◎いきたりとも　行きたりともなり◎いかでかとるべき　如何にしてか取る事を得ん。到底取る事能はじの意◎まかる　尊き方より、卑き方へゆくをいふ。今、尊き方に參るを、まかり出づるなどいふは誤なり◎ある山寺　或山寺なり。十市郡に在る山寺の意にはあらず◎びんづる　賓頭盧尊者とて、佛の名なり。むかし、此の像を食堂に安置して、衆僧が食事の時、まづ、此の像に供養せし故に、前に鉢を置きたるなるべし◎ひた黑　ひたすら黑きなり。俗に、まっくろ、または、べたぐろといふに同じ◎すゝづき　煤付てふるびたるなり◎つくり花のえだにつけて云々　作り花の枝とは、五色の紙、また、帛などにて、種々の花のかたちを作りて、天然の花の枝の如く、飾れるもの。昔は、貴人に奉る物は、其の時節の花の枝に付けて贈るを禮とせり。今、臺にすゑて奉つると同じ心ばえなり◎あやしがりて　怪く思ひてなり。もとより、得がたき物なるに、今、それを得たりとて、持ち來たまひしかば、不思議に思ひたるなり◎海山のみち　天竺へ行くに、海を渡り、山を越ゆる、其の道中といふ意◎こゝろをつくしはて　心を盡し果てにて、艱難辛苦を爲つくす意なり◎みいしのはち　鉢のチに、血をかねて、血の涙といひかけたるなり。御石の鉢は、血をいはんために置きたるまでなり。歌の大意は、譯解にゆづる。以下みな同じ◎ひかりや有る　まことの佛の鉢には、光ありと言へば、此の鉢に、其のひかり有るか、如何にとなり◎螢ばかりのひかり　螢ほどの光にて、すこしの光をいふ◎おく露のひかり　草葉に置く露のひかりにて、これも、たゞすこしの光と云ふ意◎やどさまし　宿さましにて、光を持って居さうなものであるにの義◎をぐら山　大和の國十市の郡にある山なるが、こゝは、しかと其の山を指して言ひたるにはあらず。光のなき事を云はんとて、それを引き出でたるなり。そは、常に暗き事を、小暗きと云へばなり◎なにもとめけん　何故に求

めしならんの意◉かへし出だす　光なきにより、贋鉢なりとて、返し出だしたるなり◉しら山　加賀の國にある山なるが、こゝは、彼の小倉山に對して、白くあざやかなる名を取れるにて、赫映姫のうつくしき光に譬へたるなり◉うするか　失するかなり。姫の光にあひては、鉢の光は押されて、消え失するかの意◉はちをすてゝ　鉢を捨てゝなるが、はぢに耻をかねたり。耻を捨つるとは、耻を受けても、其れを耻とせず、なほ、其の事にかゝるを云ふ。こゝは、石作の皇子、姫に僞の鉢を返されて、一旦耻を見たるに、猶懲りず、頼をかけて言ひ寄るをいふなり◉いれたり　家の内に入れたるなり◉かへしもせず　返歌もせずなり◉いひわづらひて　言ひ煩ひてにて、言ひあぐんでなり◉おもなき　無二面目一の義。もとは、耻なてかくるゝ意なれど、後には耻をも耻とせぬ意にて、俗に面の厚い、または、おしがつよいなどいふ意に用ゐたり。此所に云へるは、即ち、後の方の意なり。

〔譯解〕五人の人々は、いづれも、彼の難題にあきれて、家に歸ッたものゝ、やッぱり、此の赫映姫を見ないでは、世に生きながらへて居りにくい心もちがしたによッて、たとひ遙かな天竺にある物にもせよ、なんとかして持ッて來ぬものかいと思案して、かやうになされた。元來、石作の皇子は、心の工夫ある人で、天竺に二ッとない鉢を、百千萬里のあいだ行ッたとても、どうして取ッて來られうぞと思うて、おもてむき、赫映姫の許へは。

今日これからサ天竺へ石の鉢を取りに行きます

と聞かせて、三年ほどたッて、ひそかに大和の國の十市の郡に、ある山寺に、賓頭盧の前にある鉢の、まッ黒に煤ぶッて居るのを取ッて、錦の袋に入れて、作花の枝に結びつけて、赫映姫の家へ持ッて來て見せたによッて、かぐや姫は到底得にくい物を注文したるに、どうして取ッて來られたのであらうと、不思議に思ふて見るに、鉢の中に文がある。其のふみをひろげて見れば

御注文の此の御石の鉢を、天笠へ取りに行くとて、海を渡り、山を越えた、其の海山の道中に辛苦艱難して、血の涙がこぼれました

と書いてあッた。此の文をよんで、赫映姫は、佛の御石の鉢には、光があることを聞き及べば、いよいよ、此の鉢まことならば、其の光が有るかとよくよく見るに、螢ほどの光さへない。そこで、赫映姫は

まこと、天竺から持ッて來た鉢ならば、せめて、おく露のやうな、すこしの光なりとサ持ッ

て居さうなものぢやに、少しの光なきは、僞物に相違なし、このやうな光のない僞物を、なせに、をぐら山のやうな暗い所で、さがし出して來たのであらう

と云ふ返歌をかいて、暗に、これは、わが注文せし品とちがへば、ほしくはござらぬと云うて、返しいだすを見て、皇子はこれはしまうたと思うたが、

此の鉢には、光りがないとおッしやるが、元來、此の鉢に光はあるなれども、白山のやうにうつくしい姫の光にあへば、其れにおされて、鉢の光がなくなるのであるか知らん。さすれば、捨ておいたなら、またもとの光があらはれて、取り上げらるゝ事もあるかしらんと鉢を捨てゝも(恥を捨てゝ、不面目にも)やッぱり、頼みにせらるゝ事であるわいまァ

と云ふ歌をよんで家の内へ入れた。

されどもかぐや姫は、とうとう返歌もせずなッてしまうた。

返歌をせぬのみならず、いろいろと言い寄ッても、耳にも聞き入れなんだによッて、言いあぐんで御歸りなされた。

彼の皇子が、一旦、はち(鉢に恥をかぬ)を捨てゝ、また、言い寄ッたからして、其れからサ恥をかいても、こりずに、また、恥をかくやうな、不面目な事を、はちを捨つと云うたわい。

蓬萊の玉の枝

これより、蓬萊山の玉の枝のことをしるす

車持のみこは、心たばかりある人にて、おほやけには、『筑紫の國に、湯あみにまからん』とて、いとま申して、赫映姫の家には、『玉の枝とりになんまかる』といはせて、くだりたまふに、つかうまつるべき人々、みな、難波までおくりしけり。皇子、『いと、しのびて』とのたまはせて、人もあまたておはしまさず。近うつかうまつる限りして出でたまひぬ。御おくりの人々、見たてまつり送りて歸りぬ。

【釋義】たばかり　たは、添へていふ言、はかりは、慮、または、謀の字などの義なり。されば、心たばかりは、心に巧夫あるといふ意に當る◎おほやけ　朝廷なり◎筑紫の國　西海道の古名なり◎湯あみ　湯浴なり。今云ふ湯治のこと◎くだりたまふ　筑紫をさして、都より難波に下り給ふなり◎つかうまつるべき人々　仕へ奉るべき人々にて、即ち、御供に

つき添ふべき人々を云ふ◉いと、しのびて　甚だ、しのびてなり。しのぶとは、隱るゝといふに同じく、おもてだゝず、內密にするをいふ。車持の皇子、筑紫へ行くは、極內密の微行なりと、御家來の人々に云ひわたされしなり◉ゐておはしまさず　ゐは、ひきゐ(率)のゐにて、身に添へ付くるをいふ。されば、ゐておはしまさずは、つれて御出にならずの意なり◉近うつかうまつる限して　殊に親しく仕へまつる人々のみを從へての意◉見たてまつり送りて　見送り奉りてといふに同じ

〔譯解〕車持の皇子は、心に工夫のある御人で、

おもてむき、朝廷へは、

保養の爲め、しばらく、筑紫の國の溫泉へ、湯治に行きます

と申して、いとまをねがって、赫映姬の家へは

蓬萊山へ、玉の枝を取りに行きます

と云はせて、筑紫をさして御くだりなさるゝに、御供をつとめる人々は、みんな、攝津の國の難波の浦まで御見おくり申した。

さて、難波の浦から、船に御乘りになるのであるが

皇子は

今度はきつう、隱れての旅ぢや

と仰せられて、人も澤山つれて御出なさらず。こゝから、おほかたの御家來は、京へ御かへしなされて、御身近く親しく御奉公申す者ばかりを御つれなされて御出でなされた。

それで、外の御見送りの御供の人々は、皇子の船にめさるゝを御見送り申して京に歸った。

おはしましぬと、人には見えたまひて、三日ばかりありて、漕ぎかへりたまひぬ。　かねて事みなおほせたりければ、其の時、一のたくみなりける、うちまろら六人をめしとりて、たはやすく、人よりくまじき家をつくりて、かまへを三重にしこめて、たくみらを入れたまひて、みこも同じ所にこもり給ひて、しらせ給ひつるかぎり、十六そをかみにくどをあけて、玉の枝をつくり給ふ。　かぐや姬、のたまふやうにたがはず、つくりいでつ。　いとかしこくたばかりて、難波にみそかにもていでぬ。　『船に乘りてかへり來に

けり』と殿につげやりて、いといたく、苦しげなるさまして居たまへり。むかへに、人おほくまゐりたり。玉の枝をば長櫃に入れて、物おほひて持ちてまゐる。いつか聞きけん。『車持のみこは、うどんぐゑの花もちてのぼり給へり』との丶しりけり。

【釋義】おはしましぬと、人には見えたまひて　筑紫へ漕ぎ出で給ひぬと、世間の人にも、供奉の人にも、御見せなされてなり◎かねて　前もッて、また、あらかじめの意◎事みなおはせたりければ　万事仰せ付け置きたればなり◎一のたくみ　第一の名匠をいふ◎うちまろら　内麻呂等にて、工匠の名◎たはやすく　たやすくにて、容易にの義◎よりくまじき寄りて來る事かたきなり◎かまへを三重にしこめて　家の構を三重に爲籠てなり◎まらせ給ひつるかぎり、十六そをかみにくどをあけて　此の所、世に流布せる諸本ども、みな、同じけれど、かならず、誤脱あらん。完全なる善本を得ざれば、詳に解きがたし。また、先達の諸説もあれど、高尚に過ぎて、童蒙には、通じがたく覺ゆれば、く、暫く、單簡なる一說を擧ぐべし。

さて、しらせ給ひつるかぎり十六そをは、此の皇子の、知行したまふありたけの莊園、十六所といふ義にて、其の知行の莊より、出來る物成を取りて、玉の枝を造る費用に充てられしなり。かみは、守なり。くとは、くらの寫しあやまりにて、くらをあけては、即ち、皇子の莊園十六所より取り上る年貢の米穀類を收め置く、其の倉を支配する守に命じて、倉に納れたる五穀などを取り出だしたるなりとあり。

さて、知行の莊園の物成を以て、種々の費用に充てたることは、宇津保物語、嵯峨の院の卷、政頼の左大將の神樂したまふ處に、あるじ(あるじは饗なり)のことは、美作より、米二百石たてまつりためり。伊余の御封、御莊の物も、もてまうで來ためれば、それ炊ぎてこそ、仕へまつらすべかめれ云々、また落窪物語の、中納言、三條の家、造らせ給ふ所にも、あこたち、我等が住まんに、いと廣うよしといひて、二年ばかりに出でくる莊の物を盡くして、築土より始めて、新らしく築きまはして、古材ひとつ交へず、大事にて作らせ給ふ云々などありて、かゝる例は、古書にいと多く見えたり。さて上に引ける、宇津保物語、落窪物語等の作者は共に源の順の作と古來より云ひ傳へたれど、そはさだかならず。然れども作られし年代は共に古し。中にも、宇津保は、此の竹取と共に世にもてはやされし物語なり。されば、源氏物語、繪合の

卷にも、たけとりのおきなに、うつぼのとしかげの卷をあはせて云々、また、淸少納言の枕の草子にも、物語は住吉、うつぼの類云々と見えたり。源氏も枕の草子も、今よりは、おほかた八百餘年前に作られし書なり。

◉いとかしこくたばかりて　甚よく工夫しての意なり◉みそか　ひそかといふに同じ。人に知られぬ樣、内々になり◉もていでぬ　持ち出だしぬにて、玉の枝を京より難波に持ち出だしたるなり◉殿につげやりて　殿は、京なる皇子の御殿をいふ。此の旅行は、もとより祕密の策略なれば、我が家にも、眞寳に蓬萊に行きて、只今、歸りたるよし報知せしなり◉いといたく、苦しげなるさま　長き海路に、うみつかれ、船中にて、甚、なやめるさまを示したるなり◉長櫃　今の長持といふ器なり◉物おほひて　油單の類を、長持の上にかぶせてなり◉うどんぐゑの花　優曇華の花なり。優曇華の花は、三千年に、一たび現はるゝものとて、珍らしきものにいひ傳へたり。こゝは、玉の枝なれども、世の人は、珍らしき物なれば、優曇華とかたりまがへたるなり◉のゝしり　今は、罵詈の意にのみいへど、此の時代には、いひ騷ぐ義に用ゐたり。

【評解】さて、皇子は、もはや、筑紫へ御出でなされたと、ほかの人々へは、御見せなされて、其の寳は三日ほどたッて、ひそかに漕ぎもどられた。

前以ッて委細の事は仰せ付けて置かれたによッて、早速其のころ天下第一の細工人である、鍛冶工内麻呂等六人を呼び寄せて、容易に、人の來ることのできぬ家をこしらへて、其の家の搆を三重に建て籠めて、其の内に工匠どもを御入れなされて、皇子も一所に御こもりなされて、領分として知行なさるゝかぎり、十六莊の年貢を支配する守に命じて倉を開けて、其の米などを以て、みんな細工人の手間代に充て、玉の枝を御つくりなさる。

赫映姫の、云はるゝとほりにちがはず、こしらへだした。

さて、それから、ごくよう工夫して、其の玉の枝を、難波までそッと持ちだした。

それから、わざわざと、また、船に乗り込んで

船に乗ッてやうやう蓬萊から歸ッて來たわい

と、御殿へ知らせて、きつうひどう、くたびれて、苦しさうなふりをして御いでなされた。

此の知らせを聞いて、御殿から御むかひに、人々たくさんまゐッた。

玉の枝をば長持に入れて、おひをかぶせて持ッてまゐられた。

世間の人が、此の事をいつの間に聞いたやら。

車持の皇子は、優曇華（ウドンゲ）の花を持つて御のぼりなされたと言い騷いだわい。

これをかぐや姫きゝて、我は此の皇子にまけぬべしと、胸（ムネ）つぶれておもひけり。

かゝるほどに、門（カド）をたゝきて、『車持の皇子おはしましたり』とつぐ。

『旅の御すがたながらおはしましたり』といへば、あひたてまつる。皇子のたまはく、『いのちをすてゝ、彼の玉の枝もちて來たり』とて、『かぐや姫に見せ奉りたまへ』といへば、翁、もちて入りたり。此の玉の枝に、文をぞつけたりける。

いたづらに　身はなしつとも　玉のえを
たをらでさらに　かへらざらまし

これをもあはれと見てをるに、竹とりの翁、はしり入りていはく、『此の皇子

にまうし給ひし、蓬萊のたまの枝を、ひとつのところもあやしき所なく、あやまたずもておはしませり。何をもちてか、とかく申すべき。旅の御すがたながら、我が御家へもより給はずして、おはしましたり。はや、此の皇子にあひつかうまつりたまへ』といふに、物もいはず。つらづゑをつきて、いみじう、なげかしげに思ひたり。

【釋義】 まけぬべし　負けぬべしなり。車持の皇子に負けて、其の心に從（シタガ）はではかなはぬなるべしとなり◎胸つぶれておもひけり　胸のつぶるゝほど心配したりとの意。深く心配したるをいふ◎かゝるほどに　かくしてある間になり。即ち、姫の深く心配してをるうちになり◎旅の御すがたながら　旅の御姿のまゝにての義◎あひたてまつる　翁が、皇子に對面し奉るなり◎いのちをすてゝ　命を捨てゝなり。一命をなげうちての意◎もち入りたり　玉の枝を持ちて、姫の居所へ入りたるなり◎いたづらに　俗に、はかなう、また、むだものになどいふに當る◎身はなしつとも　身はなすともの意◎たをらで　たは、例の添へたる言

にて、折らずにはの意◎さらにかへらざらまし　ふたゝび、歸へらざるべしの意◎これをも
あはれ　これをもは、此の歌をもなり。あはれは、俗に、おいとしいなどいふ意なり。かぐや姫は、此の玉の枝を、眞物と思ひて、かくまで、皇子の心をくだき給ひしことよと、あはれに思ひたるに、此の歌を見て、また、ひとしほあはれと思ひたるなり◎竹とりの翁、はしり入りて　上に、翁、もち入りたりとありて、また、こゝに走り入りてとあるによりて、童蒙のいぶかしく思ふ所なり。最初に持ちて入りしは、姫の前に出だしたるのみなり。然るに、姫が速かに返答せぬ故、玉の枝を眞物と思ひこみたる翁は、返事のおそきを催促せんとて、更にまた走り入りたるなり◎ひとつのところも　一箇所もにて、少しもの意◎あやしき所なく　かはつた、へんな所なくなり。蓬萊の玉の枝に、疑ひなきよしなり◎あやまたず、相違なくなり◎もておはしませり　持ちて來たまへりの意◎何をもちてか、とかく申すべき　どうして、兎や角と申すべき事か、とやかく申すべき事にてはなしの義◎はや　早くなり◎あひつかうまつりたまへ　逢ひ仕へ奉り給へなり。皇子に逢ひて、從ひたまへの意◎物もいはず　思案にくれて、姫が物も言はぬなり◎つらづゑ　俗に、頰杖とも、臂杖ともいふに同し。もの思ひをする時に爲すわざなり◎いみじう　甚しく、また、非常になり◎なげかしげ　なげか

はしき風情をいふ。

【評解】此の評判を赫映姫が聞いて、

もし、評判の如く、ほんとうに蓬萊の玉の枝を持ッて御いでになッたのであるならば、我ハ此の皇子に負けて、いやでも從がはねばならぬであらう。こりや困ッた事ぢやと、胸をつぶして、深く思案をして居ッたわい。

かやうに思案をして居るうちに、竹取の家の門をたゝいて、

車持の皇子が御こしなされた

と告げた。

皇子は、御殿へ御かへりにならず、旅の御姿のまんまで御こしなされた

と云うによッて、翁が出て、皇子に御對面申した。

皇子のおッしやるには

生命を投り出して、彼の蓬萊山にあッた、玉の枝を持ッて來た

と仰せられて、玉の枝を、翁の前に持ち出し

早く赫映姫に御見せくだされ

と仰せらるれば、翁は、それを持ッて姫の居室へはいッた。

此の玉の枝に、文がつけてあッた。

其の文を見れば

よし、此の身は、はかなうなッても、姫の見たいと云う玉の枝を、手折らずには、ふたゝび都へは歸ッて來まい。どのやうな難義をしても、姫のほしがる。玉の枝を取ッて歸らねばならぬ

と書いてあッた。

赫映姫は、此の玉の枝を眞實の物と思い、我が身は、所詮人に偶う事のできぬ身故、わざと難題を言い懸けて、さまざまに斷るのを、それとも知らす、まア千萬里の波濤を凌いで、かくまで、皇子は、我が爲に心をくだかるゝことかなど、其の心ざしを御いとしいと思い、また、此の歌をもあはれと思うて、じッとながめて居るに、竹取の翁はもどかしがッて、走ッて來て云うには

そなたが、此の皇子に申された、蓬萊の玉の枝を、これ此の通り一箇所も疑はしい處なく、相違なく持ッて御こしなされた。

どうして、今さら兎や角と辭退申すべき事であらうぞ。

其の上、皇子は旅の御姿のまんまで、御じぶんの御家へも、御寄りなされずに、おこしなされた。

はやう、此の皇子に、お偶いなされよ

と云うに、赫映姫は、物も云はず。頰杖をついて、大そう、悲しさうに物案じをして居た。

此の皇子、『今さら、何かといふべからず』といふまゝに、えんにはひのぼり給ひぬ。翁、ことわりに思ふ。『此の國に見えぬ玉の枝なり。此のたびは、いかでかいなみ申さん。人ざまもよき人におはす』などいひ居たり。かぐや姫のいふやう、『おやののたまふことを、ひたぶるにいなみまうさんことの、いとほしさに、『得がたきものをゆかし』とは申しつるを、かくあさましくもてくることをなん、ねたくおもひはべる』といへど、なほ、翁は

閨のうち、しつらひなどす。

【釋義】今さら、何かといふべからず　今になりて、彼此と云ふべきにあらずなり◎いふまゝに　言ひながらなり◎えん　椽にて、座敷の端にある板敷なり◎はひのぼり　這ひ上る字義なれども、こゝは、たゞ、遠慮なくあがる狀を云へるなり◎ことわりに思ふ　道理なりと思ふなり◎此のたび　今度はなり。先度、車持の皇子には、辭退もしたれど、今度はの意◎いなみ　否と辭退する意◎人ざまも、よき人におはす　俗に、御樣子も好い人で御座るなどいふに同し。人ざまは、皇子の樣體をいふ◎ひたぶる　只管といふに同じ。俗に、一向に、またいちづになど云ふに當る◎いとほし　俗に、氣の毒といふに當る◎もかし　此所は、見たしと願ふ意なり◎かくあさましく　かくは、かやうにの意、あさましくは、案外に、又、けしからぬなどいふ意。所詮、得がたしと思ひて注文したる物を、取りて來たるは、案外なる事と、驚きたるよしなり◎ねたく　くちをし、また、殘念などいふ意◎なは　翁は姫の不承知なるにもかゝはらず、矢張支度などするといふ意◎しつらひ　座席を取り繕ひなどするをいふ。

【譯解】車持の皇子は、姫の返事を待ちかね

今になッて、彼れ此れと云うに及ばず。約束の品を持ッて來たからには御意存あるまいと云いながら、椽側にずッと御あがりなされた。

翁は、皇子の云はるゝことを御もッともと思うた。

よッて、おほきに喜んで

こりや、此の日本國には見ることも出來ぬ玉の枝ぢや。

まことに、蓬萊山で、取ッてござッたに相違あるまい。

先度、石作の皇子は、僞せの御石の鉢を持ッてまゐられたればこそ、ことわられもしたれ。

これは、まことの玉の枝なれば、今度は、どうして辭退が申されやうぞ。

其の上、皇子は御樣子もよい御方で御いでなさる

などゝ云ッて居た。

かぐや姫のいうことには

父母の御親切に男にそへと仰せらるゝ事を、いちづに斷る事が氣の毒さに、わざと難題をもちだして、

世の中に得にくい品物を見たい

と申しましたのに、かやうに案外にも持ッて御こしなさるゝ事をサ私は口惜う思いまする
といへど、翁は耳にも入れず、知らぬふりして、やッぱり、閨の中を、取りつくろいなどす。

翁、皇子に申すやう、『いかなる所にか、此の木はさふらひけん。あやしく、うるはしく、めでたき物にも』とまうす。皇子、こたへてのたまはく、『さをとゝしのきさらぎのとをか頃に、難波より船に乗りて、海中にいでゝ、ゆかん方も知らずおぼえしかど、おもふ事ならでは、世のなかに生きて、何かせんとおもひしかば、たゞ、むなしき風にまかせてありく。いのち死なば、いかゞはせん。生きてあらんかぎりは、かくありきて、蓬萊といふらん山に逢ふやと、浪にたゞよひ漕ぎありきて、我が國のうちをはなれて、ありきまはりしに、或時は、浪あれつゝ、海の底にも入らんとし、あるときには、風につけて、知らぬ國に吹き寄せられて、鬼のやうなるもの出で來て、ころさんとしき。或るときには、來しかたゆく末も知らで、海にまぎれんとしき。ある時には、かてつきて、草の根をくひものとしき。或るときには、いはんかたなく、むくつけゞなるもの來て、喰ひかゝらんとしき。或るときには、海の貝を取りて、いのちを續ぎゝ。旅のそらに、たすくべき人もなき所に、いろいろの病をして、ゆくへすらもおぼえず。船の行くにまかせて、海にたゞよひて。いほかといふ辰の時ばかりに、うみの中に、はるかに山見ゆ。船のうちをなん、せめて見る。海のうへに、たゞよへる山、いとおほきにてあり。其の山のさま、たかくうるはし。これや、我がもとむる山ならんとおもへど、さすがに、おそろしくおぼえて、山のめぐりをさしめぐらして、二三日ばかり見ありくに、天人のよそひしたるをうな、山の中より出で來て、白がねのかなまりを持ちて、水を汲みありく。

これを見て、船よりれりて、『此の山の名を、何とか申す』と問ふに、女こたへていはく、『これは、ほうらいの山なり』とこたふ。これを聞くに、うれしきことかぎりなし。此の女に、『かくのたまふは、誰ぞ』と問ふ。『我が名は、ほうかんるり』といひて、ふと、山の中に入りぬ。其の山を見るに、更にのぼるべきやうなし。其の山のそばづらをめぐれば、世の中になき花の木ども立てり。こがね、しろがね、るり色の水ながれ出でたり。それには、いろいろの玉の橋わたせり。其のあたりに、照りかゞやく木ども立てり。その中に、此の取りて持ちてまうで來たりしは、いと、わろかりしかども、のたまひしにたがはましかばとて、此の花を折りてまうで來たるなり。山はかぎりなくおもしろし。世にたとふべきにあらざりしかど、此の枝を折りてしかば、さらに心もとなくて、船に乗りて、追風ふきて、四百餘日になん、まうで來にし。大願のちからにや。難波より、昨日なん、みやこにまうで來つる。さらに、しほにぬれたる衣をだに、ぬぎかへなでなん、こちまうで來つる』とのたまへば、翁きゝて、うちなげきてよめる、

くれ竹の　よゝのたけとる　野やまにも
さやはわびしき　ふしをのみ見し

これを皇子きゝて、『こゝらの日ごろ、おもひわびはべりつる心は、今日なん、おちるぬる』とのたまひて、かへし

我がたもと　けふかわければ　わびしさの
ちくさのかずも　わすられぬべし

とのたまふ。

【釋義】翁、皇子に申すやう云々　皇子は椽に上りて、姫の返事を聞かんと迫るに、姫はなげかはしげに、玉の枝をうちまもりて、一言のこたへもせざれば、翁は此の場をつくろはん

爲に、要もなき問を設けて、姫に決答せさすべき時間をあたへんとつとめたるなり。然るに、皇子は得たりと思ひ、艱難辛苦せしありさまを、得意然として、語りいでられしなり。姫の沈默、翁の周旋、皇子の得意、さながら現場を見るが如し。殊に、皇子がしたり顔に身うごめかして、無根の事がらを揑造し、口に任せて、怪異の談、珍奇の話をのべたつる狀、寫し出たして頗る妙なり。作者が縱橫なる筆勢、波瀾ありて、變化ありて、いとおもしろし。よく意をとめて讀み味はふべし。

さて、此の皇子は能辯なりと雖ども、もとより即座の頓作なれば、初めに、一昨々年の二月の十日ごろに、難波より船に乘ると云ひ、次に、船の行くに任せて、海にたゞよひて、五百日といふ辰の時ばかりに、海中に山見ゆといひ、終りに四百餘日に都に歸ると云ひ、また、前には、命いきて、何かせんといひて後には、いのち死なば、いかゞはせんと云ひ、また、鬼の樣なるもの出で來て、殺さんとしきと云ひ、また、むくつけゞなる物、喰ひかゝらんとすといひ、また、草の根をくひものとしきと云ひて、また海の貝を取りて、命を繼ぐといふなど前後の衝突、ことがらの重複せること多かり。これ此の作者が、立案のたくみなる所にして、皇子が、口に任せたる虛言のさまをば、暗に讀者に知らしめんとて、わざとかく同じ樣なることを、多く重ねて述べたるなり。かく同樣なる事がらを多く述べたれど、波瀾わくが如く、讀者をして聊かも飽かしめざるは、作者が筆力の非凡なる所なり。

◎いかなる所にか　蓬萊の山の中のいかやうなる所にかなり◎さぶらひけん　俗に、ござりましたろうといふ意◎あやしく　こゝは珍奇の意にて、世に見なれぬを云ふ◎うるはしく　こゝは俗に、立派といふに當る。うるはしとは、もと、端正なる意なるが轉れるなり◎めでたき　俗に、結構なるといふほどの詞◎物にもとまうす　物にもの下には、あるかななどの詞を加へて見るべし◎さをとゝし　前昨年の義にて、一昨々年をいふ◎きさらぎのとか　二月十日なり◎もかん方も知らず　蓬萊の山の在處も知らねば、行くべき方角も知らずとの意なり◎世のなかに生きて、何かせん　世の中に生きながらへて、何をか爲さん。生きてある甲斐なしとの意なり◎むなしき風　何方と取りとめたる方角のなき風を云ふ。たゞ、風にまかせて、あてどもなく漕ぎあるけば、かく云へるなり◎ありく　あるくと云ふに同じ◎いのち死なば、いかゞはせん　若し、命なくならば、何とかせん。死なば其れまでの事にて、致しかたもなければとの意◎我が國のうちをはなれて　日本國を離れて、外洋に漕ぎ出でしなり◎風につけて　風の吹く方につきてなり◎來しかた、ゆく末も知らで　過ぎ來

し方も、是れより行くさきも知らずなり。即ち、何處とも知らずの意◎海にまぎれんとしき　海中に紛れ入りて、はかなくならんとしたりとなり◎かてつきて　食物されてなり。かてはいにしへ旅行に携へたるほし飯のことなるが、後には轉りて、たゞの食物をも、旅にては、かてと云ふなり◎いはんかたなく　言ひ樣もなきなり◎むくつけゝ　俗に、氣味わるそう、また、おそろしそうなどいふに當る◎もくへすらもおぼえず　さまざまの病氣をわづらひてなやめる上に、身の行方さへわからず、實に難義したりとなり◎いほか　五百日なり◎辰の時　今の午前八時なり◎船のうちをなん、せめて見る　船中より强ひて見るなり。せめては强ひてといふに同じ。それと慥かに見えぬ山を、いろいろ工夫して、强ひて見るなり。よりといふべき所ををといひたるは、古き詞づかひなり◎たゞよへる　海上に浮べる景色をいふ◎さすがに、おそろしくおぼえて　辛苦艱難してもとむる山を見つけて、嬉しと思ふものゝ、また知らぬ土地なれば、氣味わるく思はるゝなり◎さしめぐらして　船に棹さし、漕ぎ廻らしての意◎天人　天人とも天女ともいひて、佛説に、天上を飛行する女神にて、頭に華鬘を着け、羽衣を着、身に光ありといふ◎よそひ　装束なり◎白がねのかなまり　銀にて作れる椀なり。まりは、いにしへ、水、酒などを盛りし器の名◎船よりおりて　船より陸へ下りてなり。陸は高く、船は低き故に、今の人は、多く船より上るなど云へど、いにしへは、陸より船に乘るを、上ると云ひ、船より陸にあがるを下ると云へり。心得おくべし◎はうかんるり　皇子の僞り作り給ふ仙女の名なり。寳嵌瑠璃なりとも、または、寳冠瑠璃ならんともいへど、固より仙人めかして作り設けたる虚誕の名なれば、强ひて漢字を充つるに及ばず◎ふと　俗に、ふいとといふに同じ◎更にのぼるべきやうなし　山のさま嶮岨にして、さらさら登らるべき樣なしとの意◎そばづら　山の崖面なり◎こがね、しろがね、るり色の水　金色、銀色、瑠璃色の水なり◎いろいろの玉の橋　種々の玉を以て作れる橋なり◎照りかゞやく木　金銀珠玉の花が咲きたる木なれば、其の光りが照り耀くなり◎持ちてまうで來たりし　持ちてまゐりましたるはの意なり◎のたまひしにたがはましかば　たがはましかばの下に、わろからましと云ふ詞を入れて見るべし。姬のおほせられし玉の枝に違ひては惡しからんと思ひてなり。照り耀く木の中には、これよりも美麗なる玉の枝も澤山ありしかど、注文どほりに、白銀の根、黄金の莖、白玉の實と、皆揃はでは氣に入るまじと思ひて、わろけれども、此の枝を取りて來りたりとの意◎世にたとふべきにあらざりしかど　たとへて云ふことのできぬ程、山の景色おもしろくて、いつ迄も見て居りたかりしかどの意◎さらに心もとなくて

今更にはやく歸りたくての意なり。心もとなくれ、侍ち遠なる義◎追風　順風を云ふ◎大願のちからにや　力にやの下に、ありけんと云ふ詞を補ひて見るべし。神佛に大願を掛けたる功力にやありけん、無事に歸京せりとの意◎さらに　改めての意◎こち　此方なり。俗に、こちらへと云ふに同じ◎うちなげきてよめる　翁が皇子の千辛萬苦のほどを歎息して、歌よめるなり◎くれ竹　呉竹は竹の一種なれど、こゝはたゞの竹を指せるなり。竹の節と云ふより、世々に言ひ係けたるなり◎さやはわびしき　ふしをのみ見し　さやは、さやうに、また、それほどの意。わびしきは、難義なるといふ意。ふしは、竹の節に寄せて云ひたる詞なるが、俗に、つらい目に逢うたなど云ふ目といふに當る。一句の意は、さやうに難義な目を見やうか、それほど難義な目にあはざりきとなり◎こゝらの日ごろ　多くの日數なり◎おちゐぬる　落居ぬるにて、心の落ち付きたるなり。安堵といふに同じ◎けふかわければ　今日まで涙にぬれし袂も、今は、かぐや姫に偶ふ事が定まりて、心おちつきて、其の涙もかわきたればなり◎わすられぬべし　忘れらるゝならんの意◎ちくさのかず　千種の數にて、たびたび種々のわびしき目に遭ひし數の意なり。

【譯解】皇子は、姫の返事を待ちかねて、ずッと椽側に御あがりなされたに、姫は、悲しさうに、じッと玉の枝をみつめて、ひとことも返事をせぬによッて、翁は此の場をつくろい、どうかして時間を延ばし、姫によい返事をさせんと思ひ、せきこむ皇子にむかいて申すには、

どのやうな所に、此の玉の枝の木はござりましたのでせう。

まア奇妙にきれいに、結構な物でありますわい

と問いかけた。

皇子は、玉の枝を取ッて來たに就いて、猶、種々の苦辛をした事を話し、一層姫を思う親切の深さを翁に聞かせんと思う所なれば、得意然として、答へて仰せらるゝには、

一昨々年の二月の十日の比に、攝津の國難波の浦から船に乗ッて、海の中に漕ぎ出でゝ、行くべき方角もわからず思はれたれど、思う事が成就せずば、世の中に生きながらへて、なんとせうぞと思うたによッて、たゞ、あてどもなく望まれもせぬ風に任せて漕ぎあるいた。

萬一命がなくならば、どうせうぞ。

もしも、死んだらしかたが無いが、生きて在る中は、かやうに漕ぎあるいて、其のうちには、蓬萊とやら云う山に行き逢うかも知れぬと思うて、浪に漂い漕ぎあるいて、我が國の內を放れて、はるばると漕ぎあるいて廻ッたが、或時は、浪が荒れて荒れて、海の底へも落ち入り

さうであッた。

或時には、風につれて、話にも知らぬおそろしい國に吹き寄せられて、どうしやうかと思う所へ、鬼のやうなすさまじい物が出て來てわれわれを殺さうとした。

また、或時には、來た方も行く末も知れず、海の中に紛れ入りて、命を落さうとした。

また、或時には、食物がきれて、草の根を掘ッてたべ物とした。

また、或時には、言はうやうも無い、きみのわるい様なものが出て來て、喰いつかうとした。

また、或時には、食物が盡きて　海の貝を取ッて、やうやく命をつないだ。

たゞさへ心細い旅のそらで、助けてくれる人も無い所で、さまざまの病氣をしてこまッたが

蓬萊の山はおろか　行く方角さへもわからぬ。

たゞ、船の行くに任せて、海上に漂ッて居ッたが　五百日目と云う辰の時ばかりに、海中に遥に山が見える。

こりやうまいと、まだしつかりとは見えぬを、船の中からサ強いてよくよく見る。

海上に浮いて居る様な山が在つて、きつう大キい。

また、其の山の様子は、高う空に聳えて、景色が甚だきれいな。

こりや、我が尋ねる蓬萊山と云う山であらうと思うて實に嬉しかッたけれど、しかしさうは思うもの丶、まだ知らぬ所なれば、何となくれそろしく覺えて、すぐにはえう上らず、山のぐるりを船で漕ぎ廻ッて、二日三日ほど見あるいたが、其のうちに、天人の風體をした女が、山の中から出て來て、銀で作た椀を持ッて、水を汲んであるいた。

此の女を見つけて、船から陸へ下りて、

此の山の名をば、なんと云うか

と問うた所が、其の女の答へて云うには、

これは、蓬萊の山じや

と答えた。

これを聞いて、嬉い事が際限もない。

さて、此の女に、

かやうに云はる丶は、どなたであるぞ

と問ふた。

彼の女は、——

わたくしの名は、はうかんるりと申す

と云うて、ふいと、山の中へはいッた。

其の山を見るに、どんと嶮岨で登られさうにも無い。

其の山の崖面を廻れば、世間に無い花の咲いて居る木など立ッて居る。

其の木の蔭には、黄金、白銀、瑠璃色の水が流れ出て居る。

其の流の上には、種々の玉でこしらへた、玉の橋を渡してある。

また、其の近邊には、照り輝く木なども立ッて居る。

其の中で、此の取ッて持ッてまゐッた枝は、きつう、わるかッたけれども、仰せられた御注文にちがッたらばわるからうと思うて、此の花の枝を折ッてまゐッて來たのぢや。

さて、山はかぎりなく景色がよかッた。

其のよい景色は、世の中に譬へて云いやうが無かッたによッて、ゆッくり見物して居たかッたけれども、かんじんの此の玉の枝を折ッてしまッたによッて、一段と早う歸ッて姫に逢いたうて、すぐに船に乘ッて歸るにさいわい追風が吹いて、四百日あまりにサ歸ッて來た。

神佛に祈ッた大願の功力であるか知らん。まア無事で難波から、昨日やッとサ都へまゐッた。

しかし一時も早く姫に玉の枝を見せたう思うて、別段に鹽にぬれて居る衣服をさへ、脱ぎかへずにサ　此方らへまゐッた

と仰せらるれば

翁は此の皇子の艱難辛苦せる物語を聞いて、歎息して、左の歌を詠んだ。

　此の翁が、呉れ竹のよゝ（節に世をかぬ）を重ねて、年ひさしう竹を取りに野山に分け入るうちには、色々辛苦も致しましたけれども、それでも、あなたの云はるゝ樣な、その樣な難義な目に逢いませうか、まだ其の樣な目には逢いませぬ。さてさてあなたは、御いとしい事であつた。

是の歌を、皇子聞いて

　あまたの日ごろ、姫の事に就いて、さまざまと思いあぐみました心は、今日という今日サやッとまア　おちついた

と仰せられて、左のかへし歌を詠まれた。

　年來姫のつれなさをかこつ涙で袂を濡らしてばッかり居たが、いよいよ今日姫に逢う事に定ッて心もおちつき、我が袂も、今日乾いたによッて、千萬里の海上を渡ッて難義であッ

た、いろいろの憂さつらさの數々も、忘らるゝであらう
と仰せられた。

かゝるほどに、男ども六人つらねて、庭にいで來たり。一人のをとこ、ふみはさみに、文をはさみてまうす。『つくも所のつかさのたくみ、あやべのうちまろ申さく。玉の木を作りて、つかうまつりしこと、心をくだきて千餘日に、力をつくしたることすくなからず。しかるに、祿いまだ給はらず。これを給はりて、わかちて、けこにたまはせん』と云ひてさゝげたり。竹取の翁、このたくみらがまうすことは、何事ぞとかたぶきをり。皇子は、われにもあらぬけしきにて、肝きえぬべきこゝちして居たまへり。これをかぐや姫きゝて、『此のたてまつる文をとれ』といひて見れば、文に申しけるやう、『みこの君、千餘日、いやしきたくみらともろともに、おなじ所に隱れ居たまひて、かしこき玉の枝をつくらせ給ひて、『つかさもたまはん』と仰せたまひき。これをこのごろあんずるに、御つかひとおはしますべき赫映姫のえうじたまふべきなりけりとうけたまはりて、此の宮よりたまはらんと申して、たまはるべきなり』といふを聞きて、かぐや姫、くるゝまゝに、思ひわびつるこゝちゑみさかえて、翁をよびとりていふやう、『まことに蓬萊の木かとこそおもひつれ。かくあさましきそらごとにてありければ、はやとくかへし給へ』といへば、翁こたふ。『さだかに、つくらせたる物と聞きつれば、かへさん事いとやすし』とうなづきをり。かぐや姫の心ゆきはてて、ありつる歌のかへし、

まことかと　聞きて見つれば　ことの葉を
かざれるたまの　枝にぞありける

といひて、玉の枝もかへしつ。竹取の翁、さばかりかたらひつるが、さすがにおぼえて、ねぶりをり。皇子は立つもはした、居るもはしたにて居たまへり。日のくれぬれば、すべり出でたまひぬ。

【釋義】かゝるほど　如此有る間にて、翁と皇子と對話せる間なり◎つらねて　連れ立ちてなり◎ふみはさみ　文挾なり。貴人に文をさゝぐるには、細き竹のさきに其の文を挾みてさし出すなり◎つくも所のつかさのたくみ　作物所の司の匠なり。作物所は、禁中の細工所なり。つかさは、役所なり。たくみは、作物所につかはるゝ細工人なり◎あやべのうちまろ　漢部は姓、内麻呂は名なり。此の時代の名匠は、おほかた支那朝鮮より歸化せる者に多かりければ、歸化人らしく漢部とは名つけたるなり◎祿　賞賜の物なり。また、被物とも云ひて、上より賜はる物をいふ。大抵は、絹布、衣服の類なり◎わかちて　配分してなり◎けこ　下工にて、細工の下働きをする手下のものどもを云ふ◎たまはせん　賜はしめんにて、頂戴させんといふほどの意◎かたぶきをり　傾き居りにて、首を傾けて、思案して居る狀を云ふ◎われにもあらぬけしき　我れを我れとも思はぬ氣色にて、魂も身にそはぬ樣子なり。

皇子は、謀計の顯れんことを恐れたまひて、心も心ならぬさまなり◎肝きえぬべきこゝち　肝たましひも消えさうな心もちなり◎此のたてまつる文をとれといひて見れば　侍女にいひつけて、此の内麻呂の奉る文を取らしめて見ればの意なり◎文に申しけるやう　これより以下、文の詞なり◎かしこき　貴重の義。俗に、たいさうななどいふに當る◎つかさもたまはん　官をも授けんにて、即ち、官員にせんとなり◎これをこのごろあんずるに　之を此の頃案ずるになり。案ずるは、考ふるになり◎御つかひとおはすべき　御召使と、御なりなさるべきなり。つかひとは、妾のことを云へるなり◎えうじ　要じにて、得たしと望む意なり◎此の宮よりたまはらん云々　此の御殿より祿は下さるべき由を申して、頂戴すべきなりとの意なり。此の御殿とは、即ち姫の家をいふ◎くるゝまゝに、思ひわびつるこゝち　日の暮るゝに隨ひて、困り果てたる心地なり。日くるれば、皇子に逢ふべき時のせまるが故なり◎ゑみさかえて　咲み榮えてなり。困り果てたる心配もはれて喜ぶさまなり。ゑみさかえは、俗に、にこにこと嬉しさうにしてなどいふに當る◎よびとりて　いそぎて呼びよせてなり。呼びとるとは、人を呼ぶに、其の人の來るを待ちかねて、來るがいなや、物などいひ掛る時につかふ詞にて、たゞ、よぶといふとはいさゝか異なり◎あさましきそらごと　けしからぬ虛言

の義なり◉はやとく　早疾にて、早くといふを強めていひたるなり◉さだかに、つくらせたる物と聞きつれば　さだかには、定かになり。儘に僞造したまへる物と聞きつればなり◉うなづき　合點するをいふ。頭にて諾なふ時のさまなり◉心ゆきはてゝ　心全く晴れてなり。今まで、いかゞせんと、案じ煩ひたる思ひが消えて、心の晴ればれとなり果てたるをいふ◉わりつる歌　玉の枝につけてありし歌をいふ◉まことかと聞きて　皇子の、のたまふことを、眞實の事なるかと聞きてなり◉ことの葉をかざれる　たゞ、詞をまことらしく飾れるにて、玉の枝の僞物なるよしを含めたるなり◉玉の枝もかへしつ　歌のかへしもし、玉の枝も返したりとなり◉さばかりかたらひつるが　あれほど語り合ひしがなり。翁は皇子の話を眞實と思ひて、歌など詠み、色々と親切に話し合ひたるを云ふ◉さすがにおぼえて　皇子の虚言は顯はれたものゝ、さすがに、皇子に對し氣の毒に思はれてなり◉ねふりをり　眠り居りにて、翁は皇子のことを氣の毒に思ひ、目を閉ぢて、物もいはず、居眠りをして居るさまをするなり◉はした　不都合と云ふ意。塲合のわろき事を云ふなり◉すべり出でたまひぬ　人に知れぬ樣に、そッと御立ち去り遊ばしたの意なり。

【譯解】かやうに皇子は得意然として、艱難辛苦せる道中の趣きを話らるゝに、翁はこれを

眞實の事と思い、皇子の苦心のほどを嗟歎して、歌を詠んで慰めなどするを、皇子はしてやッたりと、ますます乘り氣になッて、返歌など詠んで居る所へ、男ども六人連れにて、突然、庭に出て來た。

其のうち一人の男が、文挾に文を挾みてかやうに申した。

作物所の役所の細工人、漢部の内麻呂が申し上げます、

車持の皇子の仰せをうけたまはッて、玉の木をこしらへて、御奉公を仕りました事に就いては、いろいろに心をくだひて、千日あまりも、ちからを盡しました事は少々ではありませぬ。

然るに、下され物はまだ一向に下されませぬ。

どうか早く是れをいたゞきまして、それぞれ分配して、下働きの者に頂戴いたさせませうと云うて、文挾に挾みたる文を差し出だした。

竹取の翁は、玉の枝の僞物なることを少しも知らねば、此の細工人どもが云うことは、いッたい何事ぢやと不思議に思うて、頭を傾け思案して居る。

皇子は、打ッて變ッて、たくみにたくんだ謀計あらはれ、數年の辛苦も水の泡とならんとすれば、心も心ならず、たましひも身に添はぬあんばいで、肝も消えさうな心もちをしておいでな

された。
是れをかぐや姫が聞いて、
　今此の内麻呂等がさしあげた文を取れ
と云うて侍女に取らせて、其れを披き見れば、その文に申したやうは、
　皇子の君は、千日あまりも、下賤の細工人どもと一所に、同じ處に隠れておいでなされて、たいさうな玉の枝を御つくらせなされて、さて、其の報酬には、祿は云うに及ばず、官をも授けうと仰せなされた。
然るに其の後、何の御沙汰も無い。
そこで是れをこのごろ考へますに、彼の玉の枝は、全く皇子の御てかけと御なりなさる筈の、赫映姫が御のぞみなさるゝのであるわいと承知しまして、それでは、此のかぐや姫の御殿から作料を給はるべき由を申し上げて、さうして頂戴すべき筈でござる。
と云うことが文に書いてあるを聞いて、さては彼の玉の枝も案外に偽物なりと知ッて、赫映姫は、今まで日の暮れるにつれて、皇子と見逢いをせねばならぬ時刻の段々迫り來れば、思いあぐんで居ッた心もちもはればれとして、にこにこと嬉しさうに、翁を呼び寄せて云うやう

　私は眞に蓬萊の木かとサ思うた。
然るに、今御聞きの通り、かやうにけしからぬ嘘ごとであッたによッて、早々御返し下され
と云へば、
翁は答へた。
それはもうかやうにしッかりと、偽せにこしらへた物と聞いた上は、もどす事はきつうやすい
と云うて點頭て居る。
赫映姫は、今まで思案にくれし心もはれてしまうて、先刻皇子がよまれた歌の返しに
　あなたが辛苦艱難して、蓬萊山に行ッて取ッて御いで遊ばしたと云うは、ほんとうかと聞いて、よくよく見れば、みんな嘘ごとで、たゞ言葉を飾ッた偽せの玉の枝であッたわい
と詠ンで返歌と一所に玉の枝も返した。
竹取の翁は、初め玉の枝をまことの物と思いこんで、どうかして首尾よく皇子に姫を娶せやうと思うて、あれほど話し合うたが、今偽せ物なること、はつきりと顯れて見れば、さすがに皇子が氣の毒に思はれて、塲合わるさに、わざとゐねむりをして居る。

皇子は立ッて行くも不都合、すわッて居るも手もちぶさたで何ともしかたなく困りきッて御いでなされた。

其のうちやうやく日が暮れたによッて、これをよいのきしほと、そッと御歸りなされた。

かのうれへせしたくみらをば、かくや姫、よびすゑて、『うれしき人どもなり』といひて、祿いとおほくとらせたまふ。たくみら、いみじくよろこびて、『おもひつるやうにもあるかな』といひて、かへる道にて、車持の皇子、血のながるゝまでちようぜさせたまふ。祿えしかひもなく、皆とり捨てさせたまひてければ、逃げうせにけり。かくて、此の皇子、『一生のはぢ、これにすぐるはあらじ。女をえずなりぬるのみにあらず、天の下の人の見おもはんことのはづかしきこと』とのたまひて、たゞ一所、ふかき山へ入りたまひぬ。宮司、さぶらふ人々、みな、手をわかちてもとめ奉れども、みまかりもやしたまひけん。得見つけたてまつらずなりぬ。みこの、御供にかくしたまはんとて、年ごろ見えたまはざりけるなりけり。これをなん、たまさかるとはいひはじめける。

【釋義】うれへせし　愁願したる義なり◎うれしき人どもなり　かぐや姫の詞なり。細工人等は、玉の枝の僞造なる事を顯して、姫の難義をすくひたれば、姫の爲めに嬉しき人等なりと喜べるなり◎おもひつるやうにもあるかな　かぐや姫の御許に願ひ出でたらば、定めて祿あまたたまはるべしと思ひて願ひたるに、案の如くあまたの祿をたまはりたる事かなと、大に喜ぶなり◎ちようぜさせたまふ　打擲を爲させたまふなり。皇子は立腹のあまり、工匠等の歸りを道に待ちうけて、從者をして思ふまゝに打ち懲らさせらるゝなり◎はづかしきこと　恥かしきことの下に、かなといふ、歎息の辭を含めて心得べし◎一所　所は、貴人に云ふ詞にて、御一方と云ふに同じ◎宮司　今の世に、何々の宮の別當などゝいふ別當の如く、其の宮家の萬事を執り行ふ者を云ふ◎さぶらふ人々　祗候する人々の義にて、皇子に仕へ奉る人々を云ふ◎手をわかちてもとめ奉れども　手わけをして、皇子の御行方をさがし求め奉れども◎みまかりもやしたまひけん　薨去遊ばされしにもやあらんなり。みまかるとは、貴人

の死去せらるゝを云ふ◎みこの、御供にかくしたまはんとて　皇子は御供の人々にも見られじと、身を御隱し遊ばさんとてなり◎年ごろ見えたまはざりけるなりけり　年ごろは、年來にて年を歷てのこゝろなり。皇子は、眞實に御薨去あそばされたるにはあらず。長らくの間、すがたを隱して、人に御見せ遊ばされざりしなりけりの意なり◎たまさかる　魂離るの義にて、魂の拔け失せて、うつけになるをいふ。此の皇子、玉の枝を作りて失敗したるより、たましひも拔け、心もうつけ、ぼんやりとして、おろかになりたまへるを、玉の枝にかけて、たまさかるといふ言の本緣の如く、例の滑稽にいひなしたるなり。

〔評解〕皇子の立去られた後で、彼の歎願をした細工人どもをば、かぐや姫は、呼び寄せて

おまへがたの爲に、わらはは、ひどい難儀をのがれた、わらはが爲めには嬉い人たちぢや

と云うて、褒美をさつう澤山に御つかはしなされた。

細工人どもは、ひどう喜ンで、姫の御のぞみなさる玉の枝と知ッて、この御殿へ持ッて參ッたら

思うた通りに澤山な御褒美をいたゞいた事ぢやなァ

と云うて、喜ンで歸る道で、先刻、內匠等が詞によッて謀計の顯れたる事を、甚立腹なされた車持の皇子は、待ち伏せして居られて、細工人等を血が流れるほど打擲をおさせなされた。

細工人等は、まンまと褒美もらうた甲斐も無く、みンな取りあげて捨てさせなされたによッて、はうはうのていにて逃げ失せたわい。

さて、此の皇子は

我が一生の耻辱、是れにこす事はあるまい。

執心した女を娶られずなッたばかりではない。

天下の人が此の失敗を見て、あほらしい、つまらン事と思うのが耻づかしい事よ

と仰せられて、數多の人にかしづかれ給ふべき皇族の御身を以て、たッた御一人、深い山へ御はいりなされた。

皇子の御見えなさらなくなッたについて、こりや大變と、宮司を初め御奉公致す人々が、みンな、手わけをしてさがしまゐらすれど、御薨去でもあそばされたかしらん。えう見つけまゐらさずなッた。

皇子は世間の人に面を合さじと、御すがたを御隱しなさるは云うまでも無く、御自分の御家來にまで御隱しなされんとて、長らくの間、おすがたを御見せなさらなかッたのであるわい。

此の皇子が無分別な事をして失敗せられてより、たましひも拔け、心もうつけ、ぼんやりとなられたによッて、世間の人が、是れをサ魂の拔けると云い初めたわい。

火鼠の皮ごろも

これより、火ねずみの皮ごろものことをしるす

右大臣、阿倍のみうしは、たからゆたかに、いへひろき人にぞをはしける。そのとしわたりけるもろこし船の、わうけいといふものゝもとに、文をかきて、『火鼠のかはごろもといふなるもの、かひておこせよ』とて、つかうまつる人の中に、心たしかなるをえらびて、小野のふさもりといふ人をつけてつかはす。もていたりて、彼のうらにをるわうけいに、こがねをとらす。わうけい、文をひろげて見て、かへりごとかく。『火鼠のかはごろも、我が國になきものなり。おとには聞けども、いまだ見ぬものなり。世にあるものならば、此の國にも、もてまうできなまし。いとかたきあきなひなり。しかれども、もし天竺に、たまさかに、もて渡りなば、もし長者のあたりに、とふらひもとめんに、なきものならば、使にそへて、こがねをば、かへし奉らんといへり。

【釋義】 たからもたか　財豊(タカラユタカ)にて、富貴なるを云ふ◎いへひろき　一族の數多なる意にて、家門繁昌なるを云ふ◎わたりけるもろこし船　商業の爲に日本國に渡り來れる唐船なり◎火鼠のかはごろも　支那人の說に、南荒の外にある火山に、火鼠住みて、毛の長さ二尺ばかりあり。これを取りて、布に織れるものを火浣布(クワクワンプ)と云ふ。火浣布は、垢づき汚れたる時、火中に投ずれば、燒けずして、かへりて鮮白となるものと云ひ傳へたり◎かひておこせよ　買ひ求めて、送りくれよなり◎心たしかなる　心の確なる者にて、即ち實直なる者と云ふ意◎つけて　手紙につけ添へてなり◎もていたりて　持ちて行きてなり◎彼のうら　筑前の國、博多(ハカタ)の浦を云ふ。此の浦は、むかし異國の船舶のつきし所なり。おほかた、太宰府(ダザイフ)につく船は、まづ博多に着きしと見ゆ◎こがねをとらす　黄金(コガネ)を取らすにて、皮衣の代價の金子(キンス)を渡したるなり◎おとには聞けども　世の風說には聞き居れどの意◎此の國にも、もてまうで

きなまし　此の日本國へも、持ちて渡り來ませうといふ意◉いとかたきあきなひなり　甚むつかしき商法なりとの意◉もし天竺に、たまさかに、もて渡りなば　もしまれに天竺の方に持ちて渡りたる事あらばの意◉長者　富豪の家柄を云ふ◉使にそへて云云　手紙につけて遣はされたる房守に、金子を添へてなり。此の手紙の文面にて、王卿と共に、小野の房守も唐土に行きし事を讀者に知らせたる作者の用意、省筆のたくみなること心をつくべし。

【評解】　右大臣、阿倍の御主人と云う人は、金持で、その上一族の多い人で御ありなされた。

其の年筑前の國、博多の浦へ商業のために、唐土から渡ッた唐船の乘り込み商人に、王卿と云う唐人があッた。其の王卿の許へ手紙を書いて、

火鼠の皮ごろもと云う物を、買うておこせよ

と云うて、御奉公申す人の中で、心の實直な人を撰ッて、其の中で、小野の房守と云う人に手紙を添へて王卿が許へ遣す。

房守は右大臣の手紙を持ち筑前の國へ行ッて、彼の博多の浦に居る王卿に、皮ごろもの價の金子をわたす。

王卿、此の手紙を開いて見て、返事を書く。其の文面に、

火鼠の皮ごろもは、私が住む唐土の國に無い物でござる。かねて火鼠の皮ごろもと申す事は、世間の風評には聞いて居ますれど、まだ見ました事の無い物でござる。さりながら、もしも此の世界にある物ならば、此の日本國へ、持ち渡ッて來ませう。これは實にきついありにくい商いでござる。去かしながら、もしも唐土から天竺に、稀に、持ち渡ッた事があッたならば、もしや長者の許を、訪い尋ねたなら持ッて居るかも知れぬ。長者の許を聞き合せても、いよいよ無い物ならば、御使に添へて、皮衣の代金は、御返し申しませう

と云うた。

彼のもろこし船きけり。小野のふさもりまうで來て、まうのぼるといふことを聞きて、あゆみとうする馬をもちて、はしらせむかへさせたまふ。ときに馬に乘りて、つくしより、たゞ七日にのぼりまうで來たり。文を見る

にいはく、『火鼠の皮ごろも、からうじて、人を出だしてもとめてたてまつる。今の世にも、むかしの世にも、此の皮は、たはやすくなきものなりけり。むかしかしこき天竺のひじり、此の國にもてわたりて侍りける、西の山寺にありと聞きおよびて、おほやけにまうして、からうじて、買ひとりてたてまつる。『あたひの金、すくなし』と、こくし、つかひにまうし』かば、わうけいが、物くはへてかひたり。今こがね五十兩たまはるべし。船のかへらんにつけて、たびおくれ。もしこがねたまはぬものならば、かはごろもの質(シチ)かへしたべ』といへることを見て、『何おぼす。今こがねすこしのことにこそあなれ。かならず、おくるべきものにこそあなれ。うれしくして、おこせたるかな』とて、もろこしのかたにむかひて、ふしをがみたまふ。

【釋義】まうで來て　唐土より、我が國に詣で來たるなり◎まうのぼる　博多(ハカタ)より、京へ詣上(マウノボ)るなり◎あゆみとうする馬　歩疾(アユミトク)する馬にて、早く走る馬を云ふ◎ときに馬に乘りて　とき馬に乘りてとありしを、寫し誤りたるにやと云へる說よろしかるべし。とき馬は。足(アシ)疾(ト)き馬にて、即ち駿馬なり◎つくしより云々　筑前の國、博多より、平安城へ詣上(マヰノボ)れるなり。此の道程、およそ百五六十里餘もあるべし◎たはやすくなきものなりけり　容易に無き物でござるわいの意◎かしこき　もと恐るべき意なれど、こゝは、貴の字の義なり◎ひじり　總べて、智識のすぐれたる人を云ふ詞。こゝは、高僧などの意なり◎此の國にもてわたり侍りける　天竺より、唐土へ持ち渡りてありましたる、皮ごろもがの意◎西の山寺　王卿が宅より、西の方にあたる山寺の義◎おほやけにまうして云々　貴重の品もの故、私にいひ入れては、到底賣るまじければ、官に申し立て、官の權威をかりて、强て買ひ取りたりと、ことごとしく云へるなり◎からうじて　辛くしてにて、俗に、やッとなど云ふに當る○こくし、つかひにまうしゝかば　皮ごろもを買ひ取る事を、山寺にかけ合へる國司が、云々と王卿よりの使者に申しければの意。王卿は官に願ひ出でたれば、山寺への直(ネ)のかけあひは、國司よりしたるなり◎わうけいが、物くはへて　王卿が金を附け加へてなり◎船のかへらんにつ

けて、たびおくれ　彼の唐船の歸る時に、其れにことづけて、我が一時取り換へたる不足の金子を、送り届け給へとなり◉質　かたりの物にて、俗に、代物など云ふに同じ◉何おぼす　何と思はれてぞなり。五十兩たまはらずは、皮ごろもを返し給へとあるによりて、何と思ひて其の樣な事を云はるゝぞ。僞の金子なれば、勿論おくるべきものなりとの意なり。

【評解】そこで、房守は王卿と一所に唐土へ渡ッた。

右大臣は房守の歸りを一日千秋の思いをして、待ち兼ねて居らるゝうち、彼の唐船が博多に來た。

其の船に乘ッて小野の房守が歸ッて來て、京へ上ると云うことを聞いて、片時も早く逢うて樣子を知りたいと足の速い馬をもッて走らせて迎へさせられた。

房守はすぐさま其のむかへの駿馬に乘ッて筑紫からたッた七日間に京へ歸り上ッて來た。

さて右大臣は、房守の持ッて來た王卿が手紙を見るにその文面に云う

御約束の火鼠の皮ごろもを人を出してさがさせましてやッと買い出してあげまする。

かねて世に希なる物と云う事は聞き及ンでは居ましだが、今實地に當ッて見れば、今の世にも、昔の世にも、此の火鼠の皮は、容易に無い物でござるわい。

33732

然るにむかし尊い天竺の高僧が、此の唐土へ持ッて渡ッて來ましたのが、私の宅から西の山寺に有ると聞き及びまして、こりや妙ぢやと思うて、すぐさま買い出さうとしましたが、何分世にまれな寶物の事もゑ、しよせんあいたいづくでは賣るまいと考へましたから、官へ御願い申して官の威勢を以ッてやッと買い取ッてあげまする。

さて代價の儀は兼て御預り申した金を用立てましたが、

これでは、代金が少ない

と國司が私の使者に申したによッて、とりあへず王卿が所持の金子をたして買いました。

どうか今金子五十兩いたゞきたい。

金子は此の船の歸るにことつけて送り下され。

もし其の金子を下さらぬに於ては、さし出しました皮衣を其の代りに御返し下され

と云うてある事を見て

右大臣は

たて替へ金五十兩を送らずは、皮ごろもを返せとな、何と思うて其の樣な事を云はるゝぞ。

金子はもう僅なことぢや。

そうやかましく云はずとも、こりやきッと送るべき筈のものぢや。
それはとにかく、まァ嬉しう皮ごろもを送ッてくれたなァ
ぢきに姫にあはるゝも、全くそなたの御かげぢや
と云うて、唐土の方へ向ッて、あたまを下げてをがまれた。

此のかはごろも入れたる箱を見れば、くさぐさのうるはしき瑠璃をいろへてつくれり。皮ごろもを見れば、こんじやうの色なり。毛の末には、こがねのひかりかゞやきたり。げに、たからと見え、うるはしき事ならぶべきものなし。火にやけぬことよりも、けうらなる事ならびなし。『うべ、かぐや姫のこのもしがり給ふにこそありけれ』とのたまひて『あなかしこ』とて、箱に入れたまひて、物のえだにつけて、御身のけさう、いといたくして、やがてとまりなんものぞとおぼして、歌よみくはへて、持ちていましたり。

其のうたは、

かぎりなき　おもひに焼けぬ　かはごろも
たもとかわきて　今日こそはみめ

といへり。

【釋義】くさぐさのうるはしき瑠璃　種々の色に光る美麗なる瑠璃なり。瑠璃は、すべて玉の類をいふ◎いろへて　色介合の義。彩色する事をいふ◎こんじやう　金青なり。青の濃き色をいふ◎うべ　まことに、また、道理での意◎このもしがり　好み欲がりの意◎あなかしこ　あなは、あゝと同じく、歎息の詞。かしこは、可畏などの義にて、物を貴重する意なり。されば、あなかしては、俗に、あゝもッたいないなど云ふに同じ◎物のえだにつけて　物とは、木、また、作り花をいふ。此のことは、上に云へり◎けさう　假粧とも、化粧とも書く。容貌をつくりかざるを云ふ◎いといたくして　極めて甚しく化粧をしての意なり◎やがてとまりなんものぞ　やがては、そのまゝなど云ふ意にて、今俗に、程なく、そのうちになど云ふ意に用うるとは異なり。此の皮ごろもさへ持ッて行かば、そのまゝ直に姫の聟と

なりて、姫の家に宿るべきものぞとなり◉歌よみくはへて　歌を詠みて、皮衣に添へてなり◉かぎりなきおもひ　限りもなく深く姫を思ふことを云ふ。さて、おもひのひに、火をいひかけて、不燒とはつゞけたるなり◉たもとかわきて云々　姫を慕ひてなき濡らしたる我が袂もかわきて、今日こそは、赫映姫を見めとの意なり。

【評解】さて皮ごろもを入れてある箱を見れば、いろいろのきれいな瑠璃で彩色してこしらへてある。

皮衣を出して見れば、金青の色である。

其の毛の末には、黄金の光が輝いてゐる。

いかにも、貴重な寶と見えて、美麗な事は外にくらべるやうな物も無い。

まづ眼目の火に燒けぬと云ふ事よりも、美麗な事がならびも無い。是れを見て

なるほど、赫映姫のはしがりなさるゝはずでッあるわい

と仰せられて、

あゝもッたいない

と云うて、箱の中へ御入れなされて、さて其を物の枝につけて、其より御身の假粧をきつうひどうせられて、此の皮ごろもさへ持ッて行けば、そのまゝ姫のもとに宿り込む筈ぢやとおぼしめして、さてまた歌を詠みて皮ごろもに添へて持ッて御いでなされた。

其の歌は

今まで姫の爲に限りも無い思ひに胸を焦したが、やうやく約束の火に燒けぬ皮ごろもを得たれば、其の嬉しさに、今まで涙に濡れ居たる袂もかわいて、今日と云ふ今日は戀しい姫を見やう。さてさて嬉しいことぢや。

と云うてあッた。

家の門にもていたりて立てり。竹取出で來てとり入れて、かぐや姫に見す。かぐや姫、かの皮ごろもを見ていはく『うるはしき皮なゝめり。わきてまことの皮ならんとも知らず』竹とり答へていはく『とまれかくまれ、まづしやうじ入れ奉らん。世の中に見えぬかはごろものさまなれば、これをまことゝおもひ給ひね。人ないたくわびさせ奉らせたまひそ』といひて、喚

びすゑたてまつれり。かくよびすゑて、このたびはかならずあはんと、おうなの心にもおもひ居り。此の翁は、かぐや姫のやもめなるを歎かしければ、よき人にあはせんとおもひはかれども、せちにいなといふ事なれば、えしひぬはことわりなり。

【釋義】家の門にもていたりて　右大臣、竹取が家の門前に、皮ごろもを持ちて至りてなり◎とり入れて　皮ごろもの箱を受け取り入れてなり◎うるはしき皮なゝめり　美麗なる皮のやうに見ゆるとの意なり◎わきてまことの皮ならんとも知らず　わきては、とりわけての意。麗はしき皮とは見ゆれど、取り分けて慥に是れが眞の皮なりとは知らずとなり◎とまれかくまれ　皮の眞僞は何れにもせよの意◎しやうじ入れ　家の内に請待し入れなり◎これをまことゝおもひ給ひね　これを眞實の皮ごろもと疑ひなく思ひ給へよの意◎人ないたくわびさせ奉らせたまひそ　人を甚しく難儀させ申さるゝこと勿れの意◎喚びすゑたてまつれり　翁は門に待ち居たる右大臣を、屋の内へ喚び入れ奉れりの意◎おうなの心にも　翁は云ふに及ばず、嫗の心にもなり。嫗は竹取が妻のことなり◎やもめ　寡の字を書きて、夫なき

女を云ふ◎歎かしければ　歎かはしく思ひければの意なり◎せちにいなといふ　いちづにいやと云ふとの意◎えしひぬはことわりなり　得強ひぬは道理なりにて、無理に勧むることのできぬは道理なりとの意なり。

【譯解】さて、右大臣は、竹取の家の門に皮ごろもを持ッて行ッて案内を頼み立ッて居た。まもなく、竹取の翁が出て來て逐一右大臣の口上をうけたまはり、皮ごろもの箱を、奥に取り入れて、かぐや姫に見せる。

赫映姫、彼の皮ごろもを見て云ふやう

こりや、まことにきれいな皮ごろものやうに見えます。

しかし、取りわけて是れが寶の皮であらうかどうであらうか知られませぬ。

と云へば

竹取の翁答へて云ふ

まァ皮ごろもの眞僞の事は、どうあれからあれ、まづさし當り右大臣殿を、座敷に請じ入れ申さう。

世間には見えぬ皮衣のやうすぢやによッて、まづまァ是れを眞實の物とお思いなされ。

そなたは、また、いつものやうに、とやかく云ッて　人をひどく難儀がらせ申さるゝなと云うて、門に待ち居たまう右大臣を、座敷におとほし申した。

かやうに座敷におとほし申して、今度はきッと姫も右大臣に逢うであらうと、竹取の翁は勿論、妻の嫗の心の中にも思うて居る。

もとより、此の竹取の翁は、かぐや姫の年ごろにもなるに夫の無いのを常に歎かはしう思うて居れば、どうかしてよい人に配遇せうと思ひ、色々と心に工夫するけれど、なにぶん、姫がいちづにいやと云う事であるから、それを無理にえう勧めぬのはもッともだわい。

かぐや姫、翁にいはく『この皮ごろもは、火に焼かんに、焼けずばこそ、まことならんとおもひて、人のいふことにも負けめ。世になきものなれば、それをまことゝうたがひなくおもはん』とのたまへ。猶、これを焼きて見ん』といふ。翁『それさもいはれたり』といひて、大臣に『かくなん申す』といふ。おとゞ、こたへていはく『この皮は、もろこしにもなかりけるを、からうじてもとめたづね得たるなり。何のうたがひかあらん』『さは申すとも、はや焼きて見たまへ』といへば、火の中にうちくべて焼かせたまふに、めらめらと焼けぬ。『さればこそ、ことものゝ皮なりけれ』といふ。れとゞ、これを見たまひて、御顔は草の葉の色して居たまへり。かぐや姫は、あなうれしとよろこびて居たり。彼のよみたまひける歌のかへし、箱に入れてかへす。

なごりなく　もゆと知りせば　かはごろも
おもひのほかに　おきて見ましを

とぞありける。さればかへりいましにけり。世の人々、『安倍のおとゞは、火鼠の皮ごろもを持ていまして、かぐや姫に住み給ふとな。こゝにやいます』など問ふ。ある人のいはく『かはごろもは、火にくべて焼きたりしか

は、めらめらと燒けにしかば、かぐや姫、遇ひたまはず』といひければ、これを聞きてぞ、とげなきものをば、あへなしとはいひける。

【釋義】人のいふことにもまけめ　右大臣の宣ふことを聞きて、其の心に從はんとの意なり◎それをまことゝうたがひなくおもはん　火に燒けぬを以て、眞實の皮ごろもなりと疑ふことなく思ひ定めんの意◎猶、これを燒きて見ん　翁は是れを眞實のものと云へど、矢張燒きて試みんとの意◎それさもいはれたり　其れは尤もにも云はれたりにて、姫の云ふ事道理なりとの意◎かくなん申す　かやうに申すとなり◎もとめたづね　同じ意の詞を重ねて、意をつよめたるなり◎何のうたがひかあらん　何の疑ひが有らんにて、此の皮ごろもの眞實なること疑ひなしの意◎さは申すとも　翁の詞なり。さやうに申すともにて、疑ひもなく眞實なりとは申せどもの意◎燒かせたまふ　やかせは、介燒にて、大臣、人にいひつけて、燒かしめ給ふなり◎めらめら　紙、また、皮など、薄き物の燒くるさまを云ふ◎さればこそ、こともの丶皮なりけれ　翁の詞。案の如く外の獸の皮なりけりとなり◎草の葉の色　青ざめたる顔色を云ふ◎なごりなく　跡かたもなくすッかりといふ意◎もゆと知りせば　燃ゆる物と、かねて知りたらばの意◎おもひのほかに　おきて見ましを　思ひのひに、火をいひかけたり。されば此の句は、表裏二樣の意を含めり。表の方は、火の外に置きて見ましをにて、即ち、火の中に入れずに外に置きて見やうものをの意。裏の方は、思ひの外に置きて、即ち、心配もせず、度外に置くべかりしものをの意。猶、一首の意は、譯解の所に云ふべし◎さればかへりいましにけり　かゝる次第なれば、大臣はせんかたなく家に歸り給ひけりの意◎かぐや姫に住み給ふとな　かぐや姫と夫婦になりて、姫の家に住み給ふとなの意なり。給ふとなのなは、ものを強く抑へて云ふ辭にて、俗に、住み給ふとさなど云ふさに當る辭なり◎こゝにやいます　竹取の家に、大臣が御座るかと、世人の或る一人が問ふよしなり◎ある人のいはく　上の問ひに答へて、又一人の曰くなり◎とげなき　利氣なきにて、利き心のなき者を云ふ。さて、とげのけは、皮ごろもの毛をとりなしたるなるべし◎あへなし　無敢にて、張合の拔けたるを云ふ。御主人の大臣は、皮衣を得て、かならず、赫映姫に配遇せんと思ひつめしに、豈はからんや、其のたのみきりたる皮ごろもは、贋物にて、わざわざ唐土までも使者を遣し、數百金を費して購ひもとめたる甲斐もなく、今までの苦心は、水の泡と消え失せしかば、張合拔けて、ぼんやりとせられたり。しかして、此の大臣は安倍氏なれば、あへなし

と言ひかけ、また、世間の風評に、安倍の大臣は、火鼠の皮衣を得て、赫映姫の聟となりて、竹取の家に住み給ふと聞きて、或る人が實事にやと問ひたるに、また或る人の答へに、否、折角持參せられたる皮衣は贋物にて、火にくべたれば、ぺら〳〵と焼け失せたるによりて、聟となりて竹取の家にはおはしまさずと云ふに、安倍無しといふことをもかけあはせたり。かく一辭を以て、あへなし(張合抜けて)と、あへなし(安倍なし)とをかけ合せ、此の大臣の失敗より此の詞の始りし如く云ひなしたる筆つき最も妙なり。

【譯解】赫映姫が翁に申すやう。

此の火鼠の皮ごろもは、火で焼いてみまして、もしいよいよ焼けませんでありましたらァ其の時こそ、眞實の物であらうと思うて、その人の云ふ事にも從(シタガ)いませう。

どうせ火鼠の皮ごろもは、世の中に無い物でありますれば、眞僞のほどはわかりにくうありますが、たゞ其の焼けぬのが眞のものぢやと疑い無う思いませうと申し上げて下さりませ。

あなたも、これを眞の物と思はるゝ樣子でありますが、やッぱり、これを焼いてためして見ませう

と云ふ。

翁

そりや尤もな云いやうぢや

と云うて、大臣に

かやうにァ姫が申します

と云う。

大臣は之れを聞いて答へていはるゝには

此の火鼠の皮は、もとは、唐土にも無かッたのを、やッと求めて尋ね得たのぢや。何の疑(ウタガ)いがあらうぞ

と云へは

翁

さう申さるゝけれど、念の爲め早く焼いてごらうじませ

と云へば

大臣はすぐさま火の中へ打ちくべて御焼かせなさるに、何の事もなくぺらぺらと焼けてしまッ

た。

翁 これぢやで、ほんものか偽せ物かと念を押して申したが、そりやこそ、外の獣の皮であッたわい

と云う。

大臣は、此のありさまを御覧なされて、御顔の色はまるで草の葉のやうなまッさをな色をして御いでなされた。

赫映姫は、うッてかはッてあゝ嬉しいことよ、右大臣にそはないですむわいと喜んて居る。

さて、姫は彼の限りなきと、先刻、大臣がおよみなされた歌の返しを箱に入れて大臣のもとへ返す

此の皮ごろもが、かやうに殘りなく燃える偽せ物と最初から存じましたなら、火の外に置いて、燒かずに見せうものを、また、心にも懸けず、餘計な心配もせなんだに、さてさて殘念な事をしましたわい

とサ書いてあッた。

かやうな次第であれば、右大臣もせん方なく、すごすご御歸りなされたわい。さて、此の事について

世の中の人々は、色々な評判をしたか、或る一人か

安倍の大臣は、火鼠の皮ごろもを持ッておいでなされて、かぐや姫の聟におなりなされたとサ。

ほんとに、もう此處の竹取の家に御いでなさるか

などゝ問う。

これを聞いて、或る人の答へて云うには

いやサ其の火に燒けぬと云うた、火鼠の皮ごろもは、火にくべて燒いて見たれば、ざうさなくぺらぺらと燒けてしまッたによッて、かぐや姫は、右大臣に御逢いなされぬ

と云ふたによッて

之れを聞いてサ世間でさとい了簡の無い氣の拔けた者をば

あへなし（張合なしと云ふ語なるが、こゝは安倍無しにて、阿倍の右大臣の竹取の家に居らぬと云ふ意をかねたり）

とは云うたである。

龍の首のたま　これより、龍の首の珠のことをしるす

大伴のみゆきの大納言は、我が家にありとある人をめしあつめてのたまはく、『龍の首に、五色の光ある玉あっなり。それを取りて奉りたらん人には、ねがはんことをかなへん』とのたまふ。をのこども、おほせのことをうけたまはりて申さく、『おほせの事は、いともたふとし。たゞし、此の玉たはやすく得取らじを、いはんや、龍の首のたまは、いかゞ取らん』とまうしあへり。大納言のたまふ。『君のつかひといはんものは、いのちを捨てゝも、おのが君の仰事をば、かなへんとこそ思ふべけれ。此の國になき、天竺もろこしの物にもあらず。このくにの海山より、たつはおりのぼるものなり。いかに思ひてか、なんぢら、かたき物とまうすべき。』をのこども申すやう、『さらば、いかゞはせん。かたき物なりとも、おほせ事にしたがひて、求めにまからん』とまうす。大納言、見わらひて、『なんぢら、君のつかひと、名をながしつ。きみのおほせごとをば、いかゞはそむくべき』と宣たまひて、龍の首のたま取りにとて、出だしたてたまふ。此の人々の、道のかて、食物に、殿のうちの絹、わた、錢など、あるかぎり取りいでゝ、そへてつかはす。『此の人々ども歸るまで、いもゐをして、我は居らん。此の玉取り得では、家にかへり來な』とのたまはせけり。おのおの、仰うけたまはりてまかりいでぬ。『龍のくびのたま取り得ずは、かへり來な』とのたまへば、いづちもいづちも、あしの向きたらんかたへいなんとす。『かかるすきごとをしたまふこと』とそしりあへり。たまはせたるものは、お

のおの、分けつゝ取り、或はおのがいへにこもりゐ、あるひはおのがゆかまほしき所へいぬ。『おや、きみとまうすとも、かくつきなき事をおほせ給ふこと』と、ことゆかぬものゆゑ、大納言をそしりあひけり。『かぐや姫すゑんには、例のやうには見にくし』とのたまひて、うるはしき屋をつくりたまひて、漆をぬり、蒔繪をし、いろへし給ひて、屋の上には、いとを染めて、色々にふかせて、うちうちのしつらひには、いふべくもあらぬ綾おりものに繪をかきて、間毎にはりたり。もとのめどもは、みなおひはらひて、かぐや姫を、かならずあはんまうけして、獨あかしくらし給ふ。

【釋義】ありとある人　有る限りの人々の意◎あゝなり　あるなりの訛◎ねがはんことをかなへん　願ひ事を成就させてやらんとなり◎得取らじを　取ること得難きをの意◎いはんや　五色に光る玉にても、取る事難きを、まして其の五色の玉が、龍の首にあればいよいよ以てと云ふ意なり◎いかゞ取らん　如何にして取るべき、到底取ること能はずと云ふ意◎まうしあへり　申し合へりにて、皆々申すよしなり◎君のつかひといはんものは　君に仕ふる家來と云ふべき者はの意◎たつはおりのぼるものなり　龍は山よりおり、海より登るものなりの意に心得べし◎いかに思ひてか　こは下の難き物と申すべきと云ふ語につゞく文脈にて、如何に思ひて、難き物と申すぞ。決して難きものと申すべきものにあらずとの意◎さらば、いかゞはせん　左様仰せらるれば、如何にせん。それならば、致し方なしの意◎大納言、見わらいて　人々の臆病なる体を見て、笑ひ給ひてなり◎君のつかひと、名をながしつ　君のめしつかひ者といふ名を、世間にいひふらしたりの意◎いかゞはそむくべき　如何にして背く事を得べきにて、俗に、どうして、そむかれやうの義◎出だしたてたまふ　出立させ給ふなり◎かて　糧にて、食料なり◎殿のうちの絹、わた、錢など云々　御殿の内に貯へ置かれたる、絹、綿、錢など、有りたけ取り出だして、龍の珠取りにと出で立つ人々の道中の費用にあてられしなり。

さて、上古は通貨と云ふもの乏しかりしかば、絹、布、或は米などを以て、種々の物と交換したりしなり。此の物語つくられたる比も、錢はあれど、猶一般の人民は、錢を以て物を賣買する事を好まず、多くは、絹、布などを以て、要用の物と交換したりしなり。

◎そへてつかはす　絹、綿、錢などを使の人々に添へてやるとなり◎此の人々ども、歸るまで云々　大納言の詞◎いもゐ　齋居の義にて、家に忌み籠り精進潔齋して居るを云ふ◎龍のくびのたま取り得ずば云々　大納言の詞なり◎家にかへり來な　家にかへることなかれの義なり◎いづちもいづちも　何地へなりともの意◎いなんとす　去なんとすにて、往かんとすとの意◎かゝるすきごとをしたまふ云々　家來の人々の詞。すきごとは、數奇事の義。こゝは、物ずきなる事と云ふほどの意なり◎たまはせたるもの　下されたる物と云ふ意◎おのおの分けつゝ取り　各、配分して、わが物と取るなり◎ゆかまはしき所　行かんと欲する所なり◎おや、きみとまうすとも云々　家來の人々の詞◎つきなき　似合しからぬ、又、不都合などの意◎ことゆかぬものゆゑ　事柄の行き通らぬ故になり。俗に、理屈のわからぬもの故など云ふが如し◎かぐや姫すゑんには云々　大納言の詞。すゑんには、据ゑんにはの意なり◎例のやうには見にくし　尋常の殿の樣にては見ぐるしとの意なり◎いろへし　色取りしの義◎いとを染めて、色々にふかせ　屋の上の飾りなり。美を極めたるさまをいへるなり◎うちうちのしつらひ　家の内の構へなり◎いふべくもあらぬ　いふにもいはれぬ麗しき意なり◎もとのめども　元の妻どもにて、是れまでの北の方、また、妾などをもて

めて云へり◎まうけ　用意、また、支度(シタク)などいふに當る。

【評解】　大伴の御行の大納言は、我が家に勤める家來の、ありたけそッくりを、御前ちかくよび集めておッしやるには

龍の首には、五色の光りのある珠があるぢや。
其の珠を、今度得たいと思うが、もし、それを取ッてくれる人には、其の褒美として、何事でもねがふ事を聞きとゞけてつかはさう

とおッしやッた。
御家來の人たちは、此の御申しつけをうけたまはッて、口を揃へて申すには

仰せの趣は、甚恐れ多い事でござる。
しかし、今、仰せの此の珠は、容易には取れませぬ物でござるに、まして、おそろしい、龍の首の珠は、どうして取られませうぞ。
こりや、困りきッた仰せでござる

と口々に申し合ッた。
そこで、大納言のおッしやるには

そりや、何と云うぞ。
およそ主のめしつかいと云うものは、たとへ命を捨てゝも、自分の奉公するしゆうのまうしつけをば、きッと叶へやうとサ思う筈のものぢや。それに辭退するとは何事ぢや。
まして、いま、言いつけた品物は、此の國中に無い、天竺や唐土の物でも無い。
現に此の日本國の海や山から、龍は下りたり、上ッたりするものぢや。
それをなんと思うてか、そちたちは、得にくい物と申すぞ
とおッしやッた。
御家來の人々の申すには
さやうなら、なんと致しませうぞ。御辭退の致し方もござらぬ。
たとへ得にくい物でも、御申しつけにしたがうて、尋ねにまゐりませう
と申す。
大納言は、御家來の人々の臆病な様子を見て、あざ笑ッて
そちたちは、主の召遣いと云う名を世間に流した。金箔つきの召遣いぢや。
そうすりや、主の申しつけをば、どうして背むかれう。背むかるゝものでは無いぞ

と仰せられて、龍の首の珠を取りにと、家來たちを御出しなされた。
さて、此の人々の、道中の糧(カテ)や、食い物にとて、御殿の内に貯へられた、絹や綿や錢など、ありたけ取り出たして、此の人々につけてやられた。
大納言は、また、此の御家來の人々に言はるゝは、
そちたちが、無事に龍の首の珠を取ッて、京に歸るまでは、物忌(モノイミ)をしておれは待ッて居るぞ。
そちたちは、此の龍の首の珠をえう取らずには、ふたゝび家に歸ッて來るな
と仰せられた。
いづれも此の仰せをうけたまはッて御前を退出した。
さて、家來どもは、如何に主の仰ぢやとて、此の珠は、到底取られぬ物と知ッて居れば、さがしに行くもむだなりとは思うけれど、さりとて
龍の首の珠を取る事が出來ずは、歸ッて來るな
とおッしやれば、せうこと無しに、そこと定めた方角もなくどちらへでも、足の向いた方へ行かうとした。
しかし、むやみに行ッたところが、しやうも無し、それぢやと云うて、歸るわけにもゆかず。

主人も主人だ、こンな、物ずきな事をなさるとは、まァつまらぬ人ぢやないか

といづれも誇り合ッた。

さて、彼の旅費にとてもらうた、澤山なものは、どうしたらよからうと相談をしたが、まゝよ、知れたらそれまでの事と、其の下された物は、てんでに配分して取ッて、或はそのまゝ自分の家に隠れて居たり、または自分が行きたいと思ふ所へ行ッた。

そうして、御家來どもは

なンぼ、親や、主人ぢやと云うても、こンな、らちもない事を言いつけらるゝとは、わからぬはなしぢや

と云うて、何分言いつけが、馬鹿げてわけのわからぬ故、たゞ、おほらしい言いつけぢやと、皆、くちぐちに大納言を誹り合ッた。

それとは知らず、大納言は

かぐや姫を住はすには、尋常の御殿では見ぐるしい

とおッしやッて、立派な御殿を御たてなされて、漆(ウルシ)を塗ッたり、蒔繪(マキヱ)をしたり、其の外種々のうつくしい色どりをなされて、屋根の上には、糸を染めて、色々にきれいに葺かせて、御殿の

内のこしらへには、言(イ)うに言はれぬ結搆な綾や錦の織物に、さまざまの繪を書いて、座敷の間ごとに張りつけた。

それのみならず、もとの北の方や、おてかけなどは、みンな、追い出して、かぐや姫を、きッと、むかへるやうの支度をして、たッた獨で夜をあかし、日を暮らされた。

つかはしゝ人は、よるひる待ち給ふに、年越ゆるまで、おともせず。心もとながりて、いとしのびて、たゞ舍人ふたりめしつぎとして、やつれ給ひて、難波におはしまして、問ひたまふことは、『大伴大納言の人や、船に乘りて、たつころして、そがくびのたま取れるとやきく』と問はするに、船人こたへていはく、『あやしき事かな』とわらひて、『さるわざするふねもなし』とこたふるに、をぢなきことする船人にもあるかな。え知らでかくいふとおぼして、『我が弓のちからは、龍あらば、ふと射ころして、首のたまは取りて

ん。れそく來るやつばらを待たじ』とのたまひて、船に乘りて、海ごとにありきたまふに、いと遠くて、筑紫のかたの海に漕ぎいでたまひぬ。

【釋義】つかはしゝ人　龍の珠とりにやり給ひし人を云ふ◎年越るまで　翌年になるまでもの意◎おともせず　何とも音信もせずなり◎心もとながりて　待ちどほに思ひてなり◎舍人　天皇および親王諸王たちの使ひ給ふ者にて、左右近く親しく仕へ奉る人々を云ふ。又朝廷より攝政關白に賜ふこともあり。後には、たゞ近習のものを舍人と云へり◎めしつぎ　召使なり◎やつれ給ひて　御供人を省き給ふよしなり◎問ひたまふことは　御尋ねなさるゝ事はの意◎そがくびのたま　其れが首の珠にて、即ち、龍の首の珠なり◎問はするに　問はしむるになり。彼の舍人をして、船人に問はせたるなり◎あやしき事かな　怪しく、あるまじき事かなの意。船人は、大納言等の云ふことを、本性の人の云ふことならじと、あざ笑ひて云ふなり◎さるわざするふねもなし　さやうの業をする船も無しとなり◎をぢなきことをする　かよわき事を云ふの意◎え知らでかくいふとおぼして　まことに龍を射殺して、珠を取る事を、船人は知らずに、かゝることを云ふと思はれてなり◎ふと　俗に、ふイとなど云ふが如し。忽ちに射殺さんとなり◎おそく來る　遲く歸る意◎やつばら　奴輩(ヤツバラ)の義にて、罵りて云ふ言なり◎海ごとにありきたまふ　海と云ふ海は、みな廻りて求めあるき給ふ意◎いと遠くて　難波を甚遠く離れてなり◎筑紫のかたの海　紀伊の海、土佐の海などめぐりめぐりて、遠く九州の方へ漕ぎ到り給へるなり。

【評解】然るに、さきに珠を取りにやられた、家來の人々は、もう歸るか、もう歸ろかと、よるひる御待ちなさるゝに、年を越すまで、一向におとさたも無い。あまりのことに、大納言は待ち兼ねられて、えうおちついても居られず、きつう恐ンて、たッた、舍人二人を召使(メシツカヒ)につれて、其の他の御供は皆省いて、そッと難波へおいでなされて、船人どもにお尋ねなさるゝ事には、

大伴の大納言の家來が、船に乘ッて、龍を殺して、其の龍の首の珠を取ッた事を聞いたかと舍人に御問はせなさるに、之を聞いて、癡な事を云う人ぢや。　こりや、本性の人ではあるまい、氣でも違ッて居るのであらうと思うて、船人の答へて云うには　こりや、まア不思議な事ぢやわい

と云いながら笑うて
こゝらには、そんな事をする船もない
と答うるに、大納言は、まァ弱いことを云う船人ぢやわい。
こりや、全くほんとうの事をえう知らずに、此のやうに云うのであらうと思はれて
そちたちは、何も知るまいが、此の方の弓勢の力は、龍が居るなら、たゞ一矢に、ふッと射殺して、何の苦もなく、その首の珠は取ッて見せう。
家來どもは、何として居るぞ。
今はもうこンなに遲く歸ッて來る奴輩を待つまい
とおッしやッて、御自身船に乘ッて、海と云う海をあるかれたが、いつの間にか、きつう遠く放れて、筑紫の方の海へ漕ぎ出でられた。

いかゞしけん。はやき風ふきて、世界くらがりて、船を吹きもてありく。いづれのかたとも知らず。ふねを海中にまかり入りぬべく吹きまはして、波は船に打ちかけつゝまきいれ、神はおちかゝるやうにひらめきかゝるに、

大納言はまどひて、『まだかゝるわびしきめはみず。いかならんとするぞ』とのたまふ。檝取こたへて申す。『こゝらふねに乘りてまかりありくに、まだかくわびしきめを見ず。御船うみの底に入らずば雷れちかゝりぬべし。もしざいはひに神のたすけあらば、南海に吹かれれはしぬべし。うたてあるぬしのみもとにつかへまつりて、すゞろなる死をすべかンめる』と檝とり泣く。大納言これをきゝてのたまはく、『船にのりては、檝取のまうすことをこそ、高き山ともたのめ。など、かくたのもしげなきことをまうすぞ』と青へどをつきてのたまふ。かぢとり答へてまうす。『神ならねば、何わざをかつかうまつらん。風吹き、浪はげしけれども、雷さへいたゞきに落ちかゝるやうなるは、龍をころさんと求めたまひさふらへば、かくあンなり。はやてもたつのふかするなり。はや神にいのり給へ』と

いへは、『よきことなり』とて、『かぢとりの御神きこしめせ。をぢなく、心をさなく、龍をころさんと思ひけり。今より後は、一毛の末一筋をだにうごかし奉らじ』と、よごとをはなちて、立居なくなくよばひ給ふこと、千度はかりまうし給ふけにやあらん。やうやうかみなりやみぬ。すこしあかりて、風はなほはやく吹く。楫取のいはく、『これは龍のしわざにこそありけれ。此の吹く風は、よきかたの風なり。あしきかたの風にはあらず。よきかたにおもむきて吹くなり』といへども、大納言は、これをきゝ入れたまはず。

【釋義】いかゞしけん　何故ならんの意なり。俗に、どうしたことかなど云ふに同じ◎はやき風　疾き風にて、所謂はやてなり◎くらがりて　暗くなりての意◎吹きもてありく　船を風があちこちと持ちてあるきまはるなり◎まかり入りぬべく　海底に沈み入りぬべくの意なり。

さて、まかりは、まゐると云ふ語に對して、元來は、貴所より賤所に行くをいふ語なるが、ところによりては、さほどの意味は無く、たゞ、添へて用ゐることあり。このまかりも、其の元來の意義に説かば、説かるべけれど、こゝは、猶、俗に、まかり出る、まかり歸るなど云ふ、まかりと同く、入ると云ふ語の力を添へんとて、いひ添へたる語と見るかた、おだやかなるべし。下のまかりありくとあるも、同じ意に見るべし。

◎まきいれ　船を沈むるやうに卷き入るゝを云ふ◎神　鳴る神にて、雷を云ふ◎ひらめきかゝる　いなびかりの光り渡るを云ふ◎まどひて　俗に、當惑してなど云ふに當る◎かゝるわびしきめはみず　かやうなるおそろしき目に逢ひし事なしの意◎いかならんとするぞ　如何になりゆく可き事ぞの意◎こゝら　あまたの意にて、こゝは、あまたの年月を云ふ◎御船海の底に入らずは、雷おちかゝりぬべし　御船もし幸に海底に沈み入る事はまぬがれたりとも、頭上より雷が落ちかゝるならんとなり◎南海に吹かれおはしぬべし　南海へ吹き流されて、からき目にあはるべしとなり◎うたてあるぬし　うたては、別様に奇怪よからぬ意。されば、奇怪よからぬことを爲給ふ主の意なり◎すゞろなる死　案外に、世のつねなら

ぬ死やうの意◎すべかゝめる　爲べくあるめるにて、俗に、しさうなやうすなど云ふが如し
◎高き山ともたのめ　高き山の如く、大丈夫に頼み居るの意。高き山は、動かぬ確なるもの
なればかく云へり◎など　何としての意◎かくたのもしげなきことかやうに頼みにならぬやうな、おぼつかなき言の意◎青へど　へどは、心地の悪く苦き時に吐き出だすもの、青は、強めて添へたる語なり○神ならねば、何わざをかつかうまつらん　我等とても神の身にてあらねば、如何なる事をして、御助け申す事を得べき、何とも致し方なしの意◎風吹きなみはげしけれども　此の句は、何わざをか仕へ奉らんの上に付けて見るべし◎求めたまひさふらへば　たまひもさふらへも、共に尊稱言なり◎かくあゝなり　如此有也の義。風浪はげしく、雷さへ落ちかゝらんとするを云ふ◎はやて　暴風なり。上に、はやき風とあるに同じ◎よきことなり　大納言の詞。尤なる事と思はれての意なり◎かぢとりの御神きこしめせ云々　大納言が祈り給ふ祝詞の語。かちとりの御神は、楫取等が信仰する神と云ふ事にて、今の世、船靈神とて、海上を守り給ふ神を云ふ。きこしめせは、聞き給への意なり◎をぢなく　拙く愚なる意◎心をさなく　愚なる、また、無分別なる意◎毛の末一筋をだに　龍を殺さんなどは、申すに及ばず、髮の毛一本の末をもの意◎よごと　吉詞にて、もと、神の御德をはめたゝへて申す祝詞を云ふ。こゝは、大納言が、雷鳴風波を止め給へと祈り給ふ祝詞を云へり◎はなちて　聲を張り上げてなり◎立居　立ちて祈り、坐りて祈る狀なり◎けにやあらん　故にやあらんの意◎やうやうかみなりやみぬ　漸々に雷は鳴り止みぬなり◎すこしあかりて　少し明かるくなりてなり◎よきかたの風　善き方の風にて、即ち、北方へ船をやるべき風を云ふ◎あしきかたの風　惡き方の風にて、即ち、南海の方へ吹く風を云ふ◎大納言はこれをきゝ入れたまはず　大納言は、ひたすらまどひ居れば、楫取の、善き風なりと云へど、其れを誠と聞き入れ給はぬ意なり。

【譯解】どうしたことか。急に暴風が吹いて來て、四方八面は、まッくらになッて、風は船をあちこちへ向ッてあるく。どんとどちらの方角ともわからない。船を海中へ沈める様に吹き廻はして、波は船へ打ちかけ打ちかけて、船を浪間にまき入れ、雷は今にも落ちかゝる様に稲光のひかりかゝるによッて、大納言は當惑して、「生れてからまだ此の樣な、おそろしい目には遭はぬ。こりや、まアなンと成り行かうとするのぢや

と仰せられた。

梶取答へて申すには

私どもあまたの年月、船に乗ッて漕ぎあるきますが、まだ一度もかやうに難儀な目は見ません。

此のあんばいでは、御船が海の底へ沈み入らなんだなら、其のかはり、あたまの上から雷が落ちかゝりませう。

どちらにしても、命はおぼつかない。

もし、仕合せに神様の御たすけがあるなら、おそろしい南海へ吹かれておいでなさるであらう。

まァ變なことをなさる主人の御許に御奉公申して、存じも寄らぬむごい死にやうをしさうな様子ぢや

と云うて、梶取は泣く。

大納言は、これを聞いておッしやるには。

まァそんな心細いことを云うてくれるな。

どんな人でも、船に乗ッては、何より梶取の云うことばをッ高い山と大丈夫に頼むのぢや。

なんで、かやうにたよりにならぬ様な事を云うぞ

と青反吐（アヲヘド）をついて、せつなさうにおッしやる。

梶取答へて申す

そうおッしやッても、私どもは神様でなければ、いくら風が吹き、波がはげしくッても、何と致すことができませうぞ。

此のやうに波風が烈しい上に、雷までが頭上（ヅジヤウ）へ落ちかゝる様子であるのは、こりや、まッたく、あなたが龍を殺さうと御尋ねなさるによッて、龍の腹立ちで、かやうにありますのぢや。

暴風（ハヤテ）も、龍が吹かせるのでござる。

こりや、神さまの御たすけを仰ぐよりしかたがござりますまい。

はやく、神さまに御祈りあそばせ

と云へば

大納言は

そりや、尤なることぢや

と云うに

楫取等の御祈り申す、船玉の御神よ、御聞きくだされ。

私どもは、まことにおろかにも無分別にも、龍を殺さうと思いましたわい。

今、此のひどい目に遭うて、さッぱり後悔しました。

これから後は、龍の毛末一筋にでも障り申すまい。

何とぞ、御惠を垂れて、早く、此の波風を御しづめ下され

と祈りの祝詞を、聲はりあげて、立ッたり居たり拜をしながら、泣く泣くよびたてられたことが、千遍ばかりもとなへられた。

其のしるしであるかしらん、だんだん雷も止ンだ。

そのうち、空も少しあかるくなッてきたが、風はやッぱり强く吹く。

楫取の申すには

こりや、案の如く龍のしわざであッたわい。

いま吹く風は、よい方の風でござる。

わるい方の風ではござらぬ。

こりや、よい方にむいて吹くのでござる

と申しても

大納言は夢中になッて、是れを御きゝ入れなさらぬ。

三四日ふきて、吹きかへしよせたり。濱を見れば、播磨のあかしのはまなりけり。大納言、南海のはまに、吹きよせられたるにやあらんとおもひて、いきづき臥し給へり。船にあるをのこども、國に告げたれば、國のつかさまうでとぶらふにも、えおきあがり給はで、船ぞこに臥したまへり。松ばらに御むしろ敷きて、おろしたてまつる。其の時にぞ、南海にあらざりけりと思ひて、からうじて起きあがりたまへるを見れば、風いとおもき人にて、腹いとふくれ、こなたかなたの目には、すもゝをふたつ附けたるやうなり。これを見たてまつりてぞ、國の司もほゝゑみたる。國に仰せた

まひて、たでしつくらせたまひて、によふによふになはれて、家に入りたまひぬるを、いかでか聞きけん。つかはしゝをのこども、まゐりて申すやう、『龍のくびの玉を、えとらざりしかばなん、殿へもえまゐらざりし。たまのとりがたかりしことを知りたまへればなん、かんだうあらじとて、まゐりつる』とまうす。大納言、おきいでゝのたまはく、『なんぢら、よくもてこずなりぬ。たつは鳴電のるゐにてこそありけれ。それが玉をとらんとて、そこらの人々のがいせられなんとしけり。まして龍をとらへたらましかば、又こともなく、我は害せられなまし。よくとらへずなりにけり。かぐやひめてふおほぬす人のやつが、人をころさんとするなりけり。家のあたりだに、今はとほらじ。をのこどもゝ、なありきそ』とて、家にすこし殘りたりけるものどもは、龍のたま取らぬものどもにたびつ。これを聞きて、はなれたまひしもとのうへは、はらをきりてわらひたまふ。糸をふかせて作りし屋は、とびからすの巣に、みな咋ひもていにけり。世界の人のいひけるは、『大伴の大納言は、龍の首の玉やとりておはしたる』。『いな、さもあらず。御まなこふたつに、すもゝのやうなるたまをぞ、添へていましたる』といひければ、『あな、たへがた』といひけるよりぞ、世にあはぬことをば、あなたへがたとはいひはじめける。

【釋義】吹きかへしよせたり　船を吹きもどして、濱邊にうち寄せたるなり◎濱を見れば云々　楫取が播磨の國の明石の濱なりと、たしかに見さだめたる趣なり◎いきづき　息衝の義にて、ため息をつきて、歎息するを云ふ◎船にあるをのこども　召使の舍人どもをいふ◎國に告げたれば　播磨の國司に告げ知らせたればなり◎國のつかさまうでとぶらふにも　播磨の國司參りて、御見舞申すにもなり。大納言は、貴き人なれば、國司も早速見舞に來れるなり◎えおきあがり給はで　起き上る事を得たまはずしてなり◎おろしゐてまつる　船よ

り陸に、下し奉るなり◎其の時にぞ　船より下りてあたりの景色を見て、北の時はじめてといふ程の意◎風いとおもき人にて　此の大納言は、風を重く引く人にての意◎こなたかなたの目　兩方の目をいふ◎すもゝをふたつ附けたるやうなり　李を二ッ附けたる如くに、腫れあがりたりとなり◎はゝゑみ　頬笑にて、俗に、にこにこしてなどいふが如し。こゝは、をかしきを隠して居るさまをいふ◎國に仰せたまひて　播磨の國司に命じ給ひてなり◎たごし　手輿の義。兩人前後に輿の轅を手に持ちてかき歩くより云ふ。また、腰のあたりに長柄を附けて歩くより腰輿と書く◎によふによふになはれて　によふは、うめく事にて、俗に、うなると云ふに同じ。になはれては、荷はれてなり◎いかでか聞きけん　大納言の家に歸られし事を、極めて内密にせられしを、如何にして聞きつけしならんとなり◎つかはしゝをのこども　前に珠を取りに遣はしゝ者どもをいふ◎たまのとりがたかりしことを知りたまへればなん　龍の玉の得がたき事を、大納言みづから御承知になりたればの意◎かんだうあらじとて　勘當あらじと思ひてなり。勘當とは、今の世に、御叱などいふに同じ◎なんぢら、よくもてこずなりぬ　汝等は珠を持て來ずて、まことによかりきとなり。大納言は、はじめ、如何にしても珠を取り來れと、きびしく仰せたまひしにひきかへて、今は珠を取りて來ざりしを

褒めたまふよしなり◎たつは鳴雷のるゐにてこそありけれ　龍は雷の一類にてありけりの意。大納言は、龍の恐るべく到底取ることの出來ぬ事をさとりたるよしなり◎そこらの人々　數多の人々なり◎がいせられなんとしけり　龍のために、害せられんとしたりとなり◎こともなく　俗に、何の事もなくといふに同じく、容易に、また、必、などいふ意なり◎我は害せられなまし　我れは害せらるゝならんの義。汝等、まして、龍を捉へしならんには、其れを命じたる、我は、かならず害せらるなるべしとなり◎よくとらへずなりにけり　龍を捉へざりしは、まことによかりきとなり◎かぐやひめてふ　てふは、といふの約言なり◎おほぬす人のやつが　大盗賊の奴の義にて、いたく惡みていふ詞なり◎人をころさんとするなりけり　赫映姫の、かゝる難題を申し出だすは、全く人を殺さんとするてだてにてありけりとなり◎家のあたりだに、今はとほらじ　かぐや姫の家の近邊にても、今よりは通るまじとなり◎なありきそ　歩くなの意◎家にすこし殘りたりけるものども　前に殿の内の絹、綿、錢、などあるかぎり取り出でゝつかはしたれば、後に殘り居る少しの物品なり◎龍のたま取らぬものどもにたびつ　龍の珠取らぬ者どもに褒美に賜ひつなり◎はなれたまひしもとのうへ　離縁せし、もとの北の方をいふ。前に、おひはらひてとある照應なり◎はらをきりてわらひ

たまふ　今、腹をかゝへて笑ふといふ意なり。可笑(ヲカシ)さに堪へずして、腹が裂け斷るゝやうに笑ふをいふ◎糸をふかせて作りし屋　糸にて葺かせて作りし家根なり。こゝは、前に、屋の上には、糸を染めて、色々に葺かせてとありし照應なり◎咋ひもていにけり　咋(クハ)へ持ちて、行きゝとなり◎世界の人のいひけるは　世間の人の評判せしにはの意なり◎玉やとりておはしたる　珠を取りて歸られしかなり。こは一人の問ひて云ふ語なり◎いな、さもあらず　いや、さやうにては無しなり。こは一人の答へて云ふ語なり◎あな、たへがた　あァ堪へ難しの意にて、あまりのをかしさに堪へ難しの意なり。さて此のたへ(堪)がたしといふに、たべ(食)がたしと云ふ意を含ませたり。そは大納言の目の上に添へて歸られたる李は、まことの李ならねば、たべ(食)がたしといふ意をもかねたるなり◎世にあはぬことをば、あなたへがたとはいひはじめける　世にあはぬは、世の中に合はぬにて、思ふことの叶はず、思ふまゝにならぬことを云ふ。思ふまゝにならぬ時は、いと堪へがたきものなれば、世の人は、あな、たへがたと云ふが、こは全く、大伴の大納言が、思ふこと心のまゝならずして、遂には世の人に、あな、たへがたと云ひて笑はれしより、いひ始めたる語なりと、例のおもしろく　をかしくかきなしたるなり。

〔評解〕　さて、此の風は、三四日吹きつゞけて、とある所へ船を吹き返し寄せた。どこへ着いたのかと、其の濱を見れば、たしかに播磨の國の明石の濱であッたわい。

されど、大納言は、おそろしい、南海の濱に吹き寄せられたのであらうと思うて、起きあがる勢いもなく、たゞ、ため息を衝いて、ねころンでおいでなさッだわい。

さて、船にある舍人等は、まづ、取りあへず、此の趣を、播磨の國司に知らせたれば、國司は、早速參ッて御見舞まうすにも、キッぱり、大納言は、えう起きあがりもなされず、たゞ、船底にねころンでおいでなされた。

其のうちに、人々は、松原におンむしろを敷いて、やうやく、大納言を御おろし申した。

其の時にサ大納言は、始めて、おそろしい、南海ではなかッたわいとおぼしめして、安心して、えいやッと起きあがりなさッたのを見れば、これは如何に、元來大納言は、ふだんから、風をきつう御ひきなさる生分の人で、こんどもひどうわづらはれて、腹がひどくふくれ、腫れあがッた兩方の目には、まるで、李を二ッ附けたやうであッた。

是のをかしい風儀を見まゐらせてサ今まで心配して居ッた國司も、をかしさにこたへられず、にこにこと笑うて居る。

さて、此の樣子では、御歩行などはしよせんむづかしい故、早速國に仰せつけられて、腰輿(タゴシ)をおつくらせなさッて、それに乘ッて、うなりうなり擔(ニナ)はれて、人目を忍ンで、そッと、京都の御殿へ御歸りなさッた。

然るに、どうして、此の事を聞きつけたか。以前珠を取りにやッた御家來どもが、何くわぬ顔で參ッて申すには

仰せつけられた、龍の首の珠を、色々と骨折ッて尋ねましたが、とうとう、えう取りませなンだによッて、御叱りもあらうかと、今日まで御殿へも、えう參らずにをりました。然るに、今度御自身に珠の取りにくかッた事を、御承知なさッたによッてそれでは、萬々御叱りもあるまいと存じて參りました

と云う。

大納言は、ねどこから、やッと起き出でゝおッしやるには

そちたちは、よくまア龍の首の珠を持ッて來なかッた。龍と云うものは、おそろしいかみなりの同類でゞあッたわい。それとも知らず、其れが首の珠を取らうとして、すンでのことで、あまたの人々が殺されやうとしたわい。捕へやうとしたばかりでも、此の通りぢや。まして、其の龍を捕へたことならば、何の事なく、てッきり我れは殺されるであらう。ほんに、まアそちたちは、えう捕へずにしまッたわい。龍の首の珠を取れなどゝ云うたは、まッたく、赫映姫と云う大盜人(オホヌスビト)の奴(ヤツ)が、人を殺さうとするはかりごとであッたわい。あゝ、おそろしい女ぢや、これからは、かやつの家の近邊でも、もうおれは通るまい。そちたちも、通るな

と云うて、家に少々殘ッてあッた、絹や綿や錢の類などは、龍の珠を、えう取らぬ家來どもに、褒美にくだされた。

是れを聞いて、さきに去られなされた、もとの北方は、をかしさに堪えず、腹をかゝへて御笑いなされる。

また、彼の糸を葺かせて、きれいに作ッた屋根は、今はむだ事となッて、鳶や烏が、みンな巣に咋(クハ)へて持ッて往ッたわい。

さて、此の事を聞いて、世間の人が評判して云うには

大伴の大納言は、龍の首の珠を取ッてござッたか。どうぢや。

と一人が云へば

一人が

いや、さうではない。

龍の珠を取ッてござるかはりに、御両眼に李のやうな玉をつけて御歸りなされた

と申したによッて、

あゝ、たへにくい(をかしさに堪へにくきと、腫物の食べにくきとをかねたり)

と云うたからッそれから世間で思うまゝにならぬ事を

あな、たへがた

とは、言い初めたのであるわい。

燕の子安貝

これより、つばくらめの子安貝のことをしるす

中納言、石上ノ麻呂は、家につかはるゝ人をのこどもの許に、『つばくらめの、巣くひたらば、つげよ』とのたまふを、うけたまはりて、『何のれうにかあらん』とまうす。こたへてのたまうやう、『つばくらめのもたる、子安貝とらんれうなり』とのたまふ。をのこども答へてまうす。『つばくらめを、あまたころして見るにだにも、腹になきものなり。たゞし、子うむときなん、いかでかいだすらん。はらはらと、人だに見れば、うせぬ』とまうす。又、ひとのまうすやう、『おほひづかさの飯かしく屋のむねの、つくのあなごとに、燕は巣くひはべり。それに、まめならんをのこどもをゐてまかりて、あぐらをゆひて、あげてうかゞはせんに、そこらの燕、子うまざらんやは。さてこそ、とらしめたまはめ』とまうす。中納言、よろこびたまひて、『をかしき事にもあるかな。もとも、えしらざりけり。きようあること申したり』とのたまひて、まめなるをのこども、二十人ばかりつ

かはして、あなゝひにあげすゑられたり。

【釋義】巣くひたらば◎巣をつくりたらばの意◎何のれうにかあらん　れうは、料の字音なり。こゝは、何のためにかあらんの意◎子安貝　前に云へり◎たゞし　今、しかしながらなどいふに當る◎子うむときなん、いかでかいだすらん　子を生む時には、腹より出すこともあるにや、如何にして出すらんの意◎人だに見れば、うせぬ　燕は人さへ見れば、驚きて飛び去るとなり◎おほひづかさ　大炊寮なり。大炊寮は宮内省の所管にて、朝廷の御飯を炊く役所なり◎飯かしく　飯をたくをいふ◎屋のむねの、つくのあな　屋のむねとは、屋根のうら、即ち天井の棟をいふ。つくのあな、つくとは、屋のむねと、長押との間にありて、屋根を支へ持つ柱にて、其の組みたてたる形狀は、四ッ手の如くなれば、其の四ッ手になれる隙間の所を、つくの穴といへるなり◎まめならんをのこ　忠實なる男の義にて、正直によく奉公する男をいふ◎ゐてまかりて　率て行きてなり◎あぐら　假に上り居るべき足代をいふ◎もひて　作り搆へての意◎うかゞはせん　令伺にて、密に見させんの意なり◎そこらの燕　數多の燕なり◎子うまざらんやは　子を生まぬことあらんや、必ず、產むべしとの意◎さてこそ　然爲てこそにて、俗に、さうしてこそといふに同じ◎をかしき事　面白く興ある事なり◎えしらざりけり　かゝる面白き手段を、いまだ思ひつかざりけりとなり◎きようあること　上に、をかしき事とあるに同じ意なり◎あなゝひ　今の足代のことにて、即ち、上のあぐらをいふ◎すゑられたり　足代の上に、上げ置れたりとなり。

【譯解】中納言、石上の麻呂は、其の御家に奉公する家來どもの許に

つばめが、巣をかけたらば、知らせよ

と仰せらるゝを、御家來どもが、うけたまはッて、不思議に思い

そりや、まアなんの爲めに遊ばすのでござる

と申す。

中納言　答へて仰せらるゝには

外でもない、つばめが持ッて居る、子安貝を取らう爲めぢや

と仰せらる。

御家來ども、答へて申すやう

つばめは、さようなめづらしい物を持ッて居りますか、初めてうけたまはりました。わたくしども、これまでつばめを澤山殺して、腹を割いて見ましたが、それでさへ、一向腹

の中に無い物でござる。
まかし、子を産む時にはッどうして其やうな物を出すでござらう。
とにかく、子を産む時にしらべたら、わかりませうか、困ッたことには、つばめと申すものは、人さへ見れば、はらはらと飛去ッてしまいます
と申す。
また、或人の申すやう
大炊寮の飯をたく屋の棟の、つくの穴には、どの穴にも、皆つばめが、巣をかけて居ます。
それへ、實體な男どもをつれて行きまして、其の巣の下に、足代をこしらへて、その上にのせて、こッそり巣の中をのぞかせませうなら、澤山な、つばめの中には、子を産まぬことがありませうかい。きッと、産むに違いない。
そこでッ御取らせなさるがよろかう
と申す。
中納言は、これを聞いて、御喜びなされて
。こりや、まァ面白い事であるわい。

其のやうな工夫は、ちッとも、えう知らなンだわい。
おもしろい事を、よくまァ申じた
と仰せられて、早速實體な家來ども、二十人ばかりを、大炊寮に遣して、足代を作り、其の上にあげて置れた。

殿より、つかひひまなくたまはせて、『こやす貝とりたるか』と問はせたまふ。　つばくらめも、人のあまたのぼり居たるにおぢて、巣にのぼりこず。かゝるよしの御返事をまうしければ、聞きたまひて、いかゞすべきと、おぼしめしわづらふに、かのつかさの官人(クワンニン)、くらつまろとまうす翁、まうすやう、『子安がひとらんとおぼしめさば、たばかりまうさん』とて、御前にまゐりたれば、中納言ひたひをあはせて、むかひたまへり。　くらつまろが申すやう、『此の燕の子やすがひは、あしくたばかりて取らせたまふなり。さては、えとらせたまはじ。　あなゝひに、おどろおどろしく、廿人のひ

との、のぼりて侍れば、あれてよりまうでこずなん。　せさせ給ふべきやうは、此のあなゝひをこぼちて、人みなしりぞきて、まめならん人、ひとりを、あらこに載せすゑて、綱をかまへて、鳥の子うまんあひだに、綱をつり上げさせて、ふと、子安貝をとらせ給はんなん、よかるべき』とまうす。中納言のたまふやう、『いとよき事なり』とて、あなゝひをこぼちて、ひとみなかへりまうで來ぬ。

【釋義】ひまなく　間もなく度々といふ意◎問はせたまふ　使を遣はして、令問給ふなり◎おぢて　恐れてなり◎かゝるよし　かやうの由にて、燕の巣に上り來ぬ趣をいふ◎おぼしめしわづらふ　思案にくれて、深く心をなやましたまふ意◎かのつかさ　大炊寮をいふ◎くらつまろ　名なり◎たばかりまうさん　こゝは、御相談申さんとの意◎ひたひをあはせて、むかひたまへり　身近くよび寄せて、親しく相談する趣なり◎あしくたばかりて取らせたまふなり　取らんとせらるゝ謀あしくあるなりの意◎さては、えとらせたまはじ　左

樣にては、取り給ふことを得じとなり◎おどろおどろしく　驚くばかり甚しきを云ふ語にて、俗に、仰山になど云ふに同じ◎あれて　遠離ことをいふ◎よりまうでこずなん　巣に寄りつかぬなりけりの意。なんの下に、ありけると云ふ詞を入れて見るべし◎せさせ給ふべきやうは　是れより、令爲たまふべき樣はの意、以下くらつ麻呂が考をいふなり◎こぼちて　壞ちてなり◎あらこ　目のあらき籠なり◎綱をかまへて　籠に綱を附けてなり◎ふと　俗に、ちよいといふに同じ◎いとよき事なり　甚、よき考へなりとの意なり◎かへりまうで來ぬ　中納言の家に、歸り來りたりとなり。

【譯解】さて、中納言は、御殿から、使を絶え間なく御立てなされて

子安貝を取ッたか

と御聞きなさる。

ところがつばめも、人が澤山巣の近所に登ッて居るによッて、こわがッて、さッぱり巣に上ッて來ぬ。

それもゑ、かやうの譯の御返事を申し上げたれば、中納言は、御聞きなされて、こりや、なんとしたらよからうと、思案に當惑して居らるゝ所に、彼の大炊寮の役人の、くらつ麻呂と云う

翁が、中納言の、子安貝を取る事に就いて、種々心配なさると云うてとを聞いて、申し上ぐることには

つばめの子安貝を、取らうと、思し召すなら、其のてだてに就き、翁が御相談申さうと云うて、中納言の御前に參ッたれば、中納言は、喜んで、早速よび寄せて、翁と額をつき合せて、親く御相談なされた。

さて、くらつ麻呂が申すには

しよてから、此のつばめの子安貝は、下手に御工夫なされて、御取らせなさるのぢや。これでは、所詮えう御取りなさることは出來ますまい。

あのやうに、足代の上へ、仰山に、二十人の人が、登ッて居ますれば、燕はこわがッて、にげ去ッて、巣に寄ッて來ませぬのでござる。

そこで、私が工夫いたしましたは、まづ、子安貝を御取らせなさる法方は、まづ此の足代をやぶッて、上ッて居る人たちは、みんな退いて、それから、實體な人、一人を、目のあらい籠へ載せこんで、其の籠には、綱をつけまして、さて、つばめが子を産むをりに、其の綱を高う釣りあげさせて、ついちよいと、こやす貝を御取らせなさるがッよろしうござりませう

と申す。

中納言の、仰せらるゝは

こりや、きつう、よい考へぢや

と云うて、早速、そのよしを、御家來に言い付けられたによッて、すぐさま、足代をやぶッて、御家來の人は、みんな大炊寮から、歸ッて來た。

中納言、くらつまろにのたまはく、『燕はいかなる時にか、子をうむとしりて、人をばあぐべき』とのたまふ。　くらつまろ申すやう、『つばくらめは、子うまんとするときは、尾をさゝげて、七たびめぐりてなん、産みれとすめる。　さて、なゝたびめぐらんをり引きあげて、其のをり、子安貝はとらせたまへ』とまうす。

【釋義】　中納言、くらつまろにのたまはく云々　　此處は、上の、中納言と、翁との問答に

續けて見るべし。

◉尾をさゝげて　尾をさしあげてなり◉産みおとすめる　産み落す樣子なりとの意◉引きあげて　綱を引て、㊃籠をあぐるなり。

【評解】　さて、中納言は、また、くらつ麻呂に、仰せらるゝには

そなたの工夫は、至極妙ぢやが、しかし、つばめは、どういう時に、子を産むと云うことを、承知して、人をばあげやう。これには困るがと仰せらるゝ。

くらつ麻呂、答へて申すやう

そこに、ぬかりはござらぬ。

つばめは、子を産まうとする時は、尾をさしあげて、七遍廻ッてッ子を産み落すさうな。

そこで、七遍廻る時に、籠を引きあげて、其の時に、子安貝は、御取らせなされと申す。

中納言、よろこびたまひて、よろづの人にもしらせたまはで、みそかにつかさにいまして、をのこどもの中にまじりて、よるをひるになして、とらしめたまふ。

【釋義】　中納言、よろこびたまひて云々　此の所は、まづ、あらかじめ、後のことを云ひ置きて、さて、ふたゝび前に立ちもどりて、くはしく說く文體なり。されば、直に次の、くらつまろ、かくまうすを云々には續かず、其の心して見るべし。

◉みそかにつかさにいまして　內密に、大炊寮に行き給ひてなり。みそかは、ひそかといふに同じ◉よるをひるになして　晝夜の差別なくの意。暫時も怠らず、子安貝を取らんとし給ふ趣なり◉とらしめたまふ　家來どもに、令(トラシメ)取たまふなり。

【評解】　中納言は、くらつ麻呂の申すことを、甚、およろこびなされて、すべての人にも御知らせなさらずに、そッと、御自身、大炊寮へ御いでなされて、家來どもの中にまじッて、晝夜の差別なく、御取らせなされた。

くらつまろ、かくまうすを、いといたくよろこびたまひてのたまふ。『こゝにつかはるゝ人にもなきに、ねがひをかなふることのうれしさ』といひ

て、御衣ぬぎてかづけ給ひつ。『更によさり、此のつかさにまうで來』とのたまひてつかはしつ。

〔釋義〕 くらつまろ、かくまうすを くらつ麻呂の、前に子安貝を取る謀を申したるを云ふ。

さて、此の處は、上の、くらつ麻呂申すやう云々、其のをり、子安貝はとらせたまへとまうす。とあるに續けて見るべし。

◎こゝにつかはるゝ人にもなきに くらつ麻呂は、此の方に奉公ずる者にもあらざるにの意なり◎かづけ 令被の義。總て、貴人より賜はる綿布の類は、肩にうちかけて歸るより、かく云へるなり◎更に あらためての意◎よさり 夜になりての意◎此のつかさ 大炊寮をいふ◎まうで來 參り來たれよの意なり◎つかはしつ 俗に、御歸しなされたといふ意なり。

〔評解〕 さて、中納言は、くらつ麻呂が、かやうに申し上げたるを、ひどう、御よろこびなされて、仰せらるゝは

そちは、此の方に奉公する人でも無いに、それに、色々と骨を折ってくれて、余が願望をかなへてくれることの嬉しさよ

と仰せられて、着ておいでなされた、きものを脱いで、くらつ麻呂に、御やりなされた。

また、中納言は

あらためて、今晩、此の大炊寮に參れ

と仰せられて、くらつ麻呂を、御かへしなされた。

日くれぬれば、彼のつかさにおはして、見たまふに、まことに、つばくらめ巣つくれり。くらつまろ申すやうに、尾をさゝげてめぐるに、あらこに人をのせて、つり揚げさせて、つばくらめの巣に、手をさし入れさせてさぐるに、『物もなし』とまうすに、中納言『あしくさぐればなきなり』と腹だちて、『たればかりおぼえんに』とて、『われのぼりてさぐらん』とのたまひて、籠にのりてつられのぼりて、うかゞひたまへるに、つばくらめ

尾をさゝげて、いたくめぐるに合はせて、手をさゝげて探りたまふに、手にひらめるもののさはる。　時に、『われ物にぎりたり。　今はおろしてよ。翁しえたり』　とのたまひて、あつまりてとくおろさんとて、綱を引き過ぐして、つなたゆる、すなはち、八島のかなへのうへに、のけざまに落ちたまへり。　人々あさましがりて、寄りてかゝへ奉れり。　御目はしらめにてふし給へり、人々御くちに水をすくひ入れたてまつる。　からうじて、息出で給へるに、また、鼎の上より、手とり、足とりして、さげおろしたてまつる。からうじて、『御こゝちは、いかゞおぼさるゝ』　と問へば、いきの下にて、『ものは少しおぼゆれど、腰なんうごかれぬ。　されど、子安貝をふと握りもたれば、うれしくおぼゆるなり。　まづ、しそくさしてこ。　此の貝かほ見ん』　と、御ぐしもたげて、御手をひろげたまへるに、つばくらめのまりおける、古くそを、にぎりたまへるなりけり。　それを見たまひて、『あなかひなのわざや』　とのたまひけるよりぞ、おもふにたがふことをば、かひなしとはいひける。

【釋義】　まことに　人の申す如く、眞實にの意◎物もなし　何物も無しの意。男等の詞◎あしくさぐればなきなり　探し樣の惡さによりて、子安貝の無きなりの意◎たればかりおぼえんに　誰に命じてよからんと思ふ人も居らぬとなり◎めぐるに合はせて　廻ると同時になり◎ひらめるもの　平たき樣なる物なり◎われ物にぎりたり云々　大納言の詞なり◎翁しえたり　翁よ、我は爲得たりの意にて、俗に、してやったといふに同じ◎綱を引き過ぐして　釣り上げたる籠を下さんとするなれば、綱を延ばし遣るべきを、あわてうろたへて、かへりて強く引き過ぐしたるなり◎つなたゆる、すなはち　綱の切るゝと、其のまゝすぐにの意◎八島のかなへ　大炊寮にある、古き釜の名なり。かなへは、鼎のことにはあらで、たゞ、釜のことを云ふなり◎のけざま　仰樣にて、俗に、あほのけさまといふに同じ◎あさましが

りて　歎きわきれての意◎かゝへ　抱の字の義にて、介抱することなり◎からうじて、息
出でたまへるに、また、鼎の上より云々、さげおろしたてまつる　からうじては、やうやく
なり。
さて、息出でたまへるに、また、鼎の上より云々して、さげおろしたてまつるとありては、中
納言の、鼎の上に氣絶して、息出で給はざりし以前は、人々其のかなへの上に登りて、御口に
水をすくひ入れなどして介抱し、さて、息出で給へるより、また、其のかなへの上より、おろ
しまゐらせたる樣に見ゆれどしからず。綱たゆる、すなはちと云ふより、直に、抱へ奉り、御
くちに水をすくひ入れなどする方に語りつゞけたる例の筆法にて、鼎の上より、おろし奉れる
は、即ち、氣絶し給ふと同一事なるを、かく二かたの如く記せるなり。然れば、息出でたまへ
り。と句して、次にかなへの上より、おろし奉れることを、ふたゝび云ふべき所なり。此は、
かならず、傳寫の誤りなるべし。暫く、善本の出づるを待つ。
◎からうじて、御こゝちは云々　此のからうじては、息の下にてと云ふにつゞく文脈なり◎
いきの下にて　息もきれぎれにて、かすかなるさまを云ふ◎ものは少しおぼゆれど　少し氣
は付きたれどの意。大納言の詞なり◎もたれば　持ちてあればの義◎しそくさしてこし

そくは、紙燭にて、紙、また布などをより、それに、脂をぬりて、火をともす物なり。此の頃
は、蠟燭といふものなかりしなり。さしてこは、火をつけて、來れの意なり◎此の貝かは見ん
　子安貝の貌を見んとなり◎御ぐしもたげて　くしは、頭を云ふ。もたげは、持ちあげの
意なり◎御手をひろげたまへるに　固く握り給へる手を開き給へるになり◎まりおける
まりは、糞、また、尿をすることをいふ古言。おけるは、置きたるの意なり◎あなかひなのわ
ざや　あなは、嗚呼と同じく、歎息の辭。かひなのわざは、何のかひもなき事にて、俗に、
つまらぬ事など云ふに同じ。やは、歎息の辭なり。さて、かひなと云ふに、貝無と云ふ事をか
けて、面白く書きなしたるなり◎おもふにたがふこと　思ふことの咋ひちがひて、望のかな
はぬことを云ふ。

【譯解】さて、日が暮れたによって、中納言は、彼の大炊寮へ御出かけなさって、御覽なさ
るに、なるほど、つくの穴に、つばめが、巣をかけて居る。
さうからして居るうちに、さっき、くらつ麻呂が、申した樣に、つばめが、尾をさしあげて廻
るによって、こゝおやと、すぐさま、荒籠に、人を乘せて、綱で釣りあげさせて、つばめの巣
へ、手をさし込ませて探らすに

なッにも無い

と申すに

中納言は、いらだちて

無い筈があるものか

下手に探るから、無いのぢや

と云ッて、腹を立てられ

誰に取らさうと思ふ者も居らぬ。

みな、ぶきやうな者どもぢや

と云ッて

よし、余が、登ッて、探らう

と仰せられて、彼の荒籠へ乗ッて、綱に釣られて登ッて、樣子を御うかゞいなさるに、丁度、つばめは、尾をさしあげて、ひどう、廻る、其のをりを見合せて、ずッと、手をさし擧げて、巣の中を、御探りなさる所が、手に平ッたい物か障ッた。

その時

おりや物を握ッた。

早くおろしてくれ。

爺よ、してやッたぞ

とおッしやッたによッて、みなみな、あつまッて、ちッとも早くおろさうとて、あわてゝ、ゆるめる筈の綱を、あべこべに引き過ごして、そのはづみて、綱が、ふッつりきれると、そのまゝ、下にある八島の鼎の上へ、あをのけにおッこちなされた。

こりや、大變と人々は、きもをつぶして、かけ寄ッて御抱き申した。

おいとしや、中納言は、氣絶せられて、白眼（シロメ）をして、たをれておいでなされた。

人々は、まづ、御口に水をすくッて御入れ申す。

人々の骨折て、やうやく、息をふッかへしなされた。

また、落ちられると、すぐに、鼎の上から、手どり、足どりして、御おろし申した。

さて、今、やうやく、息をふきかへされたによッて、

御心もちは、いかゞでござります

と御たづね申せば、

中納言は、やッと、息もきれぎれにて、

氣は、すこしたしかになッたが、何分、腰がサ動かれぬ。

しかし。大事な子安貝を、ちよいと握ッて持ッて居れば、おりや嬉しう思はるゝぢや。

何はともあれ、まづ、早く紙燭をつけて來い。

此の握ッた子安貝の顔を見やう

と御頭をもちあげて、さて、御手をひろげなさるゝに、こはいかに、つばめのたれて置いた、古糞を、御握りなされたのであッたわい。

氣の毒や、中納言は、それを御覧なされて

おアかひ(貝をかねたり)のない、つまらぬことぢや

と仰せられた、それからサ世間で思ふこととの喰い違ふ事をば

かひなし

とは、云い初めたわい。

かひにもあらずと見たまひけるに、御こゝちもたがひて、からびつのふたに入れられたまふべくもあらず。御腰はをれにけり。中納言は、いはけたるわざして、やむことを、人にきかせじとしたまひけれど、それを病にて、いとよわくなり給ひにけり。貝を得とらずなりにけるよりも、人の聞きわらはんことを、日にそへて思ひたまひければ、たゞに病み死ぬるよりも、人ぎゝはづかしく、おぼえたまふなりけり。これを、かぐや姫きゝて、とぶらひにつかはしける歌、

年をへて　涙たちよらぬ　住のえの
まつかひなしと　きくはまことか

とあるを讀みてきかす。いとよわきこゝちに、頭もたげて、人にかみをもたせて、くるしきこゝちに、からうじて書きたまふ。

かひはかく　ありけるものを　わびはてゝ

しぬるいのちを　すくひやはせぬ

と、かきはつると、たえ入りたまひぬ。これを聞きて、かぐやひめ、少しあはれとおぼしけり。それよりなん、すこしうれしきことをば、かひありとはいひける。

【釋義】かひにもあらず　握りしは、確に其れと思ひしに、全く　まことの子安貝にあらずとなり◎御こゝちもたがひて　御心持も俄にちがひてなり◎からひつのふた　唐櫃の蓋なり。昔は、總て物を人に贈るには、唐櫃の蓋に入れたるなり◎いはけたるわざして　、心をさなく、無分別なる事を爲てなり◎やむことを　病む事をなり◎それを病にて　無分別なる事をして、わづらふと云ふ事を、人に知らせじと心配せるゝ、それが、また、病氣のたねとなりての意◎たゞに病み死ぬるよりも　尋常病氣にて、病死するよりもなり◎日にそへて　日に増してなり◎人ぎゝはづかしく　人の聞く事、耻づかしくにて、即ち、外聞あしくといふ程の意なり◎とふらひ　見舞なり◎年をへて　年ひさしくの意◎浪たちよらぬ　住の江の松に、浪の打ち寄せぬといひて、中納言の、かぐや姫の家に、立ち寄りおとづれぬ意をかけたり◎まつかひなし　松に、待つをかけ、かひなしに、貝無しをいひかけたり。住の江の松は、年ひさしく浪たちよらねば、待ちて居るかひなしといひて、さて、姫も中納言を待ち居るに、其のかひなく、姫のあつらへし貝は、無しと聞くが、其れは、まことにやと、巧に云ひなしたるなり◎いとよわきこゝち　甚、衰弱したる病體の意◎人にかみをもたせて　人に紙を持たしめてなり。紙を持つ力のなきさまなり◎くるしきこゝち　苦しき病體の意◎かひはかくありけるものを　かひに、物をすくふ匙をかけたり。姫は、貝なしと云はるれど、我が命をすくふ匙は、かく有りけるものをと云ひて、さて、今、姫より懇なる見舞のことばを得たるにより、我が身の是れまで辛苦したる甲斐はありけるにと云ふ意を含ませたり◎わびはてゝ、しぬるいのち　難義しつくして、今、死なんとする命なり◎すくひやはせぬ　何故に救ひはせぬかなり。姫は、匙を持ちながら、何故に我が危き命をすくひ上げてくれぬぞと云ひて、何故この上のなさけを我れにかけて、そなたの爲めに死なんとする、我が一命を、助けてくれぬぞ。さてさて、なさけなしと云ふ意を含ませたるなり◎かきはつると　書き終ると、そのまゝすぐにの意◎たえ入りたまひぬ　息絶ね給ひぬなり◎すこしうれしきこと云々　中納言は、姫より見舞の歌を得て、少し嬉しと思ひて、かひはかくありける云々の歌をよみた

るが、是れがもとゝなりて、後の世に、すこし嬉しき事を、かひありと云ふなりと、例の筆法もて、面白くかける文なり

【譯解】さて、中納言は、折角取ッたと思ッた貝は、子安貝でも無いと、御覧なさるゝに、がらりと、御心持もちがッて、此の様な物は、折角御用意なされた、りッぱな、唐櫃の蓋へは、なんぼうでも、御入れなさることが、できそうにも無い。

それは、まだよけれど、此のけがゝもとゝなッて、とうとう御腰の骨は折れたわい。

中納言も、これには、御困りなされて、どうかして、かやうな無分別なる事をして、わづらうと云ふことを、世間の人に聞かせまいと、御かくしなされたけれど、人の口には、戸が立てられぬ。

そればッかりを、御案じなさることが、病氣の種になッて ひどう、衰弱なされた。

望みの貝を、えう取らなくなッたのも、しんがいなれど、また、其れよりも、おはらしい事をして、けがをしたことを、世間の人が聞いて、定めて笑うであらうと云う事を、日ましに、きつう、御案じなされたによッて、尋常の病死するよりも、別して外聞わるうおぼしめすのぢやわい。

さて、これを、かぐや姫が聞いて、さすがに御氣の毒に思い、見舞にやッた歌は

年ひさしう、御立ちよりなさらぬ故、どうあそばしたかと、待ッて居りましたに、待つかひもなく、御こしなされず。

また。御のぞみ申した貝も無いと、聞きますが、そりや、ほんとの事でござりますかと、書いてある歌を、御そばの人が、讀ンで聞かせた。

中納言は、ひどう、よわッた御病體で やうやうあたまをもち上げて、おそばの人に紙を持たせて、苦しい病體て、やッと、お書きなさる返歌に

かひは無いと、おッしやるが、今、此の様に、親切に尋ねて下されば、其れで、私が苦勞するかひはあるのぢや。

此のなさけをかけらるゝなら、とてものことに、過うことをもゆるしてくれよ。

そうすりや、私の命もたすかるに、私の命をすくう匙は、現在かやうにあるものを、なせ、其の匙を持ちながら、そなた故に苦勞をしつくして、いま、死なうとする命をすくッてくださらぬぞ。

さてもさても、つれない御心ぢや

と、書き終ると、そのまゝ、息を御ひきとりなされた。
是れを聞いて、かぐや姫も、さすがに、すこし、おいとしいと思うたわい。
それからちッすこし嬉しい事を
かひあり
とは、言い初めたわい。

御狩のみゆき

これより、御狩のみゆきのことをしるす

さて、かぐや姫、かたち世ににず、めでたきことを、みかどきこしめして、内侍(ナイシ)、中臣(ナカトミ)のふさ子にのたまふ。『おほくの人の身をいたづらになして、あはざンなる、かぐや姫は、いかばかりの女ぞと、まかりて見て參れ』とのたまふ。ふさ子、うけたまはりて、まかれり。竹とりの家に、かしこまりて、しやうじ入れてあへり。おうなに、内侍のたまふ。『れほせでと

に、かぐや姫のかたち、いうにおはすとなり。よく見て參るべきよし、のたまはせつるになん、まゐりつる』といへば、『さらば、かくとまうしはべらん』といひて入りぬ。かぐや姫に、『はや、彼の御使に對面したまへ』といへば、『よき形にもあらず。いかでか、見ゆべき』といへば、『うたても、のたまふかな。みかどの御使をば、いかでか、おろかにせん』といへば、かぐや姫、こたふるやう、『みかどのめしてのたまはんこと、かしこしとも思はず』といひて、更に見ゆべくもあらず。うめる子のやうにはあれど、いと心はづかしげに、おろそかなるやうにいひければ、こゝろのまゝにも、えせめず。おうな、内侍のもとにかへり出でゝ、『くちをしく、此のをさなきものは、こはくはべるものにて、たいめんすまじき』とまうす。ないし、『かならず、見たてまつりてまゐれ』と、おはせでとあり

つるものを、見たてまつらでは、いかでか、かへりまゐらん。國王のおほせごとを、まさに世に住みたまはん人の、うけたまはり給はでは、ありなんや。いはれぬことなしたまひそ』と、ことばはぢしくいひければ、これを聞きて、まして、かぐや姫、きくべくもあらず。『國王のおほせごとをそむかば、はや殺したまひてよかし』といふ。

【釋義】内侍　女官の稱。後宮の雜事、奏請、傳宣の事をも掌る。こゝは、内々の御事なれば、女官を勅使として遣はされしなり◉中臣のふさ子　中臣は姓、房子は名なり◉身をいたづらになして　身をはかなく爲ての意。即ち、石上中納言の、姫の爲めに病みて薨じ、又、車持の皇子の、山にかくれなどし給ひしを云ふなり◉あはざゝなる　遇はずにあるなるにて、即ち、遇はずに居ると云ふ意◉いかばかりの女ぞ　如何ほど、美しき女なるぞの意◉うけたまはりて　勅命を奉じてなり◉かしこまりて　敬ひ謹みてなり◉しやうじ入れて　勅使を請待し入れてなり◉おほせごと　勅命をいふ◉いうにおはすと　優美にてあると云ふなりの意◉さらば、かくとまうしはべらん　竹取の媼の詞。然らば、斯樣々々と、姫に申しますでござるの意◉入りぬ　姫の居所に入りしなり◉はや、彼の御使に云々　媼の詞なり◉よき形にもあらず　我はいはるゝ如く、美麗なる容貌にあらずとなり◉いかでか、見もべき　どうして、あひませうぞの意◉うたても　惡しくもといふほどの意◉いかでか、おろそかにせん　どうして、疎略にせられうぞの意◉みかどのめして　帝のめしと‖などの誤なるべしと云へり◉かしこしとも思はず　恐れ多く有り難しとも思はずの意なり◉見もべくもあらず　勅使に會ふべき樣子もなしの意◉うめる子のやうにはあれど　姫は小さきころより發育したれば、眞實の我が子の如くにはあれどの意◉心はづかしげに　心に隔てありて、氣がおける樣にての意◉おろそかなるやうに　疎々（ウトウト）しき樣になり◉こゝろのまゝにも、えせめず　思ふ存分に、責むる事も出來ずの意なり◉くちをしく　殘念にの意なり。媼の詞◉をさなきもの　幼稚なるものにて、赫映姫をさせるなり◉こはく　剛情の義。心づよく承知せぬよしなり◉まさに　正しくの意にて、俗に、現在などいふに同じ◉うけたまはり給はではありなんや　勅命を謹みて承諾せずしてあるべきか、決してあるべからざる事なりといふ意◉いはれぬこと、なしたまひそ　いはれなき、不道理なることを云ひ給ふなの意なり◉はぢしく　恥ぢしめての意◉まして　いよいよの意。姫はもとより承引せぬを、内侍の恥

おしめて云ふを聞きて、憤りていよいよ聞き入れざるなり◎殺したまひてよかし　御殺しなされて下されよかしといふほどの意。かしは、確に強めていふ辭なり。

【譯解】さて、かぐや姫の容貌が、世に類もなく、うつくしい事を、時の帝が、御聞きあそばして、内侍の中臣の房子に、仰せらるゝには

あの多くの人が、身をむだなものにして、戀いこがれても、とうとう、今まで、遇はずに居ると云う、かぐや姫は、まアどのくらゐ、うつくしい女であるか、その方行て見て參れ

と仰せらる

房子は、勅命をうけたまはてまゐッた。

竹取の家にては、勅使と聞いて、かしこまッて、御通し申して、御めどほりをした。

勅使は女官であるによッて、竹取の翁の妻の嫗が出て、勅命をうけたまはッた。

さて、嫗に、内侍は勅命を仰せられた。

勅命には

かぐや姫のすがたが、たをやかであると云うことぢや。

能く見て參れ

と云う勅命があッたによッてサ參ッたのである

と云へば

竹取の嫗

然らば、かやうであると、姫に申しまするでござりませう

と云うて、姫の居間へ入ッた。

嫗は、かぐや姫に

早く、あの御勅使に御めどほりをなされ

といへば

赫映姫

わらはも、仰せらるゝやうに、よいすがたでもありませぬ。

どうして、御勅使などに、御めどほりができませうぞ

といへば

嫗

そりや、まアわるいことをいはるゝなア。

そなたは、一體何と思うてぢや。
天子の御使をば、どうして、そのやうに疎略にできやうぞ
といへば
かぐや姫の、答ふるやう
天子の御めしと仰せらるゝことも、わらはも、別段おそれ多いとも思いませぬ
と云うて、とんと御目通りをしさうにも無い。
嫗は、姫を幼ない時から、發育した故、まるで、自身が生ンだ子の樣ではあるけれども、實の血をわけた子で無い故に、今、姫が、きつう、氣がおけるやうに、何となく疎遠なやうに云うによッて、思うまゝにも、えう責めぬ。
嫗は、せんかたなく、内侍の御前にかへり出て、申し上るには
仰せの趣を、姫に申し聞けましたが、殘念にも、此のをさないものは、强情な女でござりまして、御目通りはしますまい
と申しあげた。
内侍は、之れを聞いて

それは、けしからぬ事でござる。かたじけなくも、みかどよりは、きッと、姫を見て參れと、勅命のあッたものを、どうして、姫に御逢い申さずには、歸られませうぞ。その上、かりそめにも、國王の勅命を、現在此の世に住みなさる人が、謹ンでうけたまはり、御承引なされいでは、あられませうかい。
如何なる仰せごとにても、背くことはなりませぬ。
さやうな、いはれもなき、不法なことをお言いなさるな
と、ことばするどく、恥ぢしめて云うたによッてこれを聞いて、もとより、承引せぬものを、國王の威樣にて、無體にしたがへ給はんとは、無理なることゝ、いよいよ、かぐや姫は、承引しさうにもない。
嫗が、强いていへば
かくや姫は
國王の勅命を背く罪なら、早く、御殺しなされてくだされよ
と云う。
此の内侍、かへりまゐりて、このよしを奏す。みかど、きこしめして、『れ

ほくの人を殺してける心ぞかし』とのたまひて、やみにけれど、なほ、れはしめしれはしまして、此の女のたばかりにやまけん、とればしめして、竹取の翁をめして、れはせ給ふ。『汝が持てはべるかくや姫、たてまつれ。かはかたちよし、と聞こしめして、御使をたびしかど、かひなく見えずなりにけり。かく、たいだいしくやは、ならはすべき』とれはせらる。翁、かしこまりて、御返事まうすやう、『このめのわらはは、たゝて宮づかへつかうまつるべくもあらず侍るを、もてわづらひはべり。さりとも、まかりてれはせたまはん』とそうす。これを聞こしめして、仰せたまふやう、『などか、翁の手におはしたてたらんものを、心にまかせざらん。此の女、もし、たてまつりたるものならば、おきなに、かうぶりを、などか、たはせざらん』翁、よろこびて、家にかへりて、かぐや姫にかたらふやう、『かく

なん、みかどの仰せたまへる。猶やは仕うまつりたまはぬ』といへば、かぐや姫、こたへていはく、『もはら、さやうの宮づかへ仕へ奉らじとおもふを、しひてつかうまつらせ給はゞ、消えうせなんず。みつかさかうぶりつかうまつりて、死ぬばかりなり』翁、いらふるやう、『なしたまひそ。つかさかうぶりも、我が子を見奉らでは、何にかはせん。さはありとも、などか、宮づかへをし給はざらん。死に給ふやうやはあるべき』といふ。『なほ、そらでとかと、つかうまつらせて、死なずやあると見たまへ。あまたの人のこゝろざしおろかならざりしを、むなしくなしてしこそあれ。きのふけふ、みかどののたまはんことにつかん、人ぎゝやさし』といへば、翁、答へていはく、『あめの下のことは、とありとも、かゝりとも、御命のあやふさこそ、大きなるさはりなれ。猶、つかうまつるまじき事を、まゐり

て申さん』とて、まゐりて申すやう、『おほせのことのかしこさに、彼のわらはを參らせんとて、仕うまつれば、『みやづかへに出だしたてなば、死ぬべし』と申す。みやつこ麻呂が手にうませたる子にてもあらず。むかし、山にて見つけたる。かゝれば、こゝろばせも、世人に似ずぞはべる』と奏せさす。

【釋義】おほくの人を殺してける心ぞかし　勅命に背くならば、早く殺せと云ふ、此の氣づよき強情なる心は、即ち、今まで數多の人を殺したる心ぞとなり◎やみにけれど　一旦、姫の事は、思ひ止み給ひけれどの意◎此の女のたばかりにやまけん　姫の強情なることを云ふは、一時の彼の策略なるべし。我は、いかで、此の策略に負けて、云ふまゝにして置くべきかとなり◎御使をたびしかど　勅使をたまひしかどなり◎かひなく　勅使を給ひし效なくなり◎たいだいしくやはならはすべき　たいだいしくは、怠々しくにて、疎略にの意。勅命を、疎略に心得習はすべき事なるか。決して、左樣に、習はすべき事にあらずとなり◎かしこまりて　畏れ入りてなり◎めのわらは　かぐや姫をいふ◎たえて　絕えてにて、一向になどいふに同じ◎もてわづらひ　俗に、もてあますと云ふ程の意なり◎さりとも　然有とものの義なり◎まかりておほせたまはん　家に歸りて、仰せごとを云ひ聞かさんの意なり◎これを聞こしめして　翁の申すことを、傳奏のものより、帝の聞こし召しての意なり◎などか　此の語は、心に任せざらんと云ふに續くなり◎おほしたてたらんものを　發育したるものをの意◎かうぶりを、などかたばせざらん　何として、冠を賜はぬ事あらんやとなり。冠を賜ふと云ふは、五位の位をたまふことなり。昔は、それぞれ位に相當する冠ありて、位を賜はる時は、其の冠を賜はりたるなり。さて、大凡に、冠を賜ふと云ふは、五位に敍せらるゝを云ふなり◎かくなん　かやうかやうの意なり◎なほやは、つかうまつりたまはぬ　かくありがたき勅命ありても、なほ、宮仕へし給はぬかとなり◎もはら　ひたすら、また、全くなどの意なり◎しひて　強ひてにて、俗に、無理にと云ふに同じ◎消えうせなんず　消え失せなんとすにて、身體消え失せて、死なんとすといふ意なり◎みつかさかうぶりつかうまつりて　翁に、御官位をつけ奉りての意なり。姫、宮仕へすれば、翁には、官位を賜はるなれば、かく云へるなり◎なしたまひそ　爲給ふなり。死ぬほどいやならば、宮仕を爲給ふなとな

り◉さはありとも　左様にてはあれどもなり◉などか宮づかへをし給はざらん　何故に、
宮仕を嫌ひて爲給はぬぞとなり◉死にたまふやうやはあるべき　死ぬといふ様なることは、
あるべきか、それほど嫌ふべき事にあらずとなり◉なほ、そらごとかとつかうまつらせて
姫の詞なり。私の云ふ言を、猶、虚言と思召さば、試みに、御奉公をさせて云云の意◉あまた
の人　前の五人の人々を云ふ◉おろかならざりしを　前にも云ひし如く、尋常一様にては
なかりしをの意なり◉むなしくなしてしてそあれ　空しくなしたれと云ふ意を強めて云ひた
るなり。空しくするとは、遇はぬことを云ふなり◉みかどののたまはんことにつかん　帝の
仰せに從はんはの意。つかんの下に、はの辭を入れて心得べし◉人ぎゝやさし　世間の人の
聞かんこと、耻づかしとの意◉とありともかゝりとも　と有りとも、かく有りとてもにて、
如何やうにてもの意なり◉御命のあやふさこそ、大きなるさはりなれ　宮仕に出さば死なん
と云はるゝが、御身の命の危きことは、何よりも大なる差支なりとの意なり◉まゐりて　宮
中へ參内してなり◉おほせのことのかしこさに　勅命の辱なさになり◉參らせんとて、仕う
まつれば　宮仕させんと、いろいろに勸めますればの意なり◉山にて見つけたる　見つけ
たるの下に、ものなりといふ詞を加へて心得べし◉かゝれば　それもゑの意◉こゝろばせ

心だてなど云ふに同じく、心の持ちかたを云ふ◉世人　尋常の人の意なり。

【譯解】さて、此の內侍は、かくまで、姫のこばむことなれば、せんかたも無く、歸ッて參
內して、此の趣を奏聞した。
帝は、之れを御聞きあそばして、
なるほど、强情の女ぢや。
此の强情な心が、即ち、今まで數多の人を殺した、おそろしい心ぢや
と仰せられて、一旦、此のことは、そのまゝになきねいりになッたが、やッぱり、かぐや姬を
見たいというおぼしめしで、おあンなされて、赫映姬の、色々とむづかしい事を云うのも、ま
ッたく、一時の彼れの作り事に相違ない。
どうして、此の女のはかりごとなどに負けて、むざむざ、だまされやうぞ、とおぼしめして、
今度は、竹取の翁を、宮中によび寄せて、取り次ぎの者を以て、仰せあそばすには、
そちが、持ッて居る、かぐや姬を朕に奉れ。
姬の容貌が、よい
と、聞こし召して、勅使をそちが家へ下されたけれど、其の甲斐もなく、とうとう、姬は、

あはずにしまッたわい。

かやうに、勅命を輕々しく、疎略に、心得習はしてよきか。甚、不都合であるぞ

と仰せらる。

竹取の翁は、畏れ入ッて、御返事申すやう

實は私共も、色々に心配もしますけれど、どうも、此の女のわらはゝ、一向に、禁中の御奉公まうすやうにもござりませぬので、持てあまして居ります。

さやうではござりますれど、退出致しまして、猶、とッくりと仰せごとを申し聞かせませう

と奏聞す。

帝は、これを御聞きあそばされて、仰せらるゝやう

どうして、翁の手で育てたものが、翁の思う通りにならぬ事があらうぞ。

かぐや姫のことは、翁の思う通りになる譯のものぢや。

此のむすめを、もし、さし上げたならば、翁には、五位の冠を、どうして下さらぬ事があらうぞ。

きッと、賜はるぞ

とうけたまはッて

翁は、喜ンで、すぐさま、家に歸ッて、赫映姫に、話すには

まァ御聞きめされ。

今日、御めしによッて、參內したれば、かやうにッ天子さまは、仰せあそばしたぞ。

此のやうに、勿體ない有難い仰せがあッても、そなたは、やッぱり、御宮仕はなさらぬ氣か

と云へば

赫映姫、答へて申すには

わらははは、とんと、さやうの御奉公は致しますまいと、思うのに、それを無理に、御奉公おさせなさるならば、しかたがありませぬ。わらはは、消えてなくなッてしまいませうぞ。

さうすりや、あなたに御官位を御つけ申して、わらはは死ぬばかりであります

と云う。

翁は、これを聞いて、びッくりして返答するには

まァ左樣な、短氣な事をなさるな。

どのやうに、有難い官位に就いても、そなたを見うしなッては、何にしやうぞ。

死ぬ程いやなら、宮仕はをよしなされ。
さうではあるけれども、なせに、そなたは宮仕を嫌うてなさらぬことぞ。
宮仕へをするに、お死になさる程のことがあらうかい
と云ふ。
かぐや姫
これほどまで申しても、やッぱり、わらはの云ふことを、虚言かとおぼすなら、ともかくも、御奉公をさせてみて、さて、わらはが、いよいよ死なずに居るかと、御ためしあそばせ。
きッと、死なずに居りませぬぞ。
現に、これまで、數多の人の、わらはを思うて下さる御こゝろざしは、ひと通りではなかッたのを、それをもむだにして、過いませなんだのであります。
それに昨日や今日、天子の仰せらるゝことに、御從い申しては、外聞が恥づかしう存じます
と云へば
翁、答へて云うには
世の中の事は、どうあらうと、かうあらうと、まゝよ、たゞ、そなたの御いのちのあぶない

と云うがサ何より大變な差支へぢや。
それでは、やッぱり、御宮仕は、えう仕りませぬと云う事を、參內して申さう
と云うて、參內して、申すやう
勅命の勿體なさに、是非あのむすめ(赫映姫)を參內致させうと思いまして、いろいろと勸めますれば、
むすめは
宮仕へに、無理に御出しなさるなら、死にませう
と申します
どうも、けしからぬ義でござりますが、實はあのむすめは、此の造麻呂が手で生ませました子でもござりませぬ。
昔、山で見つけましたものでござる。
それ故、心だても、尋常の人には似て居りませぬ。
どうも、困ッたしろものでござります
と、傳奏を以て、申しあげさせた。

みかど仰せたまはく、『みやつこまろが家は、山本ちかゝなり。御狩の御幸したまはんやうにて、見てんや』とのたまはす。造麻呂が申すやう、『いとよきことなり。なにか、こゝろもなくて侍らんに、ふとみゆきして、御覧ぜられん』と奏すれば、帝、にはかに、日をさだめて、御狩に出て給ひて、かぐや姫の家に入りたまひて、見たまふに、光みちて、けうらにて居たる人あり。これならんとおぼして、近くよらせたまふに、逃げている袖をとらへ給へば、おもてをふたぎてさふらへど、はじめよく御覧じつれば、たぐひなくめでたくおぼえさせ給ひて、ゆるさじとすとて、ゐておはしまさんとするに、かぐやひめ答へて奏す。『おのが身は、此の國にうまれてはべらばこそ、つかひたまはめ。いと、ゐておはしがたくや侍らん』とそうす。みかど、『などか、さあらん。猶、ゐておはしまさん』とて、御輿をよせ給ふに、此のかぐやひめ、きと、かげになりぬ。はかなく、くちをしとおぼして、げに、たゞ人にはあらざりけりとおぼして、『さらば、御ともにはゐていかじ。もとの御形となり給ひね。それを見てだにかへりなん』と仰せらるれば、かぐやひめ、もとのかたちになりぬ。みかど、なほ、めでたくおぼしめさるゝ事、せきとめがたし。かく見せつるみやつこ麻呂を、よろこび給ふ。さて仕へまつる百官の人々に、あるじ、いかめしうつかうまつる。みかど、かぐや姫をとゞめて、かへり給はんことを、あかず、くちをしくおぼしけれど、たましひをとゞめたる心ちしてなん、かへらせたまひける。おほんこしにたてまつりて、後に、かぐや姫に、

かへるさの　みゆきもの憂く　おもほえて

そむきてとまる　かぐやひめゆゑ